

大東亜秩序建設

大東亜秩序建設

著者序

【解説】一、本書は、復興亞細亞・大東亜秩序建設に対する大川博士の構想・信念を明示せる貴重なる文献である。本書は三篇より成る。

一、第三篇「亞細亞・歐羅巴・日本」は単行本（大東文化協会刊）として大正十四年（一九二五）の著作であつて、世界史は東西両洋の対立・抗争・統一の歴史である所以を明らかにして復興亞細亞に論理的根拠を与え、世界新秩序実現としての復興亞細亞の世界史的意義を闡明して日米戦争必至を明言している。

この著作は博士の復興亞細亞に関する基礎史観として重要なものであつて、独立の単行本扱いにして扉を附して収録すべきものであるが、さきにふれておいた（印度国民運動の由来解説）ように重複をさけてここに採録した次第である。

一、第一篇「大東亜秩序の歴史的根拠」は、佐藤信淵の「存華挫狄」より説き起し明治・大正・昭和三代を通しての日本の大陸政策の基調を探り、遂に大東亜戦争によつて其の実現を見るに至つた大東亜秩序の建設の経緯を述べたものである。

ここに重視すべきところは、「対米英戦争にまで発展した支那事変は、第二次世界戦争の連環の一つとして、世界戦争そのものの処理と共に解決せらるべきものとする意見」に対し博士は、かかる意見には「首肯し得ず」として、「大東亜戦争は事実によつて支那事変の性格を一変し、之を以て東亜に於ける一個の内乱たるに至らしめた。吾等は一刻も早く此の内乱を鎮定してこそ初めて大東亜戦争の完遂を期し得るのである。」いま日本はアングロ・サクソンの世界幕府を倒して亞細亞復興のために獅子奮迅する時、日支両国は曾て薩長が相争える如く相争つてゐる」として復興亞細亞の本義を宣明し、而して「大東亜建設は亞細亞的規模に於て行われる第二維新である。そは慘憺たる経営に終生を托して一身を國事に倒したる幾多先輩の志業を完うするものである。天上に物見人多し、幽魂みな憑現する。後代に志士あり長く當年に鑑みんとする。吾等は必ず此の大業を成就せねばならぬ」と結んでいる。

一、第二篇「大東亜圏の内容及範囲」は、支那・印度・東北及東南アジアに於けるアジア諸民族の思想文化を究明して東洋文化を確立し、東亜新秩序の精神的基礎たるべき東洋精神を闡明している。後掲の「新東洋精神」に照應するものである。

序

過去一年間の間、予は諸處に於ける十数回の講演に於て、専ら大東亜秩序建設の根拠を明かにするに努めて來た。いま其等の講演に於て吐露せるところの精神を、主として力を注げる目標に従つて二篇の文章に纏め、一を『大東亜秩序の歴史的根拠』と名づけ、他を『大東亜圏の内容及び範囲』と題した。前者に於て予は東亜新秩序の理念が、決して支那事變以後に発案せられたる軍事的標語に非ず、夙く既に明治維新前夜に於て、幾多の先覚者によつて堅確に把握せられ、維新このかた三代を通じて常に日本大陸政策の基調となり、遂に大東亜戦争によつて其の実現を見るに至りし経路を辿つた。而して後者に於ては、所謂大東亜圏とは如何なる地域を意味するか、その地域に於て如何なる民族と文化とが興亡起伏せるか、日本は大東亜圏と如何なる関係に立つかに就て、予の考へ且信ずるところを述べた。予は前後両篇に於て、大東亜新秩序の建設といふことが、決して單なるスローガンに非ず、日本及び東亜の民族によりて、最も真摯なる生活の問題と切実なる課題とを含むものなることを明かにせんとした。

第三の『歐羅巴・亜細亜・日本』は、大正の末年、空虚なる國際主義や巾幘的平和論が一世を風靡せる時に當り、第一には戦争の世界史的意義を提示し、第二には言葉の真個の意味に於ける世界史とは、東西両洋の対立・抗争・統一の歴史に外ならぬことを示さんとし、第三には世界史を經緯し来れる如上両者の文化的特色を彷彿せしめんとし、第四には全亜細亜主義に向つて論理的根拠を与へんとし、最後に第五には来るべき世界新秩序実現のために戦争の遂に避け難き運命なることを明かにし、日米戦争の必至を述べたるものである。二十年以前の旧著であるが、前両篇の論旨を補充するものなるが故に、更めて之を輯録した。

昭和十八年六月

大川周明

大東亜秩序の歴史的根拠

一 明治維新前夜に孕まれたる大東亜理念

若し予が日本近代史を書くことありとすれば、予は佐藤信淵の思想の叙述から筆執り初めるであらう。そは此の偉大なる学者の魂の中に、新しき日本が既に最も具体的なる姿をとりて孕まれて居たからである。

幕末日本の墮落・沈滯を、恐らく佐藤信淵ほど切実深刻に看取して居た者はない。政治家の無能、町人の放肆、農民の困苦、一として彼の心を痛ましめざるはなかつた。彼はまた当時の何人よりも善く西洋諸国の富強を熟知して居た。さればこそ彼は謙遜にして勤勉なる弟子として、西欧文明の摄取のために蘭学に刻苦すること前後八年の長きに及んだ。故に彼は世界の事情に關して殆ど誤りなき知識を有し、西洋諸国の武器の精銳、その戦艦の強大を知り、世界地図の上に於て日本が有るか無きかの一小列島にすぎぬことを知つて居た。而して西洋諸国が恐るべき野心を抱いて東亜に殺到しつつあることをも知つて居た。彼は日本の内憂外患が、人力を以て打開し難く思はれるほどの危局に当面せるを見て、並居る門人の前で「嘆哀しいかな哀しいかな」と長嘆することさへあつた。而も彼は表面一切の腐敗・糜爛の背後に潜む莊嚴なる日本精神を把握した。而して此の精神によつて学び、信じ、且行つた。彼は今を距る百年以前、夙く既に日本の根本動向を洞察し、其の進路を的確に指示して居る。命脈絶えなんとする幕末封建の空氣を呼吸し乍ら、彼の精神には全く新しき日本が孕まれて居た。

佐藤信淵は、先づ日本を以て『世界の根本』となし、若し日本が能く『其の根本を經緯』するならば、世界を以て

悉く吾が郡県たらしめ得べしと信じた。彼は此の『世界を一新する大業』を遂行するために、最も徹底せる日本国内の政治的革新と、万国統一の順序とを説いた。彼は『皇國より他邦を開くには、必ず先づ支那國を併呑するより擧むることなり。……支那の強大を以て猶ほ皇國に敵すること能はず、況や其他の夷狄をや。……支那既に版図に入るの上は、其他西域・暹羅・印度亜の國、……漸々に徳を慕ひ威を畏れ、稽颡匍匐して臣僕に隸せざることを得ん哉』とし、且支那を経略するためには『満洲より取り易きはなし』とした。同時に彼は歐羅巴列強、わけても『暗厄利西』の北上に備へるため、フィリピン群島を手初めとし『南海數千里の地』を悉く吾が版図とし、かくて『支那・安南・占城・東坡塞』として印度地方及び印度海中の諸島を漸々に経略』せねばならぬとした。而して彼は、此の雄渾無比なる世界政策の実現のために、理想國家の組織制度を巨細に立案し、わけても其の經濟的方面に於て、最も強力なる国家統制の下に立つ厚生經濟政策を樹てた。歐羅巴に於てさへ、近世ユートピア社会主義思想の未だ生れ出でなかつた時に、是くの如き徹底せる経済体制を創案せることは、彼の魂が如何に自由であり、彼の頭脳が如何に独創的なりしかを示すものである。当時の東洋に於ては、支那にも印度にも、斯かる莊嚴なる規模に於て國家と世界とを考へた者は、唯だの一人も居なかつた。

佐藤信淵が支那の『併呑』を主張したことは、恐らく支那人の耳に快く響かないであらう。而も信淵の大陸政策又は領土拡張論は、近代歐米資本主義國家の無理想なる植民地征服主義と、全く其の本質を異にして居る。彼の至心に志せるところは『世界万国の蒼生を救済すべき產靈の教』を以て、天下の民草の苦しみを救ふことに外ならなかつた。故に其の併呑とは、支那を日本と同様なる政體体制の下に置き、『昊天の神意を奉り、食物衣類を豊かにし黎民を安んずるの法』によつて、万世人君の模範たる『堯舜の道』を實現するといふ意味であつた。彼は永眠の前年に『存華挫狄論』の一書を著して居る。此書は其の題名が既に物語る如く支那を存して狄を挫くべきことを高調せるも

のにして、狄とは取りも直さずイギリスを指せるものである。彼は英國がモーガル帝国を亡ぼして印度を略取してより、更に侵略の歩武を東亞に進め來り、遂に阿片戦争の勃発を見るに至つたが、若し清國にして此の戦敗に懲り、大いに武備を整へて失地を回復すればよし、然らずして今後益々衰微するならば、禍は必ず吾國に及ぶであらうと洞察し、支那を保全強化して英國を挫き、日支提携して西洋諸国の東亞侵略を抑へねばならぬと力説したのである。彼の謂はゆる併呑が、決して侵略征服の意味でないことは、之によつて観るも明瞭であらう。

信淵の是くの如き思想は、儒学・蘭学の素養に加ふるに国学の研究から生れたものであり、甚だ多くを平田篤胤の學問に負へることは、主著『經濟要録』の序言に於て彼自ら語るところによつて明白である——『予既に隠者となりて、郷人平田篤胤等が唱ふる所の皇國古道の學に従事し、深く天神地祇の遺說を精究するに、本正しく末明かにして天地の万物を化育するの理、渙然として解釈することを得て、以て家學を成就するに至れり。』国学は言ふまでもなく日本獨創の哲学であり、近代日本の国民的統一の最も重要な基礎理念の一つである。而して此の理念が、既に明治維新の前夜に於て、夙くも国内の政治的革新と相並んで、東亞統一の理想を國民の心に抱かしめたことは、吾等の最も記憶せねばならぬ事實である。東亞新秩序又は大東亞共榮圏の理念は、決して今日事新しく発案されたものでないそは近代日本が国民的統一のために起ち上れる其時から、縋々不斷に追求し来れるものに外ならない。

さればこそ明治維新の志士は、尊皇攘夷の標語の下に、日本の革新と亞細亞の統一とを、併せて同時に理想とした。吉田松陰は久坂玄瑞に与へたる書簡の中に『蝦夷を墾き、琉球を收め、朝鮮を取り、滿洲を拉し、支那を抑へ、印度に臨み、以て進取の勢を張るべし』と書送つた。眞木和泉は大原三位に上りし献策及び西郷南洲に送りし書簡の中に、日本は朝鮮・琉球を版図に收め、滿洲・清國を外藩とし、以て歐米の侵略に当らねばならぬと述べて居る。平野二郎は島津久光に上りし『尊攘英断錄』に於て、同様の意見を烈々火の如き文章を以て高調して居る。徳川幕府内

部に於ても、有為の士が抱懐せる対外政策は、東亞の統一を積極的理想とせる点に於て、討幕志士と異なるところ無かつた。後に謂はゆる日本の大陸政策となりて現れ、遂に今日の大東亞共榮圈の建設にまで具体化された理念は、實に明治維新の前夜に於て、夙くも当時の先覚者によつて把握されて居たのである。国民の魂に深く且強く根を下ろして居た此の理念があればこそ、日本の大陸政策は、内外幾多の難局に当面したに拘らず、之を全体より観れば歩々積極的に解決し得て、遂に今日に到つたのである。

二 明治維新以後に於ける大東亞理念の追求

明治維新は、いふまでもなく尊皇攘夷を二大綱領とした。攘夷論はもと開港論に反対して起れるものである。然るに徳川幕府の大政奉還によつて、尊皇の大義は一応実現されたけれど、開港は啻に其役に続きたるのみならず、天皇が外人に謁見を賜はるようになつたので、昨の攘夷は一朝の夢と消え去つたかの如く見えた。現に明治新政府に向つて、鼓を鳴らして其非を責めた者もある。併し乍ら、攘夷と開港とが相容れざる如く見えるのは、つひに表面皮相のことであり、鎖国は唯だ攘夷の消極的半面に過ぎない。攘夷の真個の意義は『万里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富嶽の安きに置かんことを欲す』と宣へる明治元年の大詔に於て、最も適切に言ひ尽されている。而して此の精神は、既に述べたる如く、佐藤信淵以来維新先覚の魂に明白に孕まれて居た。かくて攘夷の積極的半面即ち國威宣布の理想は、大陸政策の名の下に着々実現されて往つた。

日本は先づ琉球の所属問題を解決して之を確實なる領土となし、琉球を廢して沖繩県を置いた。幾多の糺余曲折の後に韓国との間に特殊の親善關係を結んだ。日清戦争によつて台灣を版図とした。日露戦争によつて明治初年に失へる樺太の南半を回復し、且南滿の諸權益をロシアより接収した。次で日韓合邦によつて鷄林八道の蒼生を皇民

とした。而して最後に満洲事変によつて、満洲帝国の建設を見るに至つた。

日本の是くの如き發展は、決して單なる領土的野心の追求でない。吾等の最も銘記せねばならぬ一事は、それが常に東亜新秩序確立のための準備として行はれて来たといふことである。近代日本の先覺者は、繰返し述べたる如く、単に日本国内の政治的革新を以て足れりとせず、近隣諸国の改革をも實現し、相結んで復興亞細亞を建設するに非ずば、明治維新の理想は徹底すべくものもないと確信して居た。それ故に維新精神の誠実なる繼承者は、實に燃ゆる熱情を以て隣邦の事を自國のことの如く考えてきた。頭山翁は『南洲先生が生きて居られたならば、日支の提携なんぞは問題ぢやない。實にアジアの基礎はびくともしないものになつて居たに相違ないと思ふと、一にも二にも歐米依存で暮して居た昔が情けない』と長嘆して居る。其の大西郷は常に下の如く言つて居た——『日本は支那と一緒に仕事させねばならぬ。それには日本人が日本の着物を着て支那人の前に立つても何にもならぬ。日本の優秀な人間は、どしどし支那に帰化してしまはねばならぬ。そして其等の人々によつて、支那を立派に道義の国に盛り立ててやらなければ、日本と支那とが親善になることは望まれぬ』

その大西郷が征韓論に敗れて薩南に歸臥せるころ、年少海軍士官曾根俊虎は、フランスの安南に対する野心を看取して、同志を糾合して興亜会を起し、一身を比國のために拠たんとした。明治十八年、朝鮮の秕政を一挙に革めて、鶴林八道の民を塗炭の苦しみから救ふために、爆弾を抱いて海を渡らんとせる一団の同志のうちには、妙齡十九歳の一女性さへも加はつて居た。明治十九年、同志三十余名と共に支那に於て活動を始めた荒尾精が、其の本拠たる漢口樂善堂の二階に掲げたる綱領は、下の如きものであつた——『吾黨の目的は、東洋永遠の平和を確立し、世界人類を救済するに在り。その第一着手として支那改造を期す』而して辛苦十年、台灣の逆旅にベストに冒され、貴くして短き三十八年の生涯を終へんとした時、昏々悪熱の間に彼が遺せる最後の叫びは、實に『嗚呼東洋が、東洋が』といふ

悲壯なる言葉であつた。

それ故に変法自強の運動が支那に起つた時も、また滅滿興漢の革命運動が起つた時も、日本は満腔の同情を以て之を援けた。其の援助は、支那の復興を切望する以外、また他意なかつた。而して支那の復興を切望せるは『偕に手を携へて東洋保全の事に従ふ』ためであつた。明治二十九年、密かに横浜に亡命し来れる無名の孫文を、如何に日本は温かに庇護したか。中山といふ彼の号さへも、當時横浜より彼を東京の旅館に案内し来れる平山尾が、途上中山侯爵邸前を過ぎたるより思ひつきて、仮に宿帳に書きたるに由来せるものである。今日の国民党が其の組織の基礎を築いたのは東京に於てであり、孫文が支那革命の指導権を握るに至つたのは、實に日本の先覚者の無私なる援助によるものである。而も其の援助は、決して單なる主觀的同情たるに止まらず、幾多の志士が自ら支那に渡りて或は屍を戦場に曝し、或は支那革命のために終生を擧げて一切の艱難を厭はなかつた。彼等の心には支那と日本との隔ての垣がなかつた。支那と日本とを併せたる広大なる地域が、彼等の活動すべき舞台、同感の空氣を呼吸し得べき場所であつた。彼等に取りては、日本の国民的統一と支那の復興、及び両者の結合による東亜新秩序の実現は、一體不離の課題であつた。亞細亞の迫るべき此の運命を、亞細亞の孰れの国よりも先んじて自覺し、そのために拮据經營し、且そのために最も多くの犠牲を払つて來たからこそ、大東亜共榮體の指導権が日本に与へられるのである。

いま吾等は、亞細亞の桂冠詩人にして印度の忠僕たりしラビンドラナート・タゴールが、既に二十年以前にマンチエスター・ガーディアン紙の特別通信員に向つて、憚るところなく日本は当然亞細亞の指導者となるであらうと公言して、下の如く告げたことを想起する——『日本が亞細亞を糾合し、且之を指導するを以て國家の使命と考へることに何の不思議もない。歐羅巴諸國は其間に幾多の相違あるに拘らず、その根本的觀念並に理解に於て正に一国である。彼等の歐羅巴以外の國民に対する態度は、之を一大陸といはんよりは寧ろ一國といふを至当とする。例へば仮に

蒙古人種にして歐羅巴大陸の片土を犯すとせよ。然らば全歐は挙つて之が撃退に協戦するであらう。日本は孤立することができぬ。日本一國を以て聯合せる歐羅巴列強と角逐するは、偶々其の滅亡を招ぐ所以である。さればとて日本は真個の味方を歐羅巴に求めるることは難い。然りとすれば日本が其の味方を亜細亜に求めるることは当然である。日本が自由なる暹羅、自由なる支那、而して恐らく自由を得ずば止むまじき印度と提携するに何の不思議があるか。提携して起てる亜細亜は、仮に西亜のセム民族の協力を除外しても、まことに力ある聯合である。固より是くの如きは遠き将来のことであらう。その実現には幾多の困難が横はるであらう。言語の相違、交通の困難も障碍とならう。さらながら暹羅より日本に至るまで、其處には親近なる血縁がある。印度より日本に至るまで、其處に共通なる宗教あり哲学がある』と。最も激しき支那の抗日要人も、恐らく其心の奥底に於て、タゴールの言葉に含まれたる眞実を肯定するであらう。

三 日清日露両役の世界史的意義

支那の愛国者は『支那は十九個國の半植民地たる状態に在る、植民地は唯だ一人の主人に事へれば足る、吾等の主人は十九人だ』と悲憤する。而も是くの如き状態を招ぐに至りし支那自身の責任に就ては、毫も深刻に反省せざるのみならず、今尙ほ前車の覆轍を踏まんとして居る。

先づ日清戦争を回顧せよ。此の戦争は何故に戦はれたか。そは表面に於ては日支両国の戦争であるが、その本質に於ては歐羅巴の東亜侵略に対する日本の第一次反撃であり、日本は歐羅巴侵略主義の手先たりし支那に対して、武力的抗議を敢行したのである。長く鎖国状態に在りし朝鮮が、明治初年より其国を開いた。やがて京城に於ける歐米列國の外交代表は、亜細亜の他の国々に於て為せると同じく、朝鮮に於ても独占的利権の獲得及び政治的勢力の扶植を

目指して、凡ゆる陰謀を逞しくした。彼等は其の常套手段を用ひて、朝鮮の内政紊乱と人民の反抗とを使嗾した。京城の外国公使館は、かくして陰謀の策源地となり、政治犯人の避難処となつた。併し乍ら朝鮮半島を歐米の一国に委ねることは、日本に取りて匕首を心臓に擬せられるに等しき脅威である。それ故に日本は、朝鮮に地歩を築かんとする歐米の凡ゆる策動に反対した。

此時に当りて日支両国は、歐米の東亞侵略に対し、矧結んで共同戦線を張るか、然らずば互に敵国となるか、二者其一を択ぶべき関係に置かれて居た。而して支那の腐敗せる政治家は、愚かにも後者を択んだ。一身あるを知りて國家あるを知らず、如何に況んや東亞の興廃の如きは其の念頭にも置かざりし彼等は、朝鮮を護るために非ず、實に朝鮮を売るために、朝鮮に対する宗主権を主張した。而して朝鮮政府に詢ることなくして、北鮮の沿海地帯をロシアの海軍根拠地として割譲し、朝鮮海峡の要衝巨文島のイギリス占領を承認するに至つた。日清戦争は是くの如くにして誘発された。そは支那を傀儡とせる歐羅巴の朝鮮侵略に対し、國家の安危を脅される日本人の反撃に外ならなかつた。

日清戦争が歐羅巴の東亞侵略に対する日本の反撃なりとすれば、戦後の三国干渉は来るべきものが来ただけである。而も東洋平和の名に於て露独仏三国を日本に干渉せしめながら、日本より奪回せる遼東半島を直ちにロシアに与へることを密約せる李鴻章及び常蔭桓が、それぞれ五十万金ルーブル及び二十五万金ルーブルの賄賂を受取つたことが、無慚にもヴィツテの『回想録』に暴露されて居る。ロシアが黄金を以て支那政治家を買収したのは、恐らく此時が初めてではなかつたらう。愛璉条約によつて黒竜江以北の広大なる地域を獲得した時も、また北京条約によつて烏蘇里江東・黒竜江南、即ちウラジオストックを含む今日の沿海州を獲得した時も、支那政治家に多額の贈賄が行なはれたことであらう。独りロシアのみならず、其他の列強もまた同一手段を用ひなかつたと誰が保証し得るか。イギリ

スと緬甸国境条約を、フランスと南方境界条約を結ぶ時も、恐らく同様の醜き取引があつたであらう。清朝末期の政治家が、歐羅巴列強の贈賄を受けて、自國の領土並に権利を彼等に売り、彼等の勢力を東亞の天地に誘致して顧みざりしことは、如何なる弁護をも許さぬ政治的罪悪である。

日清戦争及び三国干涉は、清末政治家の亞細亞の運命に関する無自覺と不純極まる動機によつて誘発されたものである。かくて三国干涉は、日本に対してより支那自身にとりて一層大なる禍であつた。そは日本にとりては暫時の退却であつたが、支那にとりては歐羅巴列強のために領土分割の楔を打込まれたるに等しかつた。日清戦争を通して支那の無力と腐敗とを確實に知り得た列強は、いまや此国に対して如何なる遠慮の必要も認めなくなつた。當時年少の陸軍大尉、後に西藏遠征によつて世界に其名を知られたる英國軍人ヤングハズバンドは、支那は土地広く物多く、而も最も人の住むに適する温帶に位して居る、是くの如き地域を一民族の占有に委ねて置くことは神意に背く *Against God's will* とさへ公言した。アングロ・サキソン人が太陽没せざる領土を擁して幾億の蒼生を奴隸とするを見認し、支那人が其の故国に住むことを怒るとすれば、ヤングハズバンドの神は不思議至極の神である。但し列強のうち最も露骨に其の野心を遂行せんとしたのはロシアであつた。ロシアは番に滿洲に占拠して支那本部の侵略を意図せるのみならず、朝鮮半島を奪取して吾国を脅威せんとした。それ故に日本は敢然起つてロシアと戰ひ、見事に其の野望を挫いた。若し日露戦争に於ける日本の勝利なかりせば、滿洲と朝鮮とは確実にロシアの領土となり、支那本部もまた列強の俎上に料理され尽し、恐らく北京にロシアの極東總督府が置かれことになつたのであらう。

かくして日露戦争は、歐羅巴の東亞侵略に対する日本の第二次反撃であると同時に、直接ロシアと戰ひて之を破れることによつて、亞細亞諸国の覺醒を促す警鐘となつた。奉天の会戦は、古へのサラミスの戦、又はトゥール・ボアティエの戦に比ぶべき深刻なる世界的意義を有することが、年と共に明瞭になつた。誠に日露戦争に於ける日本の勝

利によつて、世界史の新しき頁が書き初められたのである。日本のロシアに対する勝利は、四百年来侵略の歩みを続けて、未だ曾て敗戦の辱しめを異人種より受けざりし歐羅巴に對する最初の而して手酷き打撃であつた。彼等の長き間の勝利の歩みは、此時に於て最初の蹉跌を見た。此事は白人圧迫の下に在る諸国に希望と勇氣とを作興し、列強横暴の下に苦しむ諸民族に理想と活力とを鼓吹した。日本の名は、冬枯れの木々に春立ち帰りて動き来る生命の液の如く、總じて虐げられ辱しめられたる民の魂に、絶えて久しき希望の血を漲らしめた。

亞細亞人の亞細亞といふ合言葉が、いつとはなしに東洋諸民族の間に唱へられ始めた。印度の家々の神壇に、彼等の宗教改革者ギューカーナンダの肖像と相並んで、明治天皇の御真影が飾られた。印度不安は此頃より漸く英國政府の憂慮の種となり、印度駐屯の英國軍隊は、日曜の礼拝も小銃には弾丸を込め、剣は鞘を抜つたまま行はれるやうになつた。ペルシアの新聞は、テーランに日本公使館の設置、日本将校の招聘、日波貿易の促進を高調し『強きこと日本の如く、独立を全うすること日本の如き國家となるために、ペルシアは日本と結ばねばならぬ。日波同盟は欠くべからざる必要になつた』と力説した。エジプトに於ける國民主義の機關紙アル・モヤドは、日本が回教國たらんことを切望し『回教日本の出現と共に、回教徒の全政策は根本的に一変するであらう』と論じた。エジプトの独立運動、トルコ及びペルシアの革命運動、印度の独立運動、及び安南の民族運動など、一として日露戦争による亞細亞覺醒の現れならざるはない。

当時に於ける彼等の感情を、最も切実に表白せるものは、エジプトの國民主義者ヤヒヤ・スイツディクが其著『回暦第十四世紀に於ける回教諸国の覺醒』を結ぶる下の文章である——『堅く信せよ、希望せよ、希望せよ、希望せよ。吾等は明かに一步を踏み出した。吾等をして茲に出でしめたるは、實に歐羅巴の横暴其ものに外ならぬ。而して吾等の進歩を促し、必然吾等の復興を促すものも、また實に歐羅巴との不斷の接觸である。そは簡単明瞭に世界史の循環

である。神意は一切の障礙を打破して、必ず其の実現を見ずば止まぬ。歐羅巴の亞細亞に対する監督は、日日に名目のみとなり、亞細亞の諸々の鉄門は、彼等に対して鎖ざされつゝある。吾等は世界史の未だ曾て知らざる革命の出現を、明白確實に吾等の前に洞見する。げに新しき世は近づいた』と。

日露戦争は、東洋諸国の覺醒を促したと同時に、西洋諸国に対しても深刻なる实物教訓を与へた。例へば此の戦争に於てコサック軍に従軍して日本の捕虜となれる一イギリス人は、其の『従軍記』の中に下の如く述べて居る——『曾てはロシア兵のために獸畜の如く待遇され虐使された滿洲の支那人は、奉天会戦後豚の如く無蓋車に積まれて、矮小なる日本兵に監視され乍ら、陸續として南方に送られる多数のロシア兵を目撃し、或は停車場附近の露天の垣根の中に密集して収容されて居るロシア捕虜を実見して、これまで彼等が受けてきた人種的差別待遇の道理なきことを知つた』と。また同じくこの戦争に従軍し、最初に日本に上陸せるロシア捕虜を見るために雲集せる日本人の態度を目撃せる一フランス記者は、其著『太平洋の爭霸』の中に、躍動する筆致を以て、彼及び總ての白色人に与へたる當時の光景の深刻なる印象を、下の如く記して居る——『そは矮小なる日本人が甚だ厭惡せるロシア人否歐羅巴人である。此等の巨大なる素晴らしい者どもが、是くの如く辱しめられて居る光景を見ることは、日本人に取りて何たる勝利、何たる復仇であらう。此の瞥見されたる悲劇の場面、喜悦の中の悲痛、比の思ひのままに戦勝氣分に湧立てる黄色人種の前を、隊伍を組んで進み行く此等の辱しめられたる白色人種の捕虜、此の光景は日本によつて打破られたるもののはロシアでないこと、他國民による一國民の敗北に止まらぬことを示して居る。そは新しき、非常なる、驚くべき事である。そは一つの世界に対する他の世界の勝利である。そは亞細亞が屈辱を忍べる数世紀を抹殺せる復仇である。そは東洋の覺醒しつつある希望である。そは多年に亘りて他の人種に無造作に勝誇りし呪はれたる西洋人種に対する最初の打撃である。其處に居た日本人群衆は此等の総てを感じて居た。而して居合せた少數の亞細亞人も、ま

た此の戦勝気分を味はつた。白人の受けたる屈辱は、嚴肅にして恐怖すべきものであつた。予は此等の捕虜がロシア人なることを完全に忘れ去つた。而して予は、其處に居合せた他の欧羅巴人が、反ロシア的ではありながら同一の屈辱を感じたことを附言したい。彼等もまた此等の捕虜が、彼等と同一人種に属することを感じざるを得なかつた。神戸に向ふ列車の中で、一の本能的連帯感が、吾等を認りて同一室内に寄り集まらせた』と。かくして彼は、非白人のためには暁の鐘であり、白人のためには入相の鐘なりし日露戦争に、既に諸行無常の響きを聞き、欧羅巴世界制覇の漸く影薄からんとするを看取して、下の如き警告を同書の中で与へて居る——

『現代欧羅巴は、日露戦争の教訓を学ぶ用意なく、また之を理解もしない。其日暮らしの政策に満足し、綜合的識見即ち精神主義を無視し、目前の利益に安心し、遠大の計画を樹て得ないのが、現代欧羅巴の本質よりくる当然の結果である。今日の欧羅巴に於て、何処に協同の原理を求め、何に協力の基礎を置くことが出来るか。余りに多くの異なる利害関係、余りに多くの相容れざる野心、余りに根強き嫉妬憎悪、余りに跋扈する魂なき人間、此等のものが相結んで欧羅巴精神の真個の声を葬る。日本の実力は、その聯隊と軍艦とに存せず、實に欧羅巴の不和に存する。然り、欧羅巴諸国に眼前の利害を超える一個の理想なきこと、共同の感情に其胸を躍らしめ得ざることに存する。まことの黄禍は實に潛んで吾等の脣に在る』

日露戦争以後の欧羅巴は、まさしくルネ・ビノンが憂へたる方向をとりて進み、遂に其後十年ならずして欧羅巴大戦の勃発を見るに至つた。欧羅巴大戦は、古のギリシアに於けるペロポネソス戦争に比ぶべき欧羅巴の内乱であつた而してペロポネソス戦争がギリシア文明の自殺、その没落の前提なりし如く、欧羅巴大戦は實に欧羅巴霸權没落の前提となつた。此の悲惨なる戦争によつて、欧羅巴は其の長所と共に其の欠点をも遺憾なく暴露した。かくて其の世界的霸權に対する昔日の自信が漸く動搖し初め、欧羅巴の前途を悲観する幾多の著書が、相次いで公けにされるに至つ

た。試みにその一二を挙ぐればストッダードの『有色人の昂潮』、ミヨレの『白人の黄昏』、グレゴリの『有色人の脅威』、ドマンジョンの『歐羅巴の衰頬』、ライスの『亞細亞の挑戦』、ラパートの『黃禍論』、ショベングラーの『西洋の没落』等がある。

四 アングロ・サキソン世界制覇機関としての國際聯盟

もとより歐羅巴には多くの偉大なる思想家あり、勇健なる精神主義者がある。フランスの一哲人は、世界戦の将に終らんとするころ、既に下の如き言葉を以て切実痛烈に歐羅巴を警めて居る――

『歐羅巴を腐敗せしめたる禍根は、實に歐羅巴が世界の独裁者たるべき神聖なる使命ありと考へたことにある。世界は長く歐羅巴の独裁に苦しんだ。而して万国の主が暫く之を許したのは、歐羅巴をして若干の福利を世界に弘布させたためであつた。然るに歐羅巴の所有せる至上の宝即ち科学は、今や万国みな之を所有するに至つた。故に若し今後歐羅巴を擧げて亡び去ることありとしても、人類は之によつて何等根本的に失ふところがない。是れ實に歐羅巴の時代が將に去らんとする所以である。

『歐羅巴は新に生れて新しき生命を獲得するために、深く自ら反省して、四方に分散せる自己の力を集約せねばならぬ。而して今こそ實に其時である。他を縛り且自らを縛れる羈絆を解くべき時である。而も歐羅巴は遂に断行を肯んじない。それ故に其の支配の力は分散し、却つて己れ自身に向つて加へられんとして居る。見よ、曾ては他国に加へたる剣戟が、いまは却つて己れに加へられんとして居る。見よ、他国のために作れる鉄鎖が、いまは却つて己れの上に落ちて其頸を縛らんとして居る。

『孰れの交戦國も、真個の戦争目的を聲明しない。而もいま歐羅巴を頽廃せしめつづある戰ひは、全地を擧げて己

が領有たらしめんとするための必死の決闘である。この決闘は敵と味方とを等しく死に至らしめずば止まない。そは彼等の死滅によつて人類を蘇らしめるためである。

『此の大戦は洵に彼等が声明する如く解放のための戦ひである。唯だ解放の意味が、彼等の解するところと異なるだけである。いまの解放は、往年の亞米利加に於ける黒人の解放の如きものに非ず、實に一切有色民族の解放である。

『植民帝国、これ實に歐羅巴にとりて致死の罪惡である。この罪惡のために歐羅巴はいま地獄の火に投げられて居る。それ故に此の苛責を脱せんとするならば、その隸属の民を解放せねばならぬ。いま歐羅巴が投げ入れられたる煉獄は、曾て彼等が他国を投げ入れたる其の同じ煉獄である。此の地獄の火、いま彼等の五体を焦く。』

併し乍ら歐羅巴は、此等の予言者の声に耳傾け、深刻なる反省によつて正しき道を踏まんとしなかつた。大正六年六月二十八日、ヨルサイユ宮殿鏡の間に於ける対独媾和条約の調印を以てパリ平和会議は終了し、第一次世界戦争は一応終局したけれど、それは昔に旧き問題に解決を与へざりしのみならず、一層紛糾せる幾多の新しき問題を惹起した。世界戦は『戦争を止めるための戦争』と呼号せられたるに拘らず、世界戦を惹起せる根本の諸原因は毫末も除き去られなかつた。平和会議が尙ほパリに於て進行しつつありし間に、イギリスのハルデーン卿はブリストル大学の卒業式に臨み、戦後イギリスを負荷すべき青年に向つて、世界戦の最大の教訓は『イギリスが次の戦争に備へねばならぬといふことだ』と演説して居る。それ故に此の平和は、二度の行軍の間に暫く諸国民を休息せしむべき一停歩に過ぎなかつた。

さて、歐羅巴大戦以後の秩序を維持するために組織されたのが、取りも直さず國際聯盟である。國際聯盟は、一つは曰く、一つは新しき、二つの相異なる思想感情の所産であつた。第一は戦争の悲惨に対する世界的反感であり、是

くの如き禍悪を再びせぬために、何等かの方法が講ぜられねばならぬといふ要求が、諸國の民衆の間に強烈に擡頭した。第二は勝利者の利己的動機であり、甚大なる代価を払つて獲得せるものを永久に確保するために、何等かの組織を立てねばならぬといふ欲求が、戦勝国指導者の精神を支配した。國際聯盟は此等の二つの要求に応へるために企てられたものであるが、両者の矛盾は幾くもなくして明かになつた。勝利に満足せる国家は、現状維持が平和維持のための最善の途であると主張した。聯盟規約は満足せる国家によつて起草し解釈された。かくして國際聯盟は圧制者のシンヂケート、帝国主義諸國家のトラストたるに至つた。一層具体的に言へば、國際聯盟は、大正八年ドイツが聯合国に降伏せる時の其姿の状態、聯合国の中軸たりし英仏両国が、ドイツ降伏當時に領有して居た国土及び資源を、永久不変の状態に置かんとする機關たるに至つた。そは取りも直さずアングロ・サキソン世界制覇の現状を、永久に釘付けするための機關たることを意味する。

さてアングロ・サキソン世界制覇に対し『不屈至極なる挑戦』を試みたるものは、いま一敗地に塗れたるドイツに外ならぬ故に、國際聯盟は人間の考へ得る一切の方法を以てドイツの復興を不可能ならしめんとした。謂はゆるエルサイユ体制は、弱体無力のドイツの礎の上に、歐羅巴平和の殿堂を築かんとせるものである。之と同時に國際聯盟は、世界戦争に於て失ふところ最も少なく、得るところ最も多しと考へられたる日本を抑圧することを以て、第二の重大なる目的とした。世界戦中に日本の商品が飛躍的に世界市場に進出したこと、東亞に於ける日本の地位が頓に拡大強化されたことは、アングロ・サキソン世界制覇に対する危険なる脅威であつた。さればこそ英米は、休戦喇叭の尙末だ鳴り止まぬうちに、夙くも日本を第二のドイツと呼び、其の抑圧に必死となつた。西に於てはドイツ、東に於ては日本、英米の最も憎み且恐れたものは此の両国に外ならなかつた。

英米がドイツを憎むのは、彼等の霸権を覆さんとせる当面の敵なりし以上、決して道理がないとは言はぬ。唯だ日

本を憎んで之を抑圧せんとするに至つては、沙汰の限りと言はねばならぬ。日本は啻に青島を攻略して東洋に於けるドイツの根拠を覆せるのみならず、其の精銳なる海軍を以て東洋・南洋の全海面を警護し、更に地中海より南米沖にまで出動して、聯合国側に甚大なる貢献をなして居る。然るに其の詳細に就ては、從来殆ど世に知られていない。予もまた竹越三又翁の『日本の自画像』を読みて初めて之を知り得た。即ち之を左に引用して、如何に日本が忠実に聯合国側のために尽したかを示し、同時に聯合国側の勝利に貢献すること是くの如く大なりし日本に対し、戦争終結と共に直ちに抑圧の態度に出でたる英米が、如何に理不尽なるかを示すこととする――

『一九一四年。英國の請求により伊吹・筑摩の兩巡洋艦を印度方面に出し、英國の艦隊と協同作戦して独逸のエムデン号を駆逐し、また濠洲・ニュージーランドから英本国を応援すべく遠征する軍隊を保護して、西部戦線に送った。また巡洋艦金剛、巡洋艦淺間・出雲を南米沖に出動せしめて、独逸のスペー艦隊を追撃せしめた。

一九一五——六年。巡洋艦利根・対馬の二艦を派して、濠洲とアラビアのアデンの間を警衛し、更に巡洋艦新高・明石の二艦及び松・杉・柏・神の四艘より成る第十一駆逐隊を派出して、マラッカ海峡とスールー海とを警備せしめた。

一九一七年。巡洋艦明石、第十・第十一駆逐隊八艘を地中海に出動せしめたが、此地方はドイツの潜航艇の得意の壇場であるので、聯合国側の小国は最も深く日本の軍艦に信頼し、その影を望んで意を安んずるという状態であった。此間に駆逐艦神はドイツ潜水艇の襲撃を受けて艦の前部は沈没し、艦長以下多数の將士が戦死した。別に軍艦筑紫・平戸の二艦をして、濠洲・ニュージーランドの警備に当らしめた。更に巡洋艦利根・出雲の二艦をしてセレベス海・南支那海に出動し、ドイツ商船の脱出を警戒せしめ、巡洋艦須磨・矢矧・吾妻・日進・春日の五艘及び第二駆逐隊四艘をシンガポール・セレベス海に出動せしめた。

一九一八年。春日・八雲・須磨・淀の四軍艦及び第六駆逐隊四艘を出してシンガポール方面を警戒せしめ、矢矧・筑摩の二艦を濠洲に遊行せしめて之が警備に当らしめ、別に巡洋艦対馬を喜望峰に出動せしめて警備に当り、また巡洋艦出雲と第十駆逐隊四艘を地中海に派遣した。之より先巡洋艦明石は第十・第十一駆逐隊と共に、地中海に活動しつつあつたが、此増勢によつて地中海には、日本の巡洋艦二艘、駆逐艦十二艘が活躍するに至つたのである。此時イギリスから、更に日本の主力艦及び

軍人の借用を申込んで来たが、之に応ずることが出来ぬので、便法を講じ、左の如く英國の船舶を利用して、之に日本風の名稱を附し、日本の軍艦旗を掲揚し、日本の將兵が乗り込み駆馳するに至った。第一、イギリスのトローラア二艘を仮装巡洋艦とし、東京・西京と仮称して、地中海に出動せしむ。第二、イギリスの駆逐艦二艘に、日本の將兵が乗り込み日本軍艦旗を掲揚して、梅壇・橄欖と仮称して、同じく地中海に出動せしめた。之によつて我軍艦が、如何にドイツを恐怖せしめ、如何に聯合國側に信頼せられたるかを見るべし。

別に千九百十六年と十七年に、イギリス政府の請求に応じて、イギリス政府の金塊五千六百万ポンドを、左の如く軍艦を以て、ウラジオストックからカナダ迄輸送した。第一回、常磐・千歳。第二回、日進・春日。第三回、薩摩・日進・出雲・磐手。第四回、常磐・八雲。右はイギリスがロシアに売つた兵器の代價で、イングランド銀行がロシア政府から受取つたものである。

亦フランス政府の請求により、駆逐艦十二艘を日本で急造し、日本の將兵を以て、之をポートサイド迄廻航して、フランス海軍に引渡した。〔同書第五〇——五三頁〕

然らば英米は日本に対し何を為したか。彼等は先づワシントン会議に於て、東亞に於ける日本の地位を、彼等の希望する如く限局することに成功した。英国外務省情報部長たりしサー・アーサー・ウィラートは其著『世界に於ける英帝国』に於て、實に下の如く公言して居る——『世界戦の清算は、日本の場合に於ては二度行はれた。即ちパリ媾和会議とワシントン会議とに於てである。ワシントン会議は、英米全權の指導の下に而も英米外交關係史上末だ曾て見ざるほどの緊密・完全・効果的な共同動作によつて、英米及び英米の理想にかなふ如く極東を処理した。日英同盟も葬られた。英國は最早ドイツ海軍の脅威を受けなくなつたので、此の同盟を葬り去つて米国の甘心を貰ふを得た。巧妙なる談判によつて徐ろに加へられたる英米の重圧の下に、日本は支那に於ける自國の地位の解消を諦めた。山東に於ける日本の特殊權益は放棄させられた。而して其上に主力艦に対する五・五・三比率の海軍力制限を受けた。精神的にも物質的にも、ワシントン条約は、二個の友邦が一個の第三国に与へ得る限りの最大の打撃を日本に与

へたるものである』と。まさしくこの言葉の通りである。而も英米は是を以てしても尙且満足せず、ロンドン会議によつて一層深刻なる打撃を日本に加へた。想ふに英米は之によつて愈々エルサイユ体制を強化し得たものと欣んだであらう。而も此の体制は幾くもなくして痛烈なる反撃を受けるに至つた。その反撃とは取りも直さず満洲事変であり茲に世界旧秩序の崩壊過程が始まるに至つた。

五 エルサイユ体制の対日重圧

既に述べたる如く、日露戦争は歐羅巴世界制覇の歩みに最初の一撃を加へ、且そのために亞細亞の覺醒を促せることによつて、やがて来るべき世界維新の序幕なりしに拘らず、日本自身は遺憾ながら其の世界史的意義を悟らず、寧ろ世界史の根本動向と背馳する方向に國歩を進めた。日本のロシアに対する勝利に感激し、頓に心を傾け初めたる亞細亞の諸民族に対し、日本は之を愛護し指導し鼓舞する代りに、却つて其の世界政策に於て歩調を歐米に合せることにのみ苦心した。世界戦に於ける聯合国側の勝利は、日本の参戦に負ふところ最も大なりしに拘らず、一旦戦争終るや日本を第二のドイツと唱へて一切の抑圧を敢てしたのであるが、日本は啻に其の忘恩不信に対して反撃を加へざりしのみならず、却つて益々英米の甘心を買はんと努めた。現に大正十三年初頭、加藤高明伯を首班として成立せる謂はゆる護憲三派内閣の外務大臣は、就任当日のステートメントに於て、實に下の如く声明した——『自分の外交方針は、エルサイユ条約及びワシントン条約に体現せられて居る國際正義の支持徹底に在る』と。此の声明は端的に英米の世界制覇を以て國際正義と認めたるものである。イギリスの外交官が、日本に対して与へ得る限りの最大の打撃を加へたと公言して憚らざるワシントン諸条約を以て、國際正義を体現せるものとし、飽迄も之を支持徹底させるといふのである。かかる声明が英米を欣ばせたことは言ふ迄もない。さればこそウイラートは、前述の著書の中に『ワ

シントン会議以後の数年間、日本は實に模範的に善良なる世界の市民であつた』とほめそやして居る。独りウイラー
トのみならず、米国のスティムソンも『ワシントン会議より満洲事変に至る十年間、日本政府は國際團体に於て例外

に善良なる市民としての記録を有する』と言つて居る。かくて英米は日本を思ふが儘に左右し得たのだ。

日本の是くの如き態度は、必然支那の輕侮・反抗を招いた。而して日本は支那の抗日・毎日に対し、常に謂はゆる親善政策を以て臨んだのであるが、如何に日本が親善を標榜しても、支那の敵意は益々つのるばかりであつた。此の排日運動の背後に、英米の煽動ありしことは言ふまでもない。加ふるにワシントン会議の翌年、即ち大正十二年に關東大地震あり、日本の國力は半減し去れるかの如く伝へられたので、日本に対する世界の輕侮は一層甚だしきを加へた。

日本の國際的地位が、馬進まずして四面唯だ楚歌を聞く時に當り、国内の形勢また秋風落莫であつた。大震直後に成立せる山本内閣は、何程かの期待を國民から懸けられたが、空前の不祥事のために總辭職し、其後政友会より分離せる政友本党が、憲政会と合同して民政党を組織してより、政民両党の露骨無慚なる政權争奪戦が行はれ、天下を擧げて其の党争場裡と化し去つた。内閣更迭の度毎に、地方長官は言ふに及ばず、判任官や傭人の末に至るまで其の影響を蒙らざるはなく、巡査や小学校教師までも苟くも自党に従順ならざる者は悉く馘首の憂目にあはせた。而して是くの如き政權の争奪が、空々しくも憲政の常道と呼ばれて居た。憲政の常道とは、アングロ・サキソン流の議会政治を意味する。かくて当時の日本の政治的理想は、英米の個人主義・民主主義・資本主義を根柢とする政治機構であつた。

加ふるに一方にはモスクワに本部を有する第三インタナショナルの宣傳が、内憂外患による國民の不平不満に乘じて、頓に激烈を加へ來り、ロシアを祖國と讀へ、その指令を仰ぐマルクス宗のバテレン共が、日本共産党を組織して

国体の根本的変革を目的とする言語道断の運動を始めるに至つた。是くの如くにして、祖国をロシアに求め、魂を英米に売れる日本人が、都にも鄙にも充满せんとしつつあつた。

英米から世界の模範的市民とほめられて居た十年間、日本の眞実の姿は暗雲に蔽はれ、明治維新の二大綱領は、天皇機関説の横行、及び現状維持のための平和主義の跋扈によつて蹂躪され、大陸発展の如きは侵略主義者・軍国主義者の危険なる欲望と考へられるに至つた。かくて東亜の経済を説く者は『國際正義』に弓ひく者として斥けられ、亞細亞の復興を志す者は白日夢を追ふ者として嘲られた。日本は仮令大陸に対して積極的政策に出でずとも、少くも既に東亜に於て獲得せる地位だけは、必ず之を守らねばならぬ。然るに英米の圧迫、支那の反抗、国内に於ける自由主義・民主主義の横行は、内外呼応して遂に満洲に於ける日本の地位をさへも覆さんとするに至つた。

それ満洲に於ける日本の地位は、世界維新の序幕たりし日露戦争の結果によるものである。日本は満洲に特殊なる地歩を占めることによつて、満洲・朝鮮・支那を含む東亜全体の秩序と安寧とを維持する重大なる任務を負ひ、見事に之を果たして來た。試みに日本が此の重任を負うてより二十五年間の満洲の歴史を見よ。そは實に世界に於て比類なき發展の記録である。日露戦争直後の満洲の人口は一千万に過ぎなかつたが、二十五年を経たる昭和五年には二千七百万を算へた。貿易の如きは此間に三十五倍といふ驚くべき増加を示した。見る影もなかりし寒村が、一切の文化的施設を有する都市となつた。旅順は桜の名所となり、乃木將軍が山川草木軒荒涼と詠じたる金州城外は林檎の名産地となつた。此の二十五箇年の日本の満洲經營は、日本が昂然として世界に誇り得る偉大なる事業である。

然るに翻つて国内を顧れば、英米の思想的宣伝に乘り、抽象的な民族平等主義、感傷的な平和主義に魅せられたる日本の有識階級の間には、満洲に於ける排日運動が年と共に激化するに及んで、進んで其の原因を窮めて之に善処せんとせず、却つて之を支那に与へて其の道理なき怒りを和げんとする者さへも生じ、満鉄の國際管理が公然とし

て唱道されるに至つた。總じて是くの如き思想の最も重大なる源泉となれるものは、世界大戦を頂点とする日本資本主義の行詰りであり、此の行詰りに当面せる日本の指導階級は、日本はアングロ・サキソンの優越を承認し、その下風に甘んずることを以て日本国家の安全を保つ所以であると考へたのである。それ故に日本は、決して支那を忘れて大陸政策に消極的となつたのではない。事のはず實力を以て支那と争ふこと、而して勢力を大陸に伸張することによつて、英米の激怒に触れんことを恐れたのである。

支那は此事を熟知して居たので、滿洲に於ける排日は年と共に加はつた。昭和初年に至りては、國貨提唱・經濟外交・日本帝国主義打倒等のスローガンの下に、暴慢無礼を極むる各種の不法行為が行はれ、在満邦人の事業に対する圧迫は猛烈となり、日本の利権駆逐を目標とする運動が加速度的に強化されて來た。而して此の傾向は、昭和三年の夏、張霖作爆死して張學良が滿洲の新主人となるに及んで一層激化した。張學良は日本の勸告を無視して滿洲に青天白日旗を高揚し、三民主義を遵奉して国民政府に服従する旨を宣言した。同時に排日運動は極度に悪性となり、日本商品に対する不当課税、運搬拒否、不法没収、売買妨害、借家借地の禁止、朝鮮人に対する不法の迫害など、一切の方面に亘りて徹底的且組織的な排日を行はし、在満邦人をして悉く窒息せしめずば止まざらんとした。加ふるに張學良は、日本国内に於ける政民両党の激しき政権争奪が日本の國論統一を不可能ならしめるものと判断し、且皇軍の本質を解せざるが故に、日本の陸軍は久しく実戦の経験を有せず、従つて連年の戦争によつて鍛錬せられたる支那軍の敵に非ずとさへ慢心するに至つた。而して勢の窮まるところ、遂に柳条溝に於ける支那兵の満鉄線路爆破となつたのである。

六 滿洲事変の世界史的意義

昭和六年九月十八日夜半、奉天独立守備隊第三中隊の將兵若干が、奉天を距る程遠からぬ柳条溝附近の鉄道巡察中に、只ならぬ爆音を聞いて即刻現場に急行し、線路破壊の事実を認めると同時に満洲兵の射撃を受けた。よつて之に応戦しながら一方急を本隊に告げて其の応援を求め、一挙に北大營の攻撃を開始し、翌十九日朝には早くも北大營から満洲軍を駆逐し、次で奉天城を占領した。而して此日の午後には、急を聞いて払暁旅順を出発せる本庄關東軍司令官が、幕僚を従へて奉天に到着し、軍司令部を奉天に移して全軍の指揮統督に任じ、且満洲に於ける張學良政権を絶対的に否認し、徹底して之を膺懲する旨を中外に宣明して、其の断乎たる決意を明かにした。謂はゆる満洲事変の幕は、實に是くの如くにして切つて落された。

満洲に於ける止まるを知らぬ排日運動が、遂には非常なる事態を招ぐに至るべきことは、満洲事変勃発以前に於て既に日本的心ある人々の深き憂であつた。吾等は事變の前年から、日本の各地に講演会を開き、満洲の実情を国民に報告し、その覺悟を促すに努めた。之を聽ける國民は、異常なる昂奮を以て満洲の前途を憂へ、政府の対策が甚だしく柔弱緩慢なることを憤激した。管子に『民衆は個々に就て見れば愚昧であるが、相集まる時は靈なるものがある』と道破して居る。洵に此の言葉の如く、國民が相集まつて魂が相結ぶ時、偉大なる思想と判断とが何処からとなく生れて来る。日本の場合に於ては、昔乍らの莊嚴なる日本精神が、平素は意識の奥に潜んで眠つて居ても、事に接し物に応じて躍如として現れ、田夫野人をも能く靈なるものたらしめるのである。

日本國民は『世界の模範的良民』『例外に善良なる市民』として英米の賞讃を博し来れる日本政府の外交が、消極軟弱に過ぎたることに不満を抱いて居た。もとより國民は具体的なる対外政策を抱いて居たのではない。彼等に向つて『然らば何処が軟弱であるか』と質問したならば、恐らく説明に窮したであらう。且また暴虎馮河の勇は決して國家の大をなす所以でなく、複雑多端なる世界政局に於て、國際間の紛糾は江戸・児の喧嘩の如く簡単に處理せらるべく

もない。然らば國民が外交の軟弱を怒つて對外硬を唱へるのは、無用の悲憤慷慨であるか。斷じて左様でない。國民は外交上の仔細の経緯を知らないけれど、政府が何者を犠牲にしても一日の安きを偷まんとするに非ざるかと憂慮する。然りを然りと言ひ、否なを否なといふべき場合に、空しく辞令と議論とを弄んで、大事を誤り大機を逸し去りはせぬかと心配するのである。それ故に國民が外交の軟弱を憤るのは、吾等に最後の決心と覺悟があるぞと叫ぶに等しい。此事は取りも直さず日本民族の發展的精神の現れである。國民の對外硬は、その旺盛なる戰鬪的精神、剛健なる向上登高の志、激刺たる生命力の發現に外ならない。久しく眠れる日本國民の此力が、實に滿洲事變によつて俄然として躍動し始めた。

それ故に予てより政府の対滿政策に不満なりし國民は、柳条溝爆破に對して取りたる關東軍の行動に、魂の奥底から共鳴して熱狂的なる支持を之に与へた。全國に漲る此の澎湃たる國民的支持ありしたために、滿洲事變は其の進むべき方向に正しく進み、遂に滿洲帝國の建設を見るに至つたのである。當時の日本政府は、武力を滿洲に用ひることを極度に嫌ひ且恐れて居た。そはエルサイユ條約及びワシントン諸條約を以て國際正義の體現と声明して居た政府として、當然至極のことである。米国から一言でも『日本の野心』などと言はれると、甚だしき不面目に感じて居た政府は、武力による滿洲問題の解決が、世界の主人公たる英米両国、わけても米国の怒りを招がんことを最も恐れた。

蓋し滿洲事變に於ける神速果敢なる關東軍の行動は、英米の最も意外とせるところである。そは模範的良民としてあるまじき振舞である。日本政府は必ず滿洲に於ける軍事的行動を制止するであらう。英米は正直に此通り考へて居た。當時のアメリカの國務長官スティムソンは其の日記に下の如く書いて居る。曰く『日本の外務大臣は、日本の國家主義の焰を消し止め、日本をして九箇国條約及びケロッカ条約に忠実ならしめるであらう』と。彼は堅く此事を信じたるが故に、支那が折柄開催中なりし國際聯盟に滿洲事變を提訴し、聯盟事務總長ラムモンドよりアメリカに対

して、米国は満洲事変に対するケロッグ条約の適用について如何なる意向を有するかと打診し来れる時にも、彼は『日本の国民的感情を刺戟して、日本国民に軍部を支持せしめ、且幣原外相を苦境に陥れる如き行動は、之を避けることが賢明である』と答へてゐる。

併し乍ら如何にスティムソンが日本外務省を信頼しようとも、久しく抑へられて來た日本の国民的感情は、既に上る潮の如くに昂まり、國家主義の炎々たる焰は、最早外務大臣の手によつて消し止むべくもなかつた。かくて事態は益々英米の欲せざる方向に進み、彼等に取りては『不快なるニュース』のみが次々に伝へられて往つた。同時に国際聯盟に対しては、支那からの提訴が次から次へと積み重ねられ、遂に日本を彈劾する聯盟規約の動員を見るに至つたが、結局昭和六年十二月九日の聯盟総会に於て、現地に赴いて事情を調査し『國際關係に影響を及ぼし、日本と支那との平和、及び平和の根拠たる此等両国の親善關係を妨げる總ての事柄について國際聯盟に報告する』ため、五名の委員より成る聯盟委員会を満洲に派遣することとなつた。幾くもなく此の委員会はリットン卿指導の下に東洋に向つて出発した。一行が先ず東京に來りて最初の談合を試みたのは、昭和七年二月二十七日のことであるが、満洲に於ける事態は英米の一切の策動及び國際聯盟の一切の掣肘とは無頓着に、其の進むべき方向に進んだ。かくて三月一日には早くも満洲國の建設を見、次で此年九月十五日に至り日本は之を承認した。当初満洲國は立憲共和政体を探り、元首を執政と称へたが、昭和九年に至りて之を帝制に改め、此年三月一日、旧執政が満洲國の新皇帝として、嚴肅なる即位式を新京に挙げさせられた。

一方國際聯盟は、昭和七年三月一日に建設された満洲國に対し、三月十一日夙くも其の不承認を決議し、同年十一月末、リットン報告に基づいて満洲を支那に還附せよとの宣告を下した。この宣告を繞つて長い討論が行はれたが、翌昭和八年二月十四日の聯盟総会は、支那を含む四十二箇国の投票により、リットン報告及び其の提案を無条件で採

択したので、日本は三月二十七日、正式に國際聯盟を脱退するに至つた。此の任務を果たして帰朝せる松岡代表が、宛も凱旋將軍の如き熱狂を以て迎へられたことは、日本国民が何を欲し、何を望んで居たかを最も明白且有力に物語るものである。

さて日本が満洲事変を経て満洲建国の大業に当面するに及んで、国民の魂に潜める強烈なる愛国心が、俄然として目を覚ました。これまで一世を風靡し来れる民主主義、次で跋扈し始めたる共産主義は、漸く其影を国民の間に潜め之に代つて國家主義的傾向が空前に旺盛となつた。而して此の大業の遂行過程に於て、英米の激しき圧迫と戦へることによつて、従来はその好意に頼つて日本の安全を図らんとして来た英米が、実は断じて両立すべからざる東亜の敵であることが、次第に明かに認識されて來た。かくして日本は、アングロ・サキソン世界制覇の機関、即ち世界旧秩序維持の根城たる國際聯盟からの脱退を敢行し、一挙英米依存を超克して自主的精神を其の外交の上に發揮するを得た。日本は國內に於けるアングロ・サキソン勢力を、少くも原則として蹂躪し去れるのみならず、國際的にアングロ・サキソン勢力に挑戦し、ユルサイユ体制に対しても最初の且甚大なる打撃を加へたのである。

第一次世界戦以後の世界秩序の一角は、かくして先づ満洲事変によつて打破された。而して旧世界秩序維持の機関たる國際聯盟は、實に此時より無力となり始めたことは、やがて起れるエチオピア事件の場合に明瞭に曝露された。イタリーのエチオピア攻略に際し、イギリスは之を圧迫するため、聯盟五十二箇国をしてイタリーに対する經濟封鎖を行はしめ、イタリー品の輸入を禁止し、一切の対伊金融關係を断絶し、重要物資の对伊輸出を禁止せしめた上に七十万噸と称する大海軍を地中海に進めて之を威嚇したが、遂に何等得るところなくして終つた。イタリーに是くの如き勇氣を鼓吹したのは、満洲事変に於ける日本の前例なりしことは言ふ迄もない。

加ふるにユルサイユ条約による極度のドイツ圧迫は、却つて此の強毅有為なる民族の奮起を促し、遂にヒトラー政

権の出現を招ぎ、ドイツは飛躍的に復興するに至つた。従つて素と弱小ドイツを礎として築かれたる歐羅巴平和の殿堂は、強力ドイツの出現によつて当然覆さるべき運命となつた。かくてヨルサイユ体制に対する東西の挑戦者、日独伊三国が相結ぶことに何の不思議もない。

昭和十一年九月のこと、関東軍司令官は満洲建国過程に於ける協和会の使命について、極めて重大なる布告を発し同時に関東軍參謀長は此の布告について公式に下の如き説明を与へた——『協和会の祈念するところは、第一段に於て王道満洲国の完成であり、次に来るものは東亜各地の被圧迫・被征服民族を解放して、逐次王道樂土を建設することである』と。支那事変及び大東亜戦争後に声高く唱へ初められた東亜新秩序又は大東亜共榮圈の理念が、夙く既に此時に具体的に表明されて居ることは、吾等の銘記せねばならぬところである。

七 支那事変より大東亜戦争へ

是くの如くにして日本の誤れる進路は、満洲帝国の建設と共に、一挙正しき転向を見た。満洲建国は、日本が亞細亞抑圧の元兇たる英米との協調を一拋し、興亜の大業に邁往し始めたものとして、まさしく維新精神への復帰である。満洲事変勃発に際して、国民の熱情が火の如く燃えたのも、實に其為であつた。然るに最も遺憾に堪へぬことは支那が日本の真意と亞細亞の運命とを覺らず、満洲建国を以て日本の帝国主義的野心の遂行となし、いやが上にも抗日の感情を昂め来れることである。

吾等は支那の抗日について、決して支那のみを責めようとは思はない。既に述べたる如く、日露戦争以後の日本の国歩は、世界史の根本動向と異なる方向に進められた。ロシアと戦ひ勝ちて、表面皮相ではあり乍ら世界一等国の中班に入るに及んで、是迄張りつめ来れる国民の心の弦ゆるみ、沈滯苟安の風潮、漸く一世に漲り始めた。かくて日露

戦争に於ける勝利によつて、亞細亞の諸國に絶えて久しき復活の血潮を漲らしめたに拘らず、日本は却つて彼等を失望せしむる如き方向に進んだ。日本は亞細亞の友人又は指導者たる代りに、その圧迫者たる歐米に追従したのである。

日露戦争によつて『頭脳に新世界』を開かれた安南の青年は、陸續国を脱して東京に留学し、独立運動者としての資格を鍛錬すべく刻苦勉励して居たが、日仏協約の締結によつて悉く追放の憂目を見た。日本に亡命し来れる印度革命の志士は、イギリスの強要によつて放逐された。東京外国语学校の印度語教師なりしアタル君が、英國大使館の迫害に堪へ兼ね、毒を仰いで自殺せることは、吾等の今尚ほ忘れ得ぬ悲惨事である。

支那に対しては、日支両国の堅き結合による以外、また亞細亞復興の途なき運命を、直覺的に把握し、深き同情と愛着とを以て支那問題に終始し来れる人々が、支那浪人の名の下に活動の舞台から斥けられ、専ら利權獲得を目的とする商人の冷かなる手のみが徒らに支那に伸びて往つた。さればこそ孫文一派に対する永年の援助と友誼とに拘らず国民党の権力を最後に確立せしめたる北伐革命に際しては、日本は国民党内部に何等の緊密なる聯繫を有せず、その革命指導権をロシアに与へ去つて顧みなかつた。此事は日本の不幸であると同時に、一層重大なる意味に於て支那の不幸であつた。かくて支那の排日は毎日となり、毎日は抗日となりて遂に支那事変の勃発を見るに至つた。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋畔一発の銃声を導火線とせる日支両国の悲しむべき争ひが、斯程まで長期に亘らうとは、恐らく当初は何人も予想せざりしことろである。現に日本政府は之を北支事件と呼び、暴支膺懲といふ簡単至極のスローガンを掲げ、謂はゆる不拡大方針を以て之に臨んだ。然るに思ひもよらぬ局面の展開は、否応なく事實によつて不拡大方針を覆し、名称もまた支那事變と更められ、其名の如く戰線は全支那に及んで今日に至つた。昭和十六年十二月八日、対米英戦争の宣戦の大詔下りにより、支那事變は大東亜戦争のうちに包容され、その名称は廃止され

たけれど、現に日支両国は激しく戦ひ続けて居る。

前後七年に亘る支那事変の経過を一顧すれば、之を二期に大別することが出来る。初めの一年有半は所謂進攻作戦の時期にして、当初の不拡大方針が飛躍的に規模雄大を極むる全面戦争となり、目覚ましき勝利を收めて居る。次の四年有半は、一面戦争・一面建設の旗印の下に、大体に於て封鎖戦・建設戦に終始して今日に及んだ。此間に歐羅巴戦争の勃発あり、日独伊三国同盟の締結あり、終に対米英戦争の宣言あり、それぞれ東亞及び歐羅巴に於て戦はれつたりし二つの戦争が、必然の帰着として名実共に一個の世界戦となるに至つた。

さて支那事変の本質並に意義は、戦局の進展と共に次第に明瞭となつた。単純にして無内容なる暴支膺懲のスローガンは、いつの間にか其影を潜め、東亞新秩序の建設、次では大東亞共榮圏の確立といふ戦争目的並に理想が、高く掲げられるやうになつた。東亞秩序は疑ひもなく世界秩序の一部であり、東亞新秩序の建設は世界旧秩序の破壊を前提とする。この論理は青天に白日を指す如く明かるに拘らず、此の理想が初めて掲げられしころ、日本のうちに東亞を世界から分離し、唯だ東亞だけの新秩序を実現し得るかの如く空想せる者が多かつた。さり乍ら東亞新秩序建設のための最も根本的な条件は、東亞諸民族が日本と協力提携すること、並に米・英・仏・蘭の勢力を東亞より驅逐することである。東亞を白人の植民地又は半植民地たる現状より解放することが、新秩序建設の第一歩である以上、此等の諸国との衝突は遂に免るべくもない。それ故に日本は、万ーの場合に此等の諸国と決戦する覚悟なくして斯かる声明を世界に向つて発する道理はない。

事情是くの如くなるが故に、支那事変勃発以来、米英両国は日本に対して包み隠すところなき敵意を示して來た。而して彼等の日本に対する態度は、事変当初より歐羅巴戦争勃発に至るまでの二年間、歐羅巴戦争勃発より日独伊三国同盟締結に至る期間、及び三国同盟成立以後と、前後三段の変化を示した。第一の期間に於て、彼等は支那に於け

る自國権益を絶えず擁護するため、露骨に重慶を援助して日本に抗戦させた。然るに歐羅巴戦争開始後の第二期に於ては、彼等は能く日本を自己の陣営に誘致するため、少くとも独伊陣営に参加させまいために、止むなくんば支那に於ける権益の一部を犠牲にしても、日本の甘心を買はんとするかに見えた。イギリスのビルマ・ルート遮断はまさしく此の政策の一端である。当時の日本には尙多くの英米依存主義者が居たので、是くの如き米英の策動は甚だ危険なる誘惑であつたが、日本は其の策動に乗ることなく、遂に三国同盟の成立を見るに至つた。英米の態度は此の条約締結と共に三変し、爾来日本を日本にするに準敵国を以てし、その重慶援助は俄然として積極的となつた。而も米英は、事茲に至りても尙且日本が直接受歐羅巴戦争に参加することを欲せず、極力之を牽制し、少くも参戦を延期せしめることに腐心したが、勢ひの窮まるところ、遂に大東亜戦争の勃発となつた。

わが陸海空の精銳が、東西南北、剣をぬに米英軍を粉碎し、開戦以来半年ならずして大東亜共榮圏の基本地域を尽く掌裡に收め、更に之を外域に拡大しつつあることは、實に世界戦史の奇蹟である。是くの如く迅速に、是くの如く偉大なる戦果を挙げようとは、恐らく日本国民の多数さへ予想せざる処なりしを以て、その世界に与へたる衝動、わけても敵国に与へたる驚愕は、深刻にして甚大であつた。試みに大東亜戦争勃発直前に於ける重慶の観測を見よ。十一月二十六日の申報は「和平か戦争か」と題する社説に於て、日米相戦へばアメリカが勝利を得ることは百分の百明瞭であると断言して居る。また十二月一日には『日本の動向の検討』と題する社説に於て、日本に四年に亘る支那事変によつて、数十年間に蓄積せる資力を消耗し尽し、其上國際環境は極度に悪化し、対外貿易を喪失して外貨獲得も不可能なる窮地に陥つて居るとして、日米戦争に対する日本の無力を高調して居る。重慶は日米交渉に於て日本がアメリカの強硬なる態度の前に屈服を余儀なくされるだらうと見縊つて居た。若し万一日本がアメリカに屈服せず、起つて相戦ふに至らば、アメリカの武力の下に容易に擊碎されるであらうと信じて居た。而して是くの如きは決して重

慶のみのことではなく、アメリカ自身もまた同様に推測し且信じて居た。此の憐れむべき推測と信念とは、今や一朝にして覆された。而も其の敗戦によつて、支那の対日抗戦は米英に取りて甚だしく重要性を加へ、今や支那に於ける権益擁護といふが如き消極的意味からでなく、米英自身の興廃といふ切実なる必要上の上から、必死に重慶を支援せねばならなくなつた。重慶は此間の消息を熟知するが故に、荐りに米英に向つて援助を強要しつつある。唯だ日本の海上制覇が遅く完成された上に、ビルマ・ルートが閉鎖されたので、是くの如き援助は極めて困難なる状態に陥つた。

いま翻つて支那事変勃発当時の日本の国情を省みるに、内外共に憂ふべきことが数々あつた。支那事変の先駆となる満洲事変は、満洲帝国の建設、その資源の急速なる開発、交通の飛躍的發展、工業の異常なる発達によつて、わが國防力の増強に貢献するところ大なりしとは言へ、従来満洲を緩衝地帯として吾国と相対して居た蘇聯は、今や日本一体となれるために、日本と面々相対峙するに至つたので、蘇聯は急速に東方の軍備を強化して吾が陸軍を凌ぐの勢を示し、浦塩には五十隻の潜水艦を集めて吾が大陸聯絡を脅威し、蘇滿国境には紛擾の絶える時がなかつた。加ふるに吾が陸軍の軍備拡張は、そのころ漸く五箇年計画が着手されたばかりであり、必要なる重工業並に軍需工業の拡充も未だ成らず、飛行機及び戦車の方面に於て所期の希望を距ること甚だ遠かりしことを思へば、当局の苦心は察するに余りある。而して支那に於ける当時の吾が兵力は、北京天津方面に於て一個師団にも足らぬ僅少の駐屯軍と、上海に少數の海軍特別連戦隊と、揚子江上に若干の艦船があつただけで、急速に之を援助すべき兵力の準備なく、幾万の居留民は奥地深く散在し、外交機關の引上げさへも容易ならぬ状態であつた。もと支那を敵国として大規模なる戦争を行ふことは、軍当局はいざ知らず、国民一般の殆ど予想せざりしことである。国民は支那と戦ふどころか、国民党が日本に対し狂暴化した後でさへ、専ら親善提携を望んで居た。それ故に支那事変は、日本としては戦ひを欲せざる国と、戦ひを欲せざる時に勃発せるものであり、政府が努めて不拡大方針を取らんとしたのも無理なうぬ次第

である。

恐らく蒋介石もまた日本に対して勝算を抱いて居なかつた。彼もまた当初は局地解決を望んだことと想像される。

併し乍ら国民党の狂暴焦躁分子は、最早彼の手によつて制御すべくもなかつた。彼等は英米蘇聯の支援を頼み、彼等にとりて好都合なる資料のみによつて日本の国情を誤算し、遂に『抗戦撤底』を叫ぶに至つた。想ふに国民党及び彼を支援せる歐米列強は、日本の国力は断じて長期戦に堪へず、三年を出でずして国民生活の逼迫から国内崩壊は必然であると判断して居たであらう。然るに事実は完全に彼等の予想を裏切り、国民は克く一切の經濟的困苦を克服し来れるのみならず、支那事変の刺戦によつて、飛行機・戦車其他作戦資材の整備が飛躍的に促進された為に、陸海軍の戦闘力は驚嘆すべき躍進を示した。加ふるに長期に亘る戦争の間に、兵士の訓練にも兵器の改良にも、深甚なる工夫が凝らされた。或は嚴冬蒙古の原野に、或は炎熱南支の山嶽に、或は湿地に、或は密林に、一切の時節と場所に於て作戦上の最も貴重なる経験を積んだ。それ故に重慶及び米英が、日本の国力は最早疲弊し果てて、新に強敵と戦ふ勇氣を失つたであらうと想像せる五年の長期戦が、実は却つて日本を空前に強力なる国家たらしめ、一旦大東亜戦争の勃発を見るや、古今東西に比類なき武威を發揮することができた。かくて支那事変は、一面に於て最も悲しむべき出来事であつたと同時に、他面に於て大なる利益を日本に与へ、東亜全面より米英勢力を駆逐する覚悟と、この覚悟を決行するに足る武力を養はしめることがとなつた。

若し是が清朝末期又は軍閥時代の支那であつたならば、恐らく南京陥落の後に、然らずば漢口・廣東を失つた時に支那は早くも吾が軍門に降つたことであらう。然るに戦へば必ず敗れながら前後七年に亘りて抗戦を續け、殊に大東亜戦争半年の戦果を目撲して、日本の武力の絶対的優越を十二分に認識せるに拘らず、また其の最も頼みとせる米英の援助が殆ど期待し難くなれるに拘らず、尙且抗戦を止めんとせざるところに、吾等は此の四半世紀に於ける支那の

非常なる変化を認めねばならぬ。若し日本が現在の支那を以て、清朝末期又は軍閥時代の支那と同一視して居るならば、直ちに其の認識を更めねばならぬ。

日支両国は何時までも戦ひ続けねばならぬのか。これ實に国民總体の深き嘆きである。普通の常識を以てしても、日支両国は相和して手を握れば測り知れぬ利益あり、戦つて相争へば百害がある。わけても世界史の此の偉大なる転換期に於て、若し両国が和衷協力するならば、亞細亞の事、手に唾して成るであらう。いま日支両国が復興亞細亞の大義によつて相結び、その実現のために手を携へて起つとすれば、印度また直ちに吾に呼応し、茲に独自の生活と理想とを有する大東亜圏の建設が、順風に帆を挙げて進行するであらう。

然るに現実は甚だしく吾等の理想と相反する。もとより南京政府は既に樹立せられ、汪精衛氏以下の諸君は、興亜の戦に於て吾等と異体同心であり、進んで大東亜戦争に参加するに至つたのではあるが、支那国民の多数は其の心の底に於て尙ほ蔣政権を指導者と仰いで、反日・抗日の感情を昂めつゝある。かくして日本は、味方たるべき支那と戰ひ乍ら、同時に亞細亞の強敵たる米英と戦はねばならる破目になつて居る。

大東亜戦争当面の目的は、大東亜地区より米英其他の敵性勢力を掃蕩することにあり、其次に来るものは大東亜秩序の確立であるが、そのための絶対的条件をなすものは支那事變の処理、即ち支那との和衷協力である。此事は今後戦線が如何に拡大されようが、また其の戦果が如何に偉大であらうとも、決して変るまじき順序である。支那事變が処理せられざる限り、米英の抗戦力が如何に弱り、如何に低くならうとも、大東亜戦争は決して有終の美をなすことが出来ぬ。

さて日独伊三国同盟が結ばれたころから、支那事變は世界戦争の連環の一つであり、従つて是くの如きものとして解決せらるべきものであるとの主張が、いろいろなる方面から唱へられ始めた。此の主義は半ば正しく、半ば誤まつ

て居る。即ち支那事変は単に日支両国だけの関係に於て考ふべきものでなく、事変の背後には有力なる第三国が、日本を敵として東洋制覇の野心を抱き、あらゆる術策を逞しくして來たので、事変の進展如何によつては、遂に其の第三国とも、具体的に言へば英米とも一戦せねばならぬことを認識するものとして、この主張は正しくある。而して現に事變は対米英戦争にまで發展した。併し乍ら其故に支那事變は、世界戦争の一連鎖として、世界戦争そのものの処理と共に解決せらるべきものとする意見は、吾等の決して首肯し得ざるところである。

日支両国との間に第三国の介在せることが、従来常に両国の溝を深くせることは、歴史の示すところ最も明白である。日清戦争に於ける三国干涉は言ふまでもなく、第一次世界戦争に際しても、支那は日本と共に聯合国側に参戦し与國として戦へるに拘らず、歐米勢力を有力なる決定者として日支両国との間に介在させたので、両国の親善友好を増す代りに、反つて反日敵意を助長した。満洲事變に際しても、支那は日本との談合を避けて終始英米に泣訴したため一層問題を紛糾させた。支那事變は歐羅巴戦争に先ちて、日支両国との間に起れる悲劇である。その解決は決して第三国の介入を許さず、両国直接の折衝によつて解決せねばならぬ。加ふるに大東亜戦争は、事實によつて支那事變の性格を一変し、之を以て東亜に於ける一個の内乱たるに至らしめた。吾等は一刻も早く此の内乱を鎮定してこそ、初めて大東亜戦争の完遂を期し得るのである。

曾て第一次世界大戦に當り、大隈内閣の所謂二十一箇条要求が、甚だしく支那を憤激せしめた。而も此の要求は、支那の保全を本願とせるものであり、此の条約にして一たび締結される以上、世界の如何なる國家と雖も、最早日本と一戦を交へる覚悟なくしては、支那沿岸の一寸一尺の土地をも奪ひ得ぬこととなる。それ故に条約の精神は明白に亞細亞復興の要件なりしに拘らず、之を因縁として支那の排日運動は、年々廣汎深刻を加へ、それが満洲にまで波及せるため、遂に満洲事變の発生を見るに至つた。而して日本は既に述べたる如く、此の事變によつて其の誤れる進路

を改め、維新精神に復帰して亞細亞解放の戦士たる覺悟を決着し、支那との間にも從前にまさりて緊密なる肉親的結合を再建せんと努めたのである。是くの如き日本の精神と理想とは、対米英宣戰によつて火の如く瞭然となれるに拘らず、蔣政権が今尚ほ亞細亞共同の敵と相結んで、興亞の大義を蹂躪しつつあることは、眞に痛恨無限と言はねばならぬ。

而も今より八十年以前、日本が其の国民的統一のために奮起せる當時を回顧せよ。ロシアは対馬の租借を迫り、アメリカは開國を強要し、フランスは其のメキシコ政策の失敗を東亞に於て回賃せんとし、イギリスは貪婪の爪を磨いで近海に出没し、日本の運命累卵よりも危かりし時、薩長両勢力は不俱戴天の敵の如く相争つて居た。いま日本がアングロ・サキソン世界幕府を倒して亞細亞復興のために獅子奮迅する時、日支両国は曾て薩長が相争つて居る。支那の国民党には明治維新の研究者多く、蒋介石自身もまた其の研究に大なる興味を持つたと言はれて居る。若し彼等にして明治維新の精神を真個に把握し得たならば、日本に対して沙汰の限りなる狂暴を敢てし、十年の建設を一朝にして空無に帰せしむるが如きことなかつたであらう。さり乍ら維新精神の繼承者が明白に自覺し誠実にその実現に努力し来れる日本の国家的統一と支那の革新、此の両者の堅き結合による亞細亞復興は、両国共同の宿命的課題なるが故に、やがては正しく解決されるであらう。唯だ吾等は其の解決の一寸一毫も速かならんことを切願して止まない。

佐藤信淵が歐羅巴列強わざわざイギリスの東亞侵略に備へるための国防を強調せる『防海余論』『呑海鑒基論』『存華挫狄論』の三著は、彼が八十一歳の高齢に達しながら、日本の現在及が将来を『慷慨善思』して筆執り、之を安濃津侯に獻ぜんとするものである。而も其子信昭が『不肖此書を一見するに、實に是れ世界を混同し、万邦を統一大の大議論にて、八十老翁の壯心感伏に堪たり。然りと雖も家嚴は草間の小父なり、卑賤にして如此の大議論を為

す者は、往々不測の大患に遇ふ。……且又此書世上に漏らば、或は越俎の刑あらんことを畏る。願くは固く諱して此書を献すること勿れ』と諫め、實に『書を抱いて悲泣連日』に及んだので、遂に之を焼棄てたと信濃自身が述べて居る。その草稿が幸に家に伝へられ、写本として坊間にも流布した。彼は此年の初秋より健康頓に衰へて、身を病床に横へるに至り、食を摂り難きこと二箇月に及べるに拘らず、酒を以て飯に代へながら『存華挫狄論』の稿を床中に改め、翌嘉永三年正月六日、つひに八十二歳の長き生涯を終へたのである。爾來春秋兩百年、いま『存華挫狄』の日が到来したのだ。

大東亜秩序建設は、亞細亞的規模に於て行はれる第二維新である。そは慘怛たる經營に終生を託して、一身を國事に倒したる幾多先輩の志業を完うするものである。天上に物見人多し、幽魂みな還現する。後代に志士あり、長く當年に鑑みんとする。吾等は必ず此の大業を成就せねばならぬ。

大東亜圏の内容及び範囲

一 大東亜圏の範囲

亜細亜大陸の略ぼ中央に位するバミール高原は、古より世界の屋根と呼ばれて來た。此の高原から四方に山脈が走つて居る。先づその西南に向つて走るものはスライマン山脈と呼ばれ、印度アフガニスタンの国境を縫うて印度洋に尽きて居る。その北に向つて走るものは天山山脈と呼ばれ、一旦ズンガリア盆地で中断せる後、再びアルタイ山脈となつて東北に伸び、更にヤプロノイ山脈・スタノボイ山脈となり益々東北に走り、遂に亜細亜大陸の東北端イースト・ケーブとなりてベーリング海峡に突出して居る。かくて亜細亜大陸は、南インダス河口より北はベーリング海峡に至るまで、西南より東北に連なる蜿蜒万里の山脈によつて、まさしく両部に分たれる。

その両部のうち、世界の屋根の東南斜面に當る亜細亜の半分は、更に南北両部に分たれて居る。而して之を分つものは、ヒマヤラ山脈・崑崙山脈に起りて東へ東へと伸び、遂に支那海に至りて尽きる、是亦蜿蜒万里の山脈である。此の山脈の北部は満洲・蒙古・支那を含む一地区であり、その南部は印度と総称せらるる一地区である。而して印度はまたバヤンカラ山脈・印度支那山脈となりてマライ半島に及ぶ一連の山脈によつて更に東西両部に分たれ、前印度・後印度と呼ばれる。その西半即ち前印度は、言葉の狭い意味での印度であり、東半即ちタイ・仏印を含む後印度は印度支那とも呼ばれて來た。そは歴史的並に文化的に、まさしく印度と支那との中間に位するものなるが故に、此の名称は極めて適切である。

次には、亞細亞大陸の太平洋岸に沿うて、東北より西南に走る山脈を根幹とする島々及び半島が、綿々として遠く海上に連つて居る。即ち北はカムチャッカより日本列島・朝鮮半島・フィリピン・ボルネオ・セレベスを経てシャワ・スマトラに至る無数の島々及び半島であり、是亦亞細亞の一地区を形成する。

バミール高原以西に位する亞細亞の西半は、また此の高原より出でて西に走るヒンドウクーチュ山脈・エルブルース山脈・コー・カサス山脈によつて南北両部に分たれる。その北半はシベリア・中央亞細亞を含む一地区であり、南半はイラン高原・小亞細亞・アラビアを含み、一般に西南亞細亞と呼ばれる一地区である。

是くの如く亞細亞大陸は、先づ地形的に五大地区に分たれる上に、気候風土及び之に伴ふ動植物界、即ち地理学者の謂はゆる景観によつて、更に別個の地域に区分せられ、それぞれの地域に生活する住民の運命を決する上に、極めて重要な役割を勤めて来た。

景観的区劃の第一は、季節風の影響下にある湿润地帯である。そは北は日本列島・朝鮮半島・南満洲・支那より東南亞細亞を経て、南は印度・セーランに至るまでの太平洋及び印度洋に面する地域を含む。此處では此等の大洋から季節を定めて吹き上げる湿風の影響によつて、氣候は温暖湿润であり、且その多湿なる風が亞細亞の屋根に当りて沛然たる雨となり、インダス河・ガンジス河・メコン河・揚子江・黄河等の長江大河となりて流れ下る。而して此等の河川によつて堆積され澆溉されて、沃野遺く開けて居るので、最も農耕に適して居る。現に亞細亞農民の九割が實に此の湿润地帯に住んで居る。

此の湿润地帯の北方並に西方には、亞細亞の屋根によつて此の地帯と隔離され、季節風の影響を受けず、従つて雨量に乏しき亞細亞内陸の乾燥地帯がある。そは北は蒙古・青海の高原より中央亞細亞の盆地を経て、西は裏海・黒海の北岸地方に及ぶ地域である。此處では滿目荒涼たる沙漠と貧寒なる草地が其の大部分を占め、僅に遊牧地として利

用し得るにすぎない。

此の乾燥地帯の北部には、東は北太平洋から西はウラル山脈に至るまで、東西に延びたる狭長なる亞湿润地帯がある。此処では東はオホーツク海から、北は北冰洋から吹き上げる風が、長白山脈・興安嶺・ヤブロノイ山脈・サーヤン山脈等に当りて雨雪を降らし、黒竜江・レナ河・アンガラ河・エニセー河・オビ河・イルティシュ河等となりて流れ出る。そのために上記諸山脈の北斜面及び山麓一帯には、鬱密たる森林が遠く東西に連なつて居る。而して此の森林は良好なる毛皮の产地であり、また河川は魚類に富むが故に、此の地帯は狩猟及び漁撈の好適地である。

此の森林地帯の北方には、北冰洋に向つて開けたる茫茫たる平原があり、寒冷不毛にして人類の住むに堪へざる凍土地帯を形成して居る。

最後に南亞細亜は、大体に於て中央亞細亜の乾燥地帯と同様の景観を呈して居る。但し此処では、裏海・黒海・地中海・紅海・アラビア海・ペルシア湾が四方を囲んで居るため、沿海地方には局部的に降雨流水に恵まれたる沃野がある。世界最古の文明の一が、此等の沃野に発祥することは世間周知の如くである。

是くの如く亞細亜大陸は、景観的に四大地帯に分たれて居るが、湿润地帯と乾燥地帯との接觸地は、それぞれ両者の中間的景観を呈し、そのために前者に於ては遊牧と農耕とが、後者に於ては狩猟と農耕とが併せ行はれて居る。

さて亞細亜に居住せる人類は、上述の如き基本的な地理条件、即ち地形的並に景観的条件によつて、其の活動範囲を規定され、また其の生活様式を支配され乍ら、幾多の民族に分化して往つた。いま之を其の生活様式について観れば、かかる分化は夙くも新石器時代或は金石併用時代に於て行はれ、亞細亜住民の大部分は湿润地帯に於ては農耕民族、乾燥地帯に於ては遊牧民族、亞湿润地帯に於ては狩猟民族、また湿润・乾燥中間地帯に於ては半牧半農民族、亞湿・乾燥中間地帯に於ては半狩半農民族となつて居た。

さて亞細亞の湿润地帶は、地形的には其の三大地帯を包含して居る。而して此の三大地区を代表するものは、取りも直さず日本・支那・印度である。吾等が歐米と接觸する以前に於て、吾等の世界とは唐と天竺、即ち支那と印度を中心とする亞細亞の東半を意味し、此等の両国に日本を加へて之を『三國』と呼んで来た。いま吾等は此の『三國』を大東亜圏と呼び、新しき秩序を此處に實現するために戦ふ。

一 支 那

大東亜圏は亞細亞大陸の湿润地帯なるが故に、此處に興亡せるものは農耕民族であり、其の中軸をなせるものは、北に於ては支那、南に於ては印度であった。吾等は先づ支那民族發展の跡を辿るであらう。

支那に於て最も早く農耕民の出現を見、従つて支那文明発祥の地となりしは、黄河の中流地域即ち今日の陝西・山西・河南三省を含む一帶の地で、支那史上の謂はゆる『中原』である。何故に支那文明が、一層生活に好適なる南方温暖の沃野、例へば中支の揚子江流域又は南支の珠江流域に起らずして、北支を其の発祥地としたか。そは多くの人々によつて抱かれる疑問であるが、理由は寧ろ簡単である。即ち太古の揚子江又は珠江流域は、今日のニューギニアが然る如く、鬱葱たる密林に蔽はれし瘴烟蛮雨の地であり、之を開拓することが殆ど不可能なりしに反し、蒙古沙漠の南辺に近き黄河中流地方は、広闊なる草原地であり、従つて農耕に容易なりし故である。單り支那の場合に限らず文明は概ね沙漠縁辺の草地に起つて居る。印度文明は広大なるガンジス河流域に於て非ず、却つてタール沙漠の北辺に連なるパンジャブに起つた。エジプト文明も北アフリカの大沙漠を流れるナイル河両岸の草原に起り、小亞細亞文明も沙漠の間の草地に起つて居る。

さて支那人が黄河中流域に農耕民族として現れたのは、恐らく四千年前のことであるが、東洋史上の最初の確實

なる王朝と言ふべき殷代には、既に聚落生活より都市生活に發展し、大小幾多の都市國家を形成して居た。而して其等の都市國家群の間に、他を圧して優位を占めたる強國が現れ、諸國を其の支配下に置くに至つた。夏及び殷が即ちそれである。殷代の初期まで、支那人は悉らく牧畜と農耕とを兼ね當んで居たが、その中期に於て鐵を農具に使用するに及び、農業は著しく發達するに至つた。

西紀前約千年の頃、渭水盆地に起りし周が、殷を上ぼして支那に君臨し、その盛時に於ける勢力範囲は、今日の陝西・山西・河南・河北・山東諸省、及び安徽・江蘇兩省の一部を含む地域に及んだ。周は此の領土を統治するためには封建制度を採り、分散せる都市國家を此の制度の下に統一して、茲に、支那民族の結束を堅め、爾來長久に支那の公私生活を律する規範が、夙くも周代に於て其の基礎を置かれ、支那文明をして万古不易の方向を取らしめることとなつた。

周室の勢威衰へて春秋時代となり、次で戦国時代に入るや、封建諸侯は互に抗争を事とし、各自富強の策を講じて國力の充実を圖つた。諸国の中うち支那の東部に位せるものは、海洋に接近せるため領土拡張の途なかつたけれど、北・西・南に位せる諸国は、隣接せる異民族の国土を強制的又は合意的に併合して開墾植民を行ひ、彼等の間に支那文化を扶植して行つた。

春秋時代の初期に、漢水の下流即ち揚子江の中流域に勃興せる楚は、その君主が『我蛮夷也』と傲語せる如く、湖北省宜昌地方より起れる異民族であるが、次第に強大となりて北支を脅威する勢を示した。單り楚のみならず、西方及び北方の諸異民族も、屢々辺境を犯したので、諸侯のうちの有力者が、尊王攘夷を標語として諸侯を糾合し、以て支那民族を防衛し、支那文化を擁護するに努めた。謂はゆる霸者の業である。而して異民族のうち最も強大なりしは楚なりしが故に、楚に勝てば霸業成り、之に敗るれば霸業また敗れた。春秋末期には楚もまた衰へたが、いまや揚子

江下流に吳越西國が起つた。此等の國々を建てたる者は、みな異民族なりしに拘らず、支那の古聖先王の裔と称へて居たことは、此頃に至りて支那文化が北支より中支に浸潤し来れることを物語る。

戦国時代に入りては、周の封建制度は全く崩壊し、群小國家は次第に統一せられて六大国となり、互に富国強兵を競ひて霸を争うた。而して此頃には南方の楚・吳・越は皆な支那化し、従つて南北の対立抗争の代りに、東西の対抗を見るに至つた。それは陝西に勃興せる秦が年と共に強大を加へたので、函谷關以東の六国は、相結んで之に当らねばならなくなつたからである。此の激しき列強対立の間に、周代の階級制度や宗法制度は弛緩し初め、身分よりも才能が重んぜられ、匹夫より起つて將相となる者も生じた。諸子百家が出でて凡ゆる思想・学説を唱へた。光彩陸離たる支那の古典は概ね此の時代に成れるものであり、まさしく世界思想史上の偉觀である。同時に農耕の技術も発達し工業も進歩し、商業も栄え、交通の発達に伴ひて諸国間の往来も頻繁となり、茲に新しき時代の出現が必至の勢となつた。黃河農耕民族は其の發展の一頂点に達したのである。

秦は此勢に乗じて六国を亡ぼし、天下を統一して一挙郡県制度を布いた。唯だ其の余りに劃一的な官僚專制政治が、東南の旧封建諸國の民衆の不平を激発し、遂に此の地方を代表して起てる漢の高祖のために亡ぼされた。かくて漢は一時封建制度を復活したが、武帝の時に至つて事実上消滅した。

秦始皇帝は、北は万里長城を築いて匈奴の南下を防ぐと共に、南は遠く福建・廣東・廣西を征服して、支那民族南進の端緒を開いた。然るに漢の武帝に至りては、北方異民族に対しても積極的に之を討伐し、西は遠く西トルキスタンにまで武威を及ぼし、西域諸國との通商貿易の路を拓いた。而して南は雲南を越えて東京・安南を経略し、東は水陸より朝鮮を攻め、北鮮に楽浪以下の四郡を置き、朝鮮半島の北半を直轄領土とした。前後西漢四百年の間、朝廷に於ける政変は屢々繰返されたが、それは必ずしも民間の繁榮を妨げず、また支那民族の对外發展の大勢を殺がなかつ

た。

漢亡んで三国分裂の時代となつても、支那民族そのものの力は決して衰退せず、三国競つて辺境の征服に力を用ひた点から言へば、寧ろ民族的發展の時代であつた。即ち魏の曹操は陝西・山西の匈奴を討ち、満洲・朝鮮に兵を用ひその勢威は遠く吾国にも及んだ。蜀の劉備は蛮民尚多かりし四川を根本的に平定せる上、名高き孔明の南征によつて雲南を開拓した。吳の孫權は台灣・海南島を略し、更にサイゴン・カンボディア方面にまで勢力を伸べた。

さて支那人が黃河流域に農耕民族として現れて以来、常に彼等を脅威せるものは北方慄懾の遊牧民族であつた。支那人は常に彼等の侵寇と戦ひ、之を擊退して彼等の文明を護つて來た。かくて戰國より秦漢時代に至る間は、支那民族の北方發展時代であつた。併し乍ら支那の北辺は蒙古の沙漠に連なり、其処に自ら天然の障礙がある。北方に於て東は既に南滿に進出し、西は甘肅・陝西の北部に繁殖せる支那人は、今や一応北方進展の限界に達せるものである。それ故に支那民族の發展は、当然南方の開発に向ふべきであつた。また北方異民族は、歷代支那民族に圧迫せられ、また其の文化に影響されて、漢代以後には帰順して内地に來り住む者も多く、北支那の北部は謂はゆる漢蕃雜居の地となつた。

此等の異民族は匈奴・鮮卑・羯・氐・羌の五種に分たれ、總じて五胡と呼ばれた。彼等は魏の後を承けて天下に君臨せる西晉の無力に乘じ、競ひ起つて之を倒し、北支を混沌亂離の巣とした。彼等は十六国を建てて対立抗争したので、五胡十六国と呼ばれて來たが、そは決して國といふ名に値せざる一時的の地方勢力に過ぎなかつた。やがて鮮卑族出身の拓跋珪が群小勢力を圧倒して北魏を建て、都を平城（山西省大同）に奠めて帝位に即き、其孫の時代に悉く江北を統一して、茲に支那史上最初の異民族支配の大國が出現した。而して爾來北朝三百年の間、胡族の北支君臨が続いた。

但し支那民族は、仮令胡族支配の下に在りしとは言へ、社会的・文化的には却つて其の征服者を同化して往つた。

加ふるに北朝の君主は概ね支那文明の崇拜者であり、例へば北魏の孝文帝の如き、都を平城より洛陽に遷し、士民の胡服を禁じ、朝廷に於て鮮卑語の使用を禁じ、姓名を支那風に改めさせ、且盛んに支那の人材を擧用した。併し乍ら彼等は、よし支那文化を尊重したとは言へ、純粹の支那人の如く旧き伝統に囚はれることなかつた。彼等は漢代以後不斷に支那に伝来せる西域系並に印度系文化を自由に攝取した。就中彼等は篤く仏教に帰依した。かくして北朝文化は、支那伝統の文化に外来の要素を加へ、頗に國際的色彩を帯びるに至つた。

さて江北が異民族の支配に歸するや、江南の地が上流支那民族の避難処となつた。此處には彼等によつて開発せらるべき無限の土地と資源とがあつた。此處で東晉以下の南朝が、中原の学芸文物を擁して君臨し、北支胡族に対抗して純粹なる支那文化の護持に努めた。但し南方の温和清明なる天地は、北支の厳烈なる自然を反映せる秦漢文化に、著しく典雅優麗の趣を与へるに至つた。

さて南北分離は隋によつて統一せられ、その統一は唐によつて完成された。而して唐の盛時に於て、支那民族の勢力圏は空前に拡大された。そは北は内外蒙古を越えてバイカル湖畔に至り、西は葱嶺を越えて西トルキスタンに及び以て西域貿易を完全に掌裡に收めた。而して南は安南・環王（チャムバ）・真臘（カムボディア）・驃（ビルマ・タイ）諸國の入貢を受け、東は満洲・朝鮮を越えて沿海州に及ぶ広大なる地域に勢威を揮つた。そは實に規模雄大なる帝国主義であり、唐朝は之を遂行するために、秦漢時代に見るを得ざりし猛烈執拗なる侵略戦争を敢てした。而して此の帝国主義は、唐朝滅亡以後に於ても、宋・元・明・清と相伝へて、その主権者が支那民族たると異民族たるとを問はず、支那政權の伝統的国是となつて來た。唯だ宋だけは、相次いで北方に興れる異民族を仰へる国力なく、遂に元のために亡ぼされたが、他の三朝はみな同一の大帝国主義を以て東亜に臨んだ。

さて支那は唐代に於て明かに東亞の指導者であり、その指導の下に東亞は一個の共栄圏を成して居た。即ち唐の盛時に於ては、日本を除く東亞全域が悉く其の勢力圏内に入り、次で唐の衰世には圏内の諸民族が概ね独立するに至つたが、彼等は独立以後に於ても尚ほ唐の宗主權を認め、唐を中心として其の存立を保つて居た。東洋民族史上に於ける比の異常なる事業は、如何にして成し遂げられたか。之を明かにすることは、現に一層雄渾なる規模に於て大東亞秩序を建設せんとしつつある日本に取りて、他山の石たることを失はない。

唐が此の偉大なる事業に成功せる第一の原因は、他民族に対して寛容なりしことである。唐は其の強大なる国力を以てして、支那民族の通弊たる排他独尊の固陋に陥ることなく、能く他民族を理解し、比較的寛大なる態度を以て之に接した。蓋し隋唐は漢蕃雜居の地たる北支を地盤として崛起せるものであり、隋唐兩朝の祖先は共に蕃系の出にして眞の漢人に非ずとさへ言はれて居る。それ故に初めより華夷を峻別しなかつた上に、創業の功臣に異民族出身のもの多く、其後にも文武の高官に重用された者が少くなかった。かくして唐朝は異民族に対して一般に寛容であり、決して過度に之を蔑視する如きことはなかつた。

第二には唐代文化が著しく國際的性格を帶びて居た。北朝文化の國際的性格については既に一言せる如くであるが其の系統を継ぎたる唐朝文化は、一層世界的色彩を濃厚にした。唐の勢力圏が遠く裏海海岸にまで及ぶに至つて、世界三大文化中心の一たる支那が、他の二中心即ち印度・歐羅巴と連結する路が開かれ、此の西北ルートを通じて西方の新文化が滔々として支那に流れ込んだ。加ふるに唐代は支那史上に於て例外とも言ふべき尚武の時代であり、武人が新興階級として社会の上層を占め、今日其の盛名を誇はれる学者文人も当時は名もなき武人の下に逼塞して居た。彼等は文人の如く支那伝統の文化に囚はれず、東洋全域に拡大せられたる大唐帝国の一切の文化や、西方より輸入せられる新しき文化を、好むが尽に自由に採択した。かくて唐の首都長安は、古のアレキサンドリアやバグダードにも

比ぶべき豪華なる国際的文化都市となつた。此處では世界の凡ゆる珍宝が集められ、凡ゆる宗教が奉ぜられ、諸國の商人や留学生が来往した。酒樓では西トルキスタンの葡萄の美酒がシリアからの夜光の杯で酌まれ、胡姫が胡樂を彈じ胡舞を舞つた。精神界に於ても純粹の支那思想たる儒教が、唐の盛時に於て却つて萎靡振はず、之を前の戰国・漢時代、又は後の宋・明・清時代に比べて甚だしく寂寞である。之に反して仏教・毬火教・景教・摩尼教等の外来宗教及び其の教理が、多くの人々に歓び迎へられた。わけても仏教は、曹操等によつて代表せられる功利主義、竹林七賢によつて代表せられる虛無思想、乃至民間信仰として臺頭せる道教などが、いづれも淺薄卑俗にして精神的要求を満足せしめ得ざりし時に、その大乗化されたる理論と壯嚴なる儀礼とを以て、最も多くの信奉者を得た。かくの如くにして唐朝文化を根幹として、印度の哲学宗教、ペルシアの思想芸術、西域の風俗習慣、安南の音楽舞踊など、一切の亞細亞的なるものを枝葉華実とせる絢爛無比の国際的文化となつた。そは純粹なる支那文化に非ず、華夷の別なく全亞細亞の學問・信仰・芸術・風習を混融せる文化なりしが故に、容易に東亜諸民族の受け容れるところとなつた。唐が能く東亜全域を統一し、其の指導者たるを得たのは、恐らく叙上の兩原因によるものである。

唐朝亡んで五代混乱の後に興れる宋朝は、唐末軍人跋扈の余弊に懲りて極端なる卑武政策を採りしため、最初より兵弱くして国威四隣に及ばざりしのみならず、却つて北方の強隣遼・金の異民族に圧迫せられて南渡の止むなきに至り、遂に蒙古人たる元のために亡ぼされた。是くの如き異民族との死活の抗争は、自ら強烈に宋の民族意識を刺戟して華夷峻別の態度に出でしめ、純粹支那文化の護持を国是とするに至らしめた。而して此事は、隋唐によつて民族的自覺を喚起せられたる東亜諸民族を刺戟し、彼等もまた独自の文化を保持するに努めたので、茲に空前の規模に於ける諸民族の分裂發展時代を現出せしめた。

此の分裂時代は、元の欧亜に跨る偉大なる帝国建設によつて終結し、全支那は其の支配下に歸した。支那に君臨す

る異民族は、支那文化を重んずるのを常とするが、元だけは其の例外であつた。元は往昔の遼や金、又は後來の清朝と異なり、毫も支那文化を崇拜せず、また支那人に同化せられず、好んで彼等を圧迫した。その理由は元朝が支那を征服する以前、既に中央亞細亞より西亞細亞を経略し、進んで歐羅巴の中原を脅して、此等の国々の制度文物に接触して居たので、遼・金・清等の夷狄の如く、漢土の文明に驚愕駭魄することなく、従つて彼等の如く支那文明を世界最高のものとして憧憬することなりし故である。加ふるに蒙古軍の鐵騎の向ふところ、都鄙の漢人悉く草の如く靡き去つたので、その柔弱無力は彼等の軽蔑を免れなかつた。但し支那民族そのものは、元の圧制下に在りても決して衰へ又は滅んだのではない。よし政權と武力とを失つたとは言へ、元の政令の及ぶところ広大を極めただけ、それだけ彼等もまた雜草の蔓る如く四方に發展して往つた。

元を亡ぼして支那民族の支配權を蒙古人の手から奪回した明朝は、支那全土を統一した上に、元の先蹟に従つて四方の經略に従ひ、その版図は遙に漢唐時代を凌ぐに至つた。唯だ中央亞細亞には時を同じくして英雄帖木兒が崛起したので、西方への發展は漢唐時代の如くなるを得なかつたが、東北は滿洲より西南はビルマまでも版図に入れ、殊に其の海軍遠征隊は、インドネシア・印度支那・セーランより、ペルシア湾を越えて東アフリカ海岸を攻略し、マラッカ・セーラン其他の諸小国を初め、遠く東阿のソマリランドから明朝に朝貢させた。此間にインドネシア及び印度支那方面への支那移民が著しく増加した。

清が明朝を亡ぼすに及んで、支那は又もや異民族を支配者と仰ぐに至つた。併し乍ら大清帝国は元と異なり、建國者は滿洲人であつても實質に於ては滿・支・蒙・回・藏五族協力の國家であり、一種の東亞共榮圈でもあつた。清朝盛時に於ては、その版図は明代を凌ぎて殆ど東亞文化圏の全域を蔽つて居た。かくて支那の人口の如きも、漢唐以来概ね四五千万を超えるが、今や清朝の善政に伴ひて頓に激増し、一億二

億より遂に三億四億と称せられるに至つた。それ故に当時初めて東亜に進出し来れる英露両国の如きも、初めは頗る大清帝国の勢威を憚つて居たが、その衰勢に乗じて次第に領土的野心を逞しくし来り、遂に歐米列強による支那分割が必至の勢となるに至つた。是に於て永年東亞大陸に対して殆ど没交渉の態度を持し来れる日本が、敢然起つて東亜保全のために先づロシアの野心を撃き、今や大東亜戦争によつて米英勢力を掃蕩して、最も雄渾なる規模に於て大東亜秩序の建設に邁往しつつある。

三 印 度

支那民族の發展を叙し終りて、次に述べんとするは印度である。既に一言せる如く、印度に於て農耕民の発祥を見たるはパンジャブの草地であつた。そは支那に於けると略ぼ同様の徑路を辿りて、經濟的・社会的・文化的につけて往つたが、西紀前二千年頃より、中央亞細亞の乾燥地帯に半牧半農の生活を営んで居たアーリヤ人が、恐らくオキサス河畔に在りし故郷を去り、ヒンドウクーリュ山脈を越えてアフガニスタンのカブール盆地に入り、更にカイバル峠によつてスライマン山脈の嶮を横ぎり、インダス河の上流地方に入り來つた。

インダス河流域は古よりパンジャブ即ち『五河国』と呼ばれ、その肥沃と広袤とはガンジス平野に及ばないけれど西方曠漠の間に在りて原野美しく開け、氣候また清り溫和なるが故に常に印度以西諸民族の垂涎するところである。初めて此處に来れるアーリヤ人は、洋々として海の如き大河に会ひて之をシンドウ即ち『海』と名づけ、居を其の諸支流の間に占め、此等の川々に潤される沃野に家畜を牧し農耕を営みながら、常に『富を与へる榮譽の信度河』を讀へて居た。印度最古の思想信仰を知るべき四吠陀は、アーリヤ印度人が尚未だ此地を其の国土とせる時代に成れるものである。

印度西隣に興亡せる幾多の民族は、幾度かスライマン山脈を越えて此の沃野に浸入した。スライマン山脈を横断する二個の峠路がある。北なるはカイバル峠、南なるはボーラン峠にして、共に峻険無双の山道なるに拘らず、印度無限の富を目指す剽悍好戦の民を阻むに足らなかつた。印度は實に上古より西北蛮人の掠奪の目標であつた。而して温暖の氣候、豊沃の土壤は、やがて侵入者の懶惰淫逸を促し、昔日剛健の民、年と共に柔弱の民と化し去るに及んで、再び西北蛮人の悔るところとなり、その侵入を招き其の掠奪を蒙らざるを得なかつた。かくて西紀前五三〇年ペルシア王ダリウスの印度遠征軍派遣以来、嶮路を越えて印度に侵入せるもの實に二十四回に及び、その都度破壊と掠奪と変革とが繰返された。此の地理と歴史とは、印度の民族、印度一切の人事、従つて印度の文化に深刻鮮明に反映して居る。

今日に於て印度人と言へば直ちにアーリヤ人に想到する。印度を活動の舞台とし、印度文化の中心勢力となりしものは彼等に外ならぬ故に、是く考へることに無理はない。併し乍ら太古の印度住民は、西藏・ビルマ方面より來りし黃色人種であり、次でコラリア人もまた東北より入り來りてガンジス河流域に住んで居た。其後ドラギダ人が強大なる團結の下にパンジャブ地方に侵入し來り、先住民族を四方に駆逐して肥沃の原野を占領し、アーリヤ人渡来以前に於て、高き程度の農耕社会を形成して居た。今日コラリア人は僅に北方の山地及びギンドヤ山間に散在するだけであるが、ドラギダ人は尚ほ隨處に存続し、其のアーリヤ印度人に及ぼせる影響は甚大であつた。わけても行政及び租税制度に於てアーリヤ印度人は彼等に学ぶところ多かりしのみならず、仏教衰微後に印度に興隆せる新婆羅門教は、ドラギダ人の思想信仰に影響されたこと少なくないと言はれる。

アーリヤ人はドラギダ人が既に印度に占拠せる後に、インダス河上流地域に入り來れるものである。彼等は先住土民を征服して、次第に其の版図を拡めて往つた。而して之と共に牧主農副の民から農主牧副の民と變つて往つた。そ

の侵入の当初に於ては、恐らく尺寸の地と雖も争闘なくしては之を手中に收め難かりしが故に、当時のアーリヤ印度人は、敢為にして進取的なる遊牧民族の特性を示し、毫も後世に見る如き厭世悲觀の風がない。彼等は土民との戦争に於て常勝の歩武を進め、到處に部落を造つて往つた。而して戦争は實に土着民に對してのみならず、後には是くして生じたる彼等自身の群小部落の間にも激しき生存競争が行はれた。リグ吠陀の謂はゆる『五族』は、是くして大を成せる彼等の間の五大部族であり、その五族の間にも屢々戦争が行はれた。其頃の彼等の最も好める娯楽が、狩獵と戦車競争と骰子遊びなりしを見ても、彼等が活潑にして好戦、快活にして樂天的なりしことを想像し得る。

是くして彼等は次第に東方に其の領土を拡め、ガンジス河の広大なる流域に進出するに至つた。そのころには彼等の社会は益々農耕的色彩を濃くし、遂に完全に農民化した。而して恰も殷周時代の黄河流域に於ける支那人と同じく彼等もまたガンジス河流域に幾多の都市国家を建設し、其等の群小都市国家の間に激しき鬭争が行はれた。吾等をして当時の印度の状態を察知せしむるものは、史詩マハーバーラタである。而して此間に成立せる印度文化のうち、最も重要なは其の特殊なる社会組織即ち種姓制度である。

種姓制度は一般にカーストと呼ばれ、血統の純潔を意味するラテン語 *Castus* より來り、当初ポルトガル人の命名するところである。ポルトガル人の印度に到るや、彼等は直ちに此國に於ける特異なる制度に驚異の目を見張つた。彼等は印度人が「異なる種族及び種姓 *Castus* に分たれ、其間に高下貴賤を定め、高き種姓のものは卑きものと飲食を共にせざるほど、迷信的に此の階級制度を嚴守する」と報告した。即ちポルトガル人は、印度種姓制度の最も人目を惹く一面を、直ちに看取したのである。而も此の制度に於ける一層重要にして根本的なものは、飲食に関する規定に非ず、實に結婚に関するそれである。若し結婚に関する嚴重なる規定がなかつたならば、恐らく此の制度は夙く崩壊し去つたであらう。蓋し種姓制度の期するところは、社会を永久に幾多の階級又は団体に分ち、堅く其の混淆

を禁ずるに在る。而して此の目的は、異なる階級の結婚を嚴禁することなくしては遂げらるべきもない。然らば是かる制度は如何にして発生したか。

種姓の梵語 *Varna* は『色』を意味する。此語は初め白色人たるアーリヤ印度人が、先住の有色人と自己とを区別するために用ひたもので、恐らく同族間の階級的区別を表すものでなかつた。リグ吠陀には四姓制度の胚芽とも言ふべき讃歌があるけれど、吠陀時代には決して厳格なる種姓の区別を見なかつた。種姓制度が其の基礎を置かれたのは彼等がガンジス河流域に進出して、完全なる農耕民となれる後のことである。今日の種姓制度は複雑繁瑣を極めて居るが、その根本原則として今日尚ほ權威を有するは、マヌ法典中の種姓に関する捷である。

マヌ法典を見すれば明瞭なる如く、此の制度は婆羅門を中心として樹てられたるもの、即ち婆羅門の尊嚴を維持するために立てられたるもの、従つて彼等が印度社会に最高の權威を確立せる時に立てられたものである。いづれの民族も一度は祭政一致の時代を経過して居る。而して多くの民族の場合は、政治と宗教とが分化せる後は、よし宗教家が社会的に高き地位を与へられても、遂に王侯貴族の下位に置かれるやうになる。独り印度は然らず、アーリヤ印度人がガンジス河流域に民族的發展を遂げつつありし間に、万古不易の僧権の確立を見るに至つた。

種姓制度は印度人を先づ婆羅門・刹帝利・毘舍・首陀羅の四階級に大別する。婆羅門は即ち祭祀を掌る僧侶階級にして、四姓の最高位を占める。もとアーリヤ印度人が初めてインダス河流域に移れるころは、家長又は酋長が同時に支配者であり且祭祀者であつたが、吠陀時代の末期に至りて、祭祀は一種特別の職業となつた。而してガンジス河時代に入りてよりは、在來の宗教が一面に於て哲学的思索の母となると同時に、他面に於て民間信仰の対象たる儀礼的宗教を生み、而も其の儀礼は年と共に複雑多端となり、加ふるに人間は正しき儀式を通してのみ宗教的幸福に与り得るものと信ぜらるるに至り、茲に印度の僧侶階級は、王侯庶民の吉凶禍福を掌中に握ることとなつた。是くの如き

有力なる地位を確保するに及んで、婆羅門の男子は他姓より妻を娶ることありとしても、女子は決して他姓に嫁してならぬといふ鉄則が立てられた。

刹帝利は即ち王侯貴族である。是亦当初は特別の階級を形成して居たのでなかつたが、民族東漸と共に大小国家の建設を見、王権次第に強大となるに及んで、一般民衆と懸絶せる優越階級となり、王侯の子女は民衆に降嫁してならぬこととなつた。此の種姓成立の過程に於て、婆羅門と王侯との間に優位争奪の角逐衝突ありしは想像に難くない。僧侶の權力増長に対し、王侯もまた其の權力を張りて相争ひし事実は、ウバニシャッド並に二大史詩によつて容易に窺ひ知ることが出来る。而して幾度かの衝突の後、勝利は遂に婆羅門に帰した。

治者階級たる叙上兩種姓を除くアーリヤ印度人即ち一般民衆は毘舍である。毘舍は『耕す』を意味する語根より來り、初めは農耕に従事するアーリヤ印度人の総称であつた。叙上三姓は『再生族』即ち精神的に更生し又は更生し得る種族として、アーリヤ印度人以外の異民族と區別せられ、種姓制度成立以後に於ても、当初は後世に見る如き苛烈なる階級的差別なく、僧侶も王侯も平民も、各自祖先以来の仕事をいそしみ乍ら、等しく教學に与り、同じく飲食し婚姻を通じて、非アーリヤ人に対して高貴を誇つて居た。

第四の首陀羅は、吠陀時代の被征服者の子孫であり、ガンジス河時代には既にアーリヤ化して居たが、征服者からは依然として奴婢階級として侮蔑的待遇を受け、絶対に前三者に奉仕服従すべきものと定められた。是くの如き根本規定から、時代を経るに従つて際限なく種姓の分岐が行はれた。その分岐は、一は混血により他は新しき職業の発生によつて生じた。今日に於ては實に大小二千以上の種姓があり、互に婚嫁せず、互に交際せず、各自それぞれの職業に従ひつつ印度社会を構成して居る。

かかる間にガンジス河流域に於ける印度民族の發展は目覚ましく、大小の国家互に富強を競ひ、その競争の間に百

花繚乱たる印度文化の出現を見た。そは印度の戰国時代とも称すべく、且支那の戰国時代と同じく、思想的にも印度精神の活動は最も激烈たるものがあつた。婆羅門至上主義が確立せられ正統の婆羅門哲学が深遠なる思想を説いた。やがて之に対する反動が起り、耆那教・仏教等の新宗教が唱道された。仏典に屢々十六大国を云々して居るが、此等の大國以外に無数の小国ありしは言ふまでもない。其等の大小国家群のうち、マガダ・コーラの両国が次第に四隣を併せて強大となり、互に対立して譲らなかつたが、勝利は遂にマガダ国に帰し、茲にやがて生るべき偉大なる帝国の礎が置かれることとなつた。

さて印度に於ける最初の統一帝国の出現を促せるものは、西紀前三二六年に行はれたるアレキサンドル大帝の印度侵略にして、ナンダ王朝がマガダ国に君臨せる時のことである。アレキサンドルの遠征軍は、疾風枯葉を捲くが如く容易に西北印度の群小國家を従へ、進んでガンジス河流域に進出せんとしたが、將士征戦に倦みて帰心矢の如くなりしを以て、アレキサンドルは心ならずも軍を回した。彼はインダス河を下りて海路ペルシア湾に出で、海を渡りてバビロニアに到り、此處で熱病に冒されて長逝した。其計一たび印度に伝はるや、彼によつて征服せられしパンジャブ地方は、忽ち起つて反乱し、動搖は惹いて中央印度にも及んだ。若年の英雄チャンドラグプタが、此の機運に乘じ、起つてナンダ王朝を倒してマガダ国王となり、四隣の小国を従へてアレキサンドルの遺将セロイコスと戦ひ、和議を結んでギリシア人によつて征服せられし印度内の領土を悉く回復し、更にライマン山脈の彼方アフガニスタン及びバクトリアを併合した。かくてチャンドラグプタは、ギンドヤ山脈以北の印度を版図とせる統一的帝国を建て、謂はゆる孔雀王朝即ちマーウリヤ王朝の祖となつた。而して其子ビンドゥサーラは更に其の領土を南方に拡め、西北はアフガニスタン・バルチスタン等の異域を含み、南はタミル諸国と境を接し、殆ど全印度を包容する一大帝国となし、之を其子アシヨーク大帝の手に委ねた。

仏教の篤信者として著聞するアシ・ーカ大帝は、謂はゆる『道を以てする征服 Dharmavijaya』を標榜して国民の教化に全力を注ぎ、且つ国外に仏教伝道者を派遣した。かくてアシ・ーカの出現によつて、仏教は一地方たるマガダ国より全印度に弘布するに至れるのみならず、彼の信仰を通して変容せられ、やがて世界的宗教たるべき素地が作られた。

ギリシア人の報告によつて知られる如く、孔雀王朝治下の印度は、その整然たる行政機構に於て、その強大なる軍備に於て、軍事と文治との截然たる分化に於て、政治指導原理の優秀に於て、乃至その首都の規模雄大に於て、同時代の世界諸国に絶えて其比を見ざる偉大なるものであり、当時の印度文化が如何に高き段階に達して居たかを物語る。但し此の偉大なる帝国の生命は永続しなかつた。大帝の歿後、國運は頓に衰へ、西紀前一八五年に至り、建国より僅に百五十年にして亡び去り、印度は又もや以前の戦国時代となつた。

この混沌たる分裂割拠時代に、印度は頻々として異民族の侵略を受けた。其等の侵略者のうち、もと支那の甘粛省に居住し、匈奴に逐はれて西漸し、更に南進してバクトリアに入り、此處で遊牧生活を棄てて定着せるトルコ人の一種なる月氏族の一部族が、西紀前四十年ごろクシャーナ王国を建て、印度に侵入してカシュミール・マガダを含む北印度を其の領土とした。此の王朝の第三世は、第二のアシ・ーカと呼ばれし仏教の篤信者カニシカ大王であり、ペルシヤツールに都を喰め、印度・イラン・トルキスタンに跨る広大なる帝国に君臨した。但し此の帝國もまた僅に百年にして亡び、印度は再び小国乱立時代に回つた。

其後西紀第四世紀に至り、シュリー・グプタなる者が、マガダ国のパトナを都として一小国を建てたが、西紀三二〇年その第三代チャンドラグプタが王位に登りてより国威頓に揚がり、其子サムドラグプタの時代には殆ど全印度を統一し、次でチャンドラグプタ第二世即ち超日王の時代に至りて、實に印度空前の大帝国となり、印度文化もまた其

の最高潮に達した。

前後二百年に亘るグプタ王朝治下の印度こそ、印度史上に空前絶後の黄金時代であつた。国王は婆羅門教の篤信者であつたので、一時仏教や耆那教に圧倒された婆羅門教が復興し、社会には種姓制度が再び強調された。而も王室は仏教や耆那教に対しても極めて寛容であつた。名高き世親・無着兄弟の出世も此の王朝の時である。帝国の組織制度は、孔雀王朝時代よりも一層整備し、教育は普及し、社会政策が見事に行はれ、死刑は廃止された。此の王朝の最盛時に印度を訪へる支那僧法顯は、王朝の善政下に平和なる生活を樂しめる印度民衆の状態を叙して『拳国の人民悉く殺生せず、飲酒せず、葱蒜こうざんを食はず』と言つて居る。生活の豊かなることが当然文化の発達を促して、学術・文学・芸術が爛漫と咲き香つた。印度が世界に誇り得る偉大なる詩人カーリダーサも此時に出た。陸路・海路を通じて西欧との交通も盛んに行はれた。東方に向つては既に西紀前第三世紀頃より印度人は強力なる海運を以て植民地を印度洋上の島々より、南はセーラン、東はシャムに拡げ、紀元第一・二世紀頃にはマライ半島・カムボディア・安南より、ジャワ・スマトラ・ボルネオにまで植民して、此等の地方に印度文化を移植した。而して、此等の印度植民地を経由して海路による印度と支那との交通も容易になり、法顯の如きも帰途は海路によつて居る。

是くの如き滾々不尽の生命と活力とを示したる印度民族も、繚乱たるサンスクリット文明を満開させた後、又もや萎微凋衰の時期に入り、印度は例の如く四分五裂の状態に陥つた。其後西紀第七世紀初頭、ベンガルに崛起せるヘルシャ即ち戒日王が、一時印度を統一した。此王の盛時に僧玄奘が唐より入竺して滯在十数年に及び、当時の印度事情を今日に書き遺して居る。但し戒日王の歿後幾くもなく、印度は再び混沌乱離を極め、爾来、回教徒支配時代に至るまでの五百五十年間、茫然たる印度の天地、唯だ大小無数の国家が泡沫の如く起伏し、幻影の如く断続せるを見る。此の混沌は、西紀第十六世紀の中葉に至り、西方より印度に侵入せる回教徒によつて漸く秩序を与へられた。即ち

モーガル王朝の建設者アクバル大帝は、一五五六年より一六〇五年に至る半世紀間に、一代にして能く全印度を統一した。帖木兒の子孫と誇る此のトルコ種の征服者は、亞細亞の最も果敢なる好戦民族を率ゐて來た。彼等の強健なる肉体と不敵なる精神との前に、衰弱せる印度人は唯だ屈従する外なかつた。而も回教は單に人間の信仰のみならず、その公私一切の生活を規定する宗教なるが故に、回教徒の印度君臨は、印度人に取りて深甚なる脅威であつた。但しアクバル大帝及び其の相続者は、アウラングゼブを除けば、決して固陋頑迷でなかつた。彼等は男性的な素質と旺盛なる才智と健全なる常識とを以て印度人に臨んだ。彼等は昔なペルシア文学の造詣深く、アグラやデーリの建築物に其の莊麗典雅の趣味を示して居る。わけてもアクバル大帝は、王子の教育をポルトガル人の天主教宣教師に委ねたほど寛容なる精神を有つて居た。彼は當時印度に行はれて居た總ての宗教、即ち婆羅門教・回教・仏教・基督教・猶太教等の代表者を一堂に会して其の教義を討論せしめ、その是非を批判した。而して最後には一切の宗教より其の永遠的なもの抽象して『光明教』を創唱した。然るに彼の曾孫アウラングゼブは、熱狂的なる回教信者として、甚だしき迫害を印度人に加へたので、遂に彼等の猛烈なる反抗を招き、皇帝の死と共に帝国は直ちに瓦解するに至つた。この印度の分裂がイギリス人をして印度の主人たらしめたのである。

回教徒の印度支配以来、回教の内面的・社会的侵入に対して、印度社会の最も強力なる防壁となりしものは、實に其の種姓制度であつた。印度は此の制度を有せるが故に、外面的に回教に支配され乍らも、内面的征服を免れて、印度伝統の文化を護持し得たと言ひ得る。種姓制度が微に入り細に進んで、分裂を重ねたのは、回教徒の印度支配後のことに屬し、實に防禦の必要から生じた結果であつた。今日に於て種姓制度は全く硬化し去り、印度の統一並に発展のための根本的障碍となつて居るが、それは印度に取りて必ずしも全く無意義であつたのではない。

是くの如くにして印度四千年史に於て、全印度が一國家に統一されたことは前後僅に三回にすぎず、而も孰れの王

朝も統一の実を挙げたのは百年乃至百五十年に止まり、其他は常に小国分立の時代であつた。而して其等の三王朝のうち、第一は仏教の篤信者、第二は婆羅門教の復興者、第三は回教信者であり、印度の三大宗教が各々一度は代表的王朝によつて統一的国家を建てた。第四の印度統一者たるイギリスは、基督教徒と標榜し乍ら、実は神と人とを畏れざる無宗教者であり、印度は百年その圧制と搾取とに呻吟して來たが、いまや機運熟して復興の日が近づいた。若し印度人が真個独立の覚悟を抱いて奮起するならば、日本の無私なる援助の下にその失へる自由を回復し得るのである。

四 東北及び東南亞細亜

さて支那及び印度を除く東亞湿润地帯の諸民族は、多かれ少なかれ其の孰れかの、又は其の双方の影響・刺戟の下に発展の路を辿つて來た。先づ南滿・朝鮮・日本を含む東北亞細亜は、皆な海に面して漁撈の便あり、山地森林多くして狩猟にも適し、謂はゆる海幸山幸に恵まれ、之によつて安易に生活を営み得たので、農耕に適したる地域なるに拘らず、其の住民は比較的長く漁撈・狩猟を主とし、農業は原始的状態に置かれて居た。然るに春秋戦国時代に於ける支那民族の発展が、東北亞細亜の住民に大なる刺戟を与へ、彼等もまた支那に起れる農耕文化を受け容れて、次第に農民化して往つた。南滿及び北鮮に存在する豊富なる戦国時代の金属器具は、支那人が相当なる規模に於て此等の地方に植民せることを物語る。かくて平壤を中心とする朝鮮国が彼等によつて建てられた。その文化が南鮮を経て日本にも伝はつたことは言ふまでもない。但し日本には單り半島を経由してのみならず、海を渡つて中南支方面からも農耕文化が伝へられた。

次で漢及び三国時代に於ける支那民族の偉大なる発展が、一層此等の諸民族の覺醒並に発展の刺戟となつた。漢の植民地たる北鮮樂浪以下の四郡は、支那文化の東方根拠地となり、南鮮及び日本は大陸文化の洗礼を受けて經濟的・

社会的・文化的に長足の進歩を遂げた。北九州の土豪の如き、後漢より三国時代にかけて、頻繁に支那と通交して居た。

かかる間に日本に於ては、北部を除く国内の統一が、大和朝廷によつて成就せられ、茲に鮮明に日本民族の成立を見るに至つた。而して応神・仁徳天皇のころには、国力は劃期的に充実し、遂に対馬海峡を渡りて勢力を南鮮に伸べ漢代以来日本と同一文化圏を形成し来れる韓民族をも統一せんとするに至つた。応神・仁徳天皇の御陵が世界的大土木事業の一と謂はれるほど規模雄大なるを見ても、日本が此の時代に於て大国としての基礎を見事に築けることを知り得る。

満洲に於ては松花江中流域の沃野に住める満洲民族が、今の新京・農安を中心として初めて国家を建設した。即ち夫余国である。後漢のころ夫余が衰へてから、鴨緑江北に高勾麗国が起り、朝鮮平壤を都として遼東を領有し、満洲空前の大國となり、漢末より隋唐にかけて永く繁栄を誇つた。高勾麗が唐に亡ぼされてからは、今の寧古塔の南方に当る東京城を都として渤海国が興り、文化の発達に於て遠く高勾麗を凌ぎ、支那人をして『東海の盛國』とさへ呼ばしめた。

東北亞細亜の諸民族を覺醒したのが支那人なりしに対し、東南亞細亜の啓蒙者となりしは印度人であつた。夙くも二千年以前から、婆羅門教が商人や移住者と共に海路印度支那に伝來し、稍々後れて仏教もまたセーロン島から伝來した。此の印度文化はビルマ・イラワディ河谷・シャム・カムボディアに於て、特に大なる影響を住民の上に及ぼし、後漢の末期に先づ林邑・扶南両国の出現を見た。扶南国は、恐らく印度人の植民者が原住民と混血して形成したと思はれるカムボディア人によつて建てられ、初めはメークン河下流域に栄えて居たが、西紀第六世紀に至り、メークン河の中流バサック附近に都せる真臘国が之を併せて大国を建てた。此国は第八世紀に入りて陸真臘・水真臘の両

國に分れ、第八世紀中葉にスマトラの室利仏逝國（三仏齊國）の征服を受けて一時その支配下に立つたが、第九世紀初頭に至りて独立を回復し、爾來アンコール・ワットの莊麗なる建造物を残せる王朝が、トレン・サブ湖の北岸に榮え、その盛時に於て帝國の勢威は北は雲南に達し、西はメナム河流域を越えてマライ半島に及び、東はチャムパ及び安南を悩ましたが、第十三世紀にタイ族の侵寇が始まりてより國勢次第に衰微した。

林邑即ちチャムパは、チャム人が安南南部の狭長なる海岸平野に建設せる最初の國名である。彼等もまたカムボディア人と同じく、歴史に現れた最初より印度化して居り、公用語としてサンスクリットを使用し、婆羅門教及び仏教を信じ、種姓制度さへも行はれて居た。此国的位置は支那と印度洋とを結ぶ要衝に當つて居たので、シャムやジャワ・スマトラとの往来が盛んであり、貿易によつて富をなしたのみならず、海上に出没して海賊を営んで居た。彼等は北境に於ては支那の植民地を侵略し、第三世紀中葉には順化平野の南部にまで進出した。初めは茶喬に都したが、後に第八世紀中葉より南方パンデウランガに遷都し、環王國の名を以て知られ、第九世紀に再び茶喬に回り古城國と呼ばれたが、唐末に支那の羈絆を脱して独立せる安南の南侵に堪へ兼ね、第十世紀に南方平定（シンタイ）に遷都してより、國運次第に傾くに至つた。

さて此等の民族が印度文化の影響の下に發展せるに対し、東京平野より北安南に占拠せる安南人は夙くより支那文化の支配下に在つた。彼等は西紀第二世紀に漢のために征服せられ、幾度か独立を企てて成らず、唐末混亂の時に初めて其の目的を遂げたが、其後明朝に至りて一旦その郡県となつた。但し明の支配は永続せず、幾くもなく独立を回復した。支那との是くの如き關係は、当然安南を支那文化圈内に入らしめた。清朝が興るに及んで、安南國王は滿洲人に逐はれし支那人に、王国の南部に於ける土地を与へ、謂はゆる交趾支那の成立を見た。其他の沿海地帶や島々にも多数の支那人が移住して、増殖し且繁栄した。かくて安南は「色褪せた支那の模写」と呼ばれるほど、支那文化の

漫透を受けて居る。此処で学問と名付けられるものは総て支那より來り、その文章語は支那の言葉で貫かれて居ることは、恰もトルコの文章語がアラビア語であると同様であつた。

また今日のタイ国を建設せるタイ人は、太古より支那の南部に居住し、唐代には雲南に拠つて南詔国を建て、一時は國威盛大を極めたが、元朝のために征服せられてより続々南下し、ビルマ及びシャムに入った。そのシャムに入れることは、第十三世紀に至りてメナム河上流域にスコータイ国を建て、次で第十四世紀には同河下流域アユチャヤを都として勢を張り、スコータイ国を併せて現在のタイ国の始をなした。その盛時に於ては西境山脈を越えてイラワディ河流域に侵入し、同河上流域のビルマ人を四分五裂せしめ、下流人のタライン人をも臣附せしめた。

ビルマ人は西藏方面よりイラワディ河に沿ひて南下し来れる民族である。唐代に於て現在のビルマの中心地帯をなすイラワディ河流域に拠り、プロームを都として驃国を建てたビュ一人が、ビルマ人と同族なりや否やは未決の問題であるが、第十一世紀に至りて驃国が占拠せる地域に、最初のビルマ統一者と呼ばるべきパガン王朝が興り、北はパゴモより南はイラワディ河下流域のタライン人を従へ、東西辺境のタイ人の諸小国を征服した。此の王朝は第十三世紀後半に至りて元朝のために亡ぼされ、其国は四分五裂し、爾來二百數十年間タイ人がビルマに勢力を張つて居たが、第十六世紀中葉にトゥングラー王朝がタイ人を駆逐して統一國家を建てた。其後第十八世紀中葉に至り、此の王朝はタライン人のために亡ぼされたが、英雄アウラングパヤが直ちに起つて之を倒し、ビルマ最後の王朝を建てた。ビルマは此の王朝の下に一時国威大に揚がり、シャムに侵入し国都アユチャヤを陥れ、遂にバンコックに遷都させたほどであつたが、幾くもなくして衰退期に入り、三たびイギリスと戦つて敗れ、遂にその領土となるに至つた。

ビルマは印度と国境を接して居る關係から、上ビルマには夙くよりアッサムを経て流入せる北印度文化の影響を受けて居た。驃国及び其後に興れるパガン王朝は、初めは大乗仏教を信じ、サンスクリットを使用して居た。然るに、

パガン王朝に征服せられたる下ビルマのタライン人は、南印度及びセーロンより海路伝来せる南印度文化を攝取し、ビルマ人よりは高き文化段階に達して居たので、文化的には却つて其の征服者を感化し、文字はパーリー語、仏教は小乘教と代り、現在に至るビルマ文化の動向を決定した。支那とビルマとは古代より相当に深き交渉を有し、元・明・清三朝を通じて其の政治的圧力下に在つたが、文化的には大なる影響を与へて居ない。ビルマ文化の基調をなすものは明白に南方印度文化である。

さて印度文化の波はインドネシアの島々をも遍く洗ひ、諸島に居住せる原マライ諸族が、生活の一切の方面に於て深く且汎く其の影響を受けたことは、彼等の歌舞音楽、文学藝術、乃至信仰を通して容易に之を窺ひ得る。此の印度文化の刺戟により、スマトラにはパレムバンを中心として室利仏逝即ち三仏齊国が建てられ、唐宋時代に於ける南洋第一の大國として、スマトラ及びマライ半島に強大なる勢力を張り、遠く印度や印度支那にまで遠征を試みた。ジャワもまた古より南洋の大國であつたが、東ジャワに起れるマジャパヒット国の発展は最も目覺ましく、一時インドネシアの全域に君臨した。ボルブドゥル・ブラムバナン・メンドゥート等の婆羅門教並に仏教遺蹟の莊嚴雄大を見ても南洋に対する印度文化の影響の如何に大なりしかを知り得る。フイリッピン南部のマギンダナオ族の言葉に多数のサンスクリットを混じて居ることは夙く知られて居たが、余波は遠く北漸して台灣にまで及び、高砂族の植物名にさへサンスクリット系統のものがあると言はれて居る。

然るに第十四世紀初頭に至り、最初は主として印度人によつて、回教が此等の島々に伝へられた。即ちインダス河口の南に位し、航海者として知られたるグジャラート国人が、熱心なる回教信者となり、彼等によつて回教は先づスマトラに伝へられた。恰も此頃に、夙くより回教に帰依せるマラッカが、その形勝の位置のために、東西亞細亞貿易の盛大に伴ひ、南方に於ける最大の貿易中心地となり、諸国の商人が此処に集まつた。このマラッカの勃興が、イン

ドネシアに於ける回教の急速なる弘布を助けた。かくして第十七世紀初頭には、ジャワ・スマトラは最早殆ど完全に回教の国土となつて居た。

かくして亞細亞の湿润地帯は、支那文化圏・印度文化圏・印度支那混合文化圏として發展して來た。然るに近世に入りてより、此の農耕的東洋に、狩獵的西欧が進出して來た。而して其の旺盛なる戦闘的精神と、精確なる科学的知識と、精銳なる武器とを以て、容易に征服の歩みを大東亜圏内に進め、印度・印度支那・東印度諸島は、悉く彼等の植民地となり果てた。彼等は此等の地域に於て、その征服の主目的たる經濟的搾取を強行するために、勢ひ東亜諸民族の生活を歐羅巴的に改造する必要を見た。而も東亜諸民族の生活は、その道義、その理想、その信仰、その家族制度と不可分のものなるが故に、彼等の政治的支配は同時に亞細亞一切の文化財を破壊し去らざば已まざらんとした。若し東亜に日本なかりせば、歐羅巴は遂に地球全面を支配したであらう。

五 三国精神の客觀化としての大東亜秩序

亞細亞湿润地帯の農耕民族は、その經濟的・社会的・文化的方面に於て、幾多の共通点を有して居りながら、他面その居住する地域によつて著しく地方的色彩を濃厚にして居る。此事は遊牧民族や狩獵民族が、殆ど地域を超越して其の民族精神乃至文化が同様であるのと、甚だしき対照をなして居る。そは農耕民族が其の居住する土地と密接不可離の關係を有し、その景観的影響を蒙ること深刻甚大なるが故であり、其の文化が高度に發達すれば、それだけ其の色が顯著となる。これ支那や印度が、幾たびか異民族の侵略を受けながら、結局之を支那化又は印度化し去りて、甚だ特異なる支那文化及び印度文化を發達せしめたる所以である。

亞細亞文化の此の濃厚なる地方色と、亞細亞諸国の現前の分裂状態とに心奪はれ、その表面の千差万別にのみ囁く

して、日本の学者のうちには東洋又は東洋文化の存在を否定する者がある。即ち西洋に於ては一つの歴史が展開しつつの文化が発展し、従つて一つの世界が形成されて居るが、東洋に於ては決して此事がない。東洋には西洋史と同一意味の東洋史なく、在るものは東洋諸民族の生活史たる支那史・日本史等だけであり、従つて東洋的と呼ばるべき世界又は文化はないと主張する。かくて亞細亜は一つといふ提唱は公式主義などと呼ばれて、常に其の『単純素朴』を晒はれていた。彼等は言ふ、亞細亜は政治的事情も多、産業様相も多、文化形態も多、亞細亜は決して一ではなく、むしろ余りに一でなさすぎると。

併し乍ら亞細亜の一如を唱へる何人も、未だ曾て表面に現はれたる亞細亜の複雑多様を否定した者がない。現実の亞細亜の多様性は、彼等によつて指示されるまでもなく、耳にて聞き耳にて見得る事実であり、此事を殊更に強調すること寧ろ不可解の心理である。亞細亜の差別は何人も之を認める。唯だ其の差別の奥に潜む『亞細亜的なるもの』の有無を尋ね求むる時、初めて異論が生ずるだけである。それ故に多を多として感覚し、その千差万別を力説して、敢て一層深き認識に到達せんと努めざる態度こそ、却つて『単純素朴』と呼ばるべきものである。

若し差別と対立とにのみ目を注ぐならば、西洋に於てもロシア的なもの、ドイツ的なもの、フランス的なもの、イギリス的なものとの間には、差別特殊の相のみ多くして、殆ど共通なるものを認め難い。それにも拘らず彼等はギリシアの思想と、ローマの法律と、基督教の信仰とを、多少の程度に於て其の民族精神に摂取せるが故に、欧羅巴的と呼ばれて居る。而も近世に入りてより、欧羅巴の最も強力なる紐帶たりし羅馬法王の全歐羅巴的支配が宗教改革によつて崩壊し、更に共通の宗教たる基督教の信仰そのものが年と共に冷却しそり、諸国は専ら自己の国民性の強化に努め來りしが故に、今日に於ては最早中世紀的意味に於ける西洋は存在せず、在るものは唯だ個々の民族国家だけであるとも言ひ得る。詩人ノヴーリスは、分裂乖離の欧羅巴を眺めながら深き悲しみを以て是く言つた——『曾

ては欧羅巴が一つの統一ある国土を形成し、一つの基督教界が此の人間的に形成された大陸に住んで居た輝しい時代があり、一つの偉大なる関心が、此の広大なる宗教的国土の遠隔なる地方を結合して居た。』

東洋に於ては、支那及び印度の思想・文化の交流によつて、夙くも唐代に東洋文化の成立を見、次で宋代に入りて程朱の理学が生れ、恰も羅馬法王が中世欧羅巴の精神界に君臨せる如く、宋學が印度を除く東亜全域の精神界を支配した。蓋し宋學は、華嚴・禪・孔子・老子の諸教説が、宋儒の精神を培塗として混融せられたる偉大なる思想体系であり、其故にこそ徧く東亜の指導原理たり得たのである。吾国に於ても鎌倉幕府以来程朱の教學が精神界を支配した。日本が宋學の支配を脱却し始めたのは伊藤仁斎・荻生徂徠等が原始儒教への復帰を高誦してからのことである。

近世に入りて亜細亜諸國の大半が西歐の植民地又は半植民地たるに及んで、東洋の文化は蹂躪せられ、歴史は無視せられ、諸国は故意に分裂対立の状態に置かれた。この分裂は必然亜細亜諸国の相互の理解と認識とを妨げた。各國は唯だ自国のことのみを念頭に置きて、また他国を顧みんとしなかつた。亜細亜諸国の知識層は、新鮮なる情熱を以て欧米を知らんとしたが、亜細亜の国々に対しては殆ど関心を有たなくなつた。彼等は欧羅巴の凡ゆる言葉を学んだが自國語以外の唯一の東洋の言葉を学ばんとなかつた。

もとより亜細亜は隣邦のことに就て全然無知識であつたのではない。唯だ其の知識は殆ど總て欧米人の著書を通して得たるものであつた。然るに欧米が正しく東洋を理解することは、仮令誠実に努力しても尚且至難の業である。如何に況んや多かれ少なかれ宣教師の偏見や、外交官の謀略や、文學者の輕率なる想像などが加味されるとすれば、彼等によつて描かれたる亜細亜の姿は、甚だしく歪曲されたものとならざるを得ない。而して不幸にも是くの如き著書が、亜細亜諸国の相互の認識のための殆ど唯一の媒介であつた。欧米は亜細亜を蔑視する。それ故に彼等の著書を読む者は、亜細亜に如何なる善きものもないと思ふに至つた。欧米は亜細亜の覺醒を欲しない。それ故に健全なる古代

への思慕を妨げ、国民的英雄への追憶を妨げる。歐米は亞細亞の統一結合を恐れる。それ故に亞細亞共同の文化と理想とを想起することを妨げる。かくて彼等の著書を読む亞細亞は、互に敵視し、また互に他を悔る。此の分裂し敵視する亞細亞の現実に圧倒されて、東洋否定論者は亞細亞の一如を否認する。而も是くの如き分裂状態そのものが、実際に歐米によつて創り出されたものでないか。

この屈辱と分裂と悲惨と無感覚の亞細亞を、長夜の眠からぬび覺ましたが、實に日露戦争に於ける日本の勝利である。亞細亞を蔽へる暗黒の夜は此時から漸く明けそめて、希望の曙光が東方から射しかけた。而して歐羅巴の羈絆を脱して自主独立の民たらんとする政治的覺醒が、西はトルコより東は安南に至る諸民族の間に一斉に起つた。この覺醒はやがて革命的情熱となり、独立運動の波濤は次第に其勢ひを加へ、遂に全亞細亞に澎湃たるに至つた。誰か亞細亞に同一性なしと言ふか。全亞細亞はいま一面には歐羅巴の支配を覆し、他面には自己の腐敗せる社会的伝統を倒して、独立國家建設のために高貴なる血を灑ぎつつある。何はさて置き亞細亞は先づ共同の政治的運命の下に立つ。

政治的運命の共同が、亞細亞の諸民族を結ぶ強き絆たるべきことは言ふまでもない。其上に亞細亞は、表面の千差万別に拘らず、其の世界觀に於て、即ち如何に世界と人生とを觀るか、如何に之を理解し解釈するか、之に応じて如何に生活を形成するかに就て、明かに根本的一致を有する。

さて歐羅巴が古より『東方 Orient』と呼び来れるものは、吾等の謂はゆる東洋でない。吾等の東洋即ち大東亜圏はパミール高原以東の亞細亞東半を意味するのであるが、彼等の『東方』はパミール高原以西の亞細亞西半にエジプトを含めたる地区を意味する。此の地区は、西紀第七世紀このかた逐次回教文化の支配下に置かれ、その文化は更にヘレネ文化の深刻なる影響を受けて居る。而してヘレネ文化を共通の基礎地盤とすることによつて、その文化世界は歐羅巴の文化世界と一脈の聯繫を有して居る。従つて此の文化圏の固有の生活感情及び之に相応する人生觀並に生活

様式は、決して東洋即ち大東亜圏内のそれと同一でない。それにも拘らず両者は、その本質的特徴に於て著しき類似を有し、亞細亜の両文化群は、共通の特色によつて之を欧羅巴文化から区別することが出来る。

まづ欧羅巴精神と東洋精神との最も顯著なる対照的特徴として常に指摘されるのは、前者が主我的であり、後者が没我的であることである。即ち前者に於ては、個人の人格価値が優位を占め、後者に於ては超個人的共同体が優位を与へられることである。欧羅巴に於ては、個人の力、その凡ゆる性質の開展が教育の目的であり、その社会的及び政治的目的を支配して居る。社会は個人の補角であり、個人の力、その凡ゆる性質の開展が教育の目的であり、その社会的及び政治的目的を支配して居る。社会は個人の補角であり、個人は個人が完全に發展し得る条件を具るべきものとされる。個々の人間が、自己の生活に就て自ら決断し、自主的に自己の道を進むための人格的判断力及び人格的責任感を有つに至ることが、欧羅巴の追求する性格形成の最高目標である。然るに東洋に於ては、個人は彼を團結する社会のうちに没入し、個人の利害は家族・血族・國家といふ超個人的秩序の中に織込まれて居る。此處では人間の単位が個人に非ずして家族であり、国家は家族の拡大とせられ、家族の正しき秩序が眞実なる国家制度の前提となつて居る。かくして欧羅巴の社会が個人的契約によつて成れるに対し、東洋の社会は家族的團結によつて成る。

東洋の超個人的秩序は、宇宙全体を一貫するものとされる。東洋に於ては万物の宇宙的秩序と人間の社会的秩序との間に如何なる分裂をも認めない。東洋は天・地・人即ち神と自然と人生とを、直觀的・体験的に生命の統一体として把握して來たので、西洋に於ける如く、宗教と政治と道德との分化を見なかつた。支那の『道』、印度の『ダルマ』、乃至回教の『シャル』は、皆な人生を宗教・道德・政治の三方面に分化せしめず、飽くまでも之を渾然たる一体として把握し、此等の三者を俱有する人生全体の規範とされて來た。此点に於て神と人とを峻別し、自然を無生命のものとなし、存在論に哲学の主力を集注する西洋の主潮と、著しき対照を示して居る。

宇宙を生命の統一体とする東洋精神は、本體と現象、過去と現在、此岸と彼岸とを相即する。神的なるものと人間

的なるもの、個人の生命と宇宙の生命との間には、対立又は差異がない。此の態度は欧羅巴人には常に非論理的又は不合理的と思はれて居るが、それは東洋の一元論的・汎神論的世界觀より流れ出る生命感情の発露である。そは西洋の分別的・特殊化的なる思惟と明かなる対照をなすものである。典型的なる欧羅巴精神は、抽象し、區別し、分離し分析し、その注意を個々のもの及び異なるものに向け、然る後に個別的研究の結果を分類し、之を論理的体系に綜合する。東洋は宇宙に於ける対立と差異とを認めながら、一切の存在は其の至奥の根源に於て相結んで居り、且一切を支配する力によつて生命を与へられて居る統一体として觀察し、之を合理化的方法によらず、経験によつて内的に把握せんとする。彼は宇宙に於ける諸力の対立や矛盾に力点を置き、個別の具体相を深く掘り下げるに対し、これは諸力の均衡と調和を尊重する。

音楽でも絵画でも、之を存分に鑑賞するためには素養を必要とする。聴く耳を有たぬものには、微妙なる音楽も蛙鳴蟬噪と詰ばぬであらう。それ故に宇宙の統一を体得するためには修行を必要とする。東洋の謂はゆる學問は、専ら修行のためであつた。知識は実踐の道具であり、理論と実踐との遊離を許さない。かくて倫理的なものが合理的なるものに対して常に優位を与へられる。東洋はひたすら其眼を内部に向ける。西洋は主として其眼を客觀の世界に向け、自己の外部即ち周囲の世界を理解して、之を自己に服従せしめようとするに対し、東洋は自己の内部を吟味し、世界を自己の内に把へ、自己を世界の一部として感じ且知らうとする。東洋の運命論は此の一體觀から来る。東洋人は一切の外部よりの打撃に対し、西洋人が理解し得ざる平靜と沈着とを以て忍従する。

東洋の文化——その學術・文学・美術、その政治・道徳・經濟は、總て上述の如き精神に深く其根を下ろして居る。而して東洋は、西洋が未だ歴史に現れぬ以前に於て、夙くも一應完成せる文化構成体を築き上げて居た。それ故に東洋は、其の生活形態を以て一切の自余の文化に優越せるものと考へ、古来よりの伝統を護持するに努め、欧羅巴

に於て見る如き進歩に対する欲求を感じなかつた。歐羅巴文化は絶間なく新しき形式を求める不安なる青年の相を宿して居り、新しきものを以て旧きものを克服せんとする改造の衝動から生れて居る。然るに東洋は、既に実現せられたる昔乍らの文化に最高価値を有へ、古の黃金時代に咲揃へる美しき花を、危険又は低級と考へられる他の文化的影響によつて凋落させまいと苦心して來た。歐羅巴の進歩主義に対して、東洋は紛ふべくもなく保守主義・尚古主義である。

此の東洋の保守主義は、東洋人をして祖先の精神、祖先の信仰、祖先の遺風を、昔ながらに護持し、また之を後昆に伝へることを、最も神聖なる義務と考へさせて居る。そのために東洋は、過去に於ける真個の価値あるものを護持し、文化の中絶せざる伝統を継承することが出来た。同時に此の保守的精神は、民族の進路に無用に歸したる過去の塵埃を堆積し、その自由なる発展を阻む。曾ては価値ありしも今は無意義となれるもの、本来の精神を失ひ尽せる無用の形式が、尚ほ神聖なるものとして頑守せられ、之がために民族的生命の潰刺たる流れを遮り、其水をして死水たらしめる。若し適宜に之を排瀉し開放するに非ずば、社会は必ず病に罹らざるを得ない。是くの如き保守主義が、東洋の社会的停滞を招き、その衰頽の一因となつた。

さて東洋は、既に述べたる如く、近代歐羅巴のために、その大半が奴隸化せられ、その文化は蹂躪せられ、その精神は少なからず腐敗し、古代の新鮮と健全とを失ひ去つた。但し其事のために東洋精神そのものを否認することは断じて許されない。東洋伝統の精神は、その本質に於て極めて高貴なるものを有する。亞細亞復興は單に歐羅巴よりの政治的独立を意味するものでない。それは同時に亞細亞諸民族の精神生活に古代の光榮を復活せしめることである。而して日本は實に此の莊嚴なる使命のために戦つて居る。何となれば東洋の善きもの、貴きものが、よし其の故国に於ては單に過去の偉大なる影となりはてて居るとしても、日本に於ては現に激刺たる生命を以て躍動して居るからであ

る。

更めて言ふまでもなく、日本は早くより多くのものを支那及び印度から学んで居る。吾等の現在の精神は、支那及び印度の思想・文化を遺憾なく吸收しつつ長養せられたるものであり、東洋の偉大なる中心たりし此の両国の思想・文化は、拒むべくもなき事実として吾等の魂に攝取統一されて居る。吾等は千年に亘る生活経験によつて、現に支那及び印度を吾等の生命に攝取せるものなるが故に、日本精神は東洋精神として初めて正しく理解することが出来る。それ故に東洋又は東洋文化の存在を否定する者は、亞細亞の最も激刺たる本質を、自己の内部に発見し且把握し得たる自己否定論者である。

加ふるに日本は、既に述べたる如く東洋全体を『三国』と呼び、不斷に之を意識して活動して來た。花嫁をほめては『三國一の花嫁』と言ひ、富士山を誇りては『三國一の富士山』と言ふのは、日本国民の日常生活が、三国意識即ち東洋意識の上に築かれて居ることを示すものである。支那は殆ど日本を眼中に置かず、印度は恐らく日本の存在をも知らなかつたのに、唯だ吾が日本のみが自己の裏に支那と印度とを攝取し、明白に『三国』を意識して居たことはやがて日本が亞細亞に対して偉大なる使命と責任とを負荷すべき日の來ることを示唆するものである。而して其日は遂に來た。いま將に實現せられんとする東亜新秩序の精神的基礎たるべきものは、日本が千年に亘る生活体験によつて鍊成せる三國魂である。三國魂の客觀化又は具体化こそ、取りも直さず大東亜共榮圏である。

亞細亞・歐羅巴・日本

一 特 誌

Oh, East is East, and West is West, and never the twain shall meet,
Till Earth and Sky stands presently at God's great judgment seat.

東は東、西は西

天地今の如く在る限り

偉大なる神の審判の日までは

此の双生児は断じて合はず。

大東亜秩序建設

英國詩人キプリングは、その名高い『東西の謡 The Ballad of East and West』において、包み隠すところなきアングロ・サキソン精神を以て是く歌ふ。此の双生児——東洋と西洋とは、果してキプリングの歌くる如く、永遠に相争はねばならぬものなるが右から、吾等の進歩の進むにつれ、口の訛がになるであらう。況にも角に、東洋の名によつて総称せられる諸民族と、西洋の名によつて包括せらるる諸民族とが、その複雑多端を極める内容を以て、世界史に現れたる最大至高の大抗個体なるゝむが、つらむ思ふべからず。

今日の歐羅巴民族、わけてもアングロ・サキソン民族は、満腔これ人種的差別の觀念に充ち。曾てローズベリ卿がグラスゴー大学に講演して、神は世界支配の神聖なる権利を吾等に与へたと標榜せりとな半諷諷取の語草である。

而も是くの如き自負矜高は、ひとりローズベリ卿のみのことではない。彼らのうちには『歐米以外の天地は、竟に造化の汚点であり、その國土は吾等の掠奪の対象である』と公言したる者さへある。歐米以外の世界の事物は、要するに白人の利益のために造られて居るといふのが、實に彼等一般を支配する思想であつた。最近半世紀の間に、彼等の非白人に対する態度は、次第に改まつて來たけれど、其の以前に於ける彼等の圧制輕侮は、唯だ言語道断といふ外なかつた。彼等は考へ且戻んだー『白人以外には、道徳も信仰もない。その宗教は迷信であり、その道徳は却つて罪悪であり、その風俗習慣は一の愚昧事である』と。予は下の一話を或る老宗教家から聽いた。明治二十年代に宣教師として來朝せる温厚篤実の一米国学者、後に『東洋精神 The Spirit of the Orient』を公けにせるG・W・ノックスは、該宗教家に向つて『日本には good 又は bad の観念を表現する言葉あるか』と質問したとのことである。そは『日本人に道徳意識ありや』といふに等しき驚くべき質問である。無智妄斷もまた甚しいと共に、是くの如き無智を以てして、日本を精神的に救済せんとするに至つては、ただ乱暴狼藉といふ外はない。

白人をして此の沙汰の限りなる増上慢に陥らしめたのは、言ふまでもなく第十六世紀このかた、第二十世紀初頭に至るまで、彼等は常勝不敗の歩みを以て、あらゆる異人種の征服を続け、僅に日本及び支那を除く地球の全面を、直接又は間接に、その支配下に置くに至りし故である。其故を以て彼等は、恰も白人が、人類の歴史ありて以来、常に世界の主人公なりしかの如き自負を抱く。さり作ら歴史の明白に示すところは、東西両洋の勢力が、互に盛衰消長を繰返して今日に及び、曾て歐羅巴は東方の光明に其蒙を啓かれ、亞細亞の威力の前に潛伏して居たといふことである。今日の如き形勢は、僅に三百年このかたのこと過ぎぬ。

万物は皆な、而して常に、戰ふ。シュタインメッツが、人類は碧血の槽内で育つて來たと言つたのは、物凄き言葉

ではあるけれど、竟に拒み難き事実である。遠くホメロスの古より、平和論の絶えたることなきに拘らず、世界史は戦争の記録であると言ひ得るほど、人類は常に戦ひ続けて今日に及んだ。支那人は恐らく世界に比類なからべき平和の民である。彼等が武を卑しみ戦を厭ふ心は、『好人は兵に当らず、好鉄は釘を打たず』といふ諺にも、歴然として現れて居る。その支那人でさへ、國（國）の字を制作する時には、戈即ち武器、口即ち人民、一即ち土地を以てせねばならなかつた。而して支那の歴史も、また他国のそれに劣らず、戦争を以て終始した。東西一切の国家、将来はいざ知らず、少なくも今日までは、戦争によつて興らざるはなく、また戦争によつて亡びたりしも無い。而して一切の戦争のうち、規模最も雄渾に、意義最も深遠なりしは、世界史に於ける二個の最大至高なる対抗個体——東洋と西洋、亞細亞と歐羅巴との間に繰返されたる戦争に外ならぬ。

『神は人を攻むる者を悪むが故に、一切の敵対を止めよ』と教へるアラーは、同時に『眞実の宗教の確立せらるるまで汝等の敵と戦へ』と教へて居る。戦争は之を抽象的に考ふれば、疑ひもなく神の惡み給ふ禍厄である。而も一たび戦争の意義を世界史的に検討し來れば、決して単純に一個の禍厄として論じ去るべきものでない。例へば虚言の甚だ卑しむべき惡なることは、万人の罷免なきところである。さり乍ら医師が瀕死の患者を慰めるための虚言は、当然許さるべきことであり、時としては義務でさへもある。そは道徳的規範に背けるに非ず、却つて非常の場合に道徳的規範を実現する具体的方法となる。且つ如き實例は、枚挙に遑なきほど夥しい。而して戦争もまた實に其の一である。そは好ましからぬものには相違ないが、而も神これを命じ給ふところのものである。神これを命じ給ふは、数々の意義を有するからでなければならぬ。而してその最も顕著にして且重大なる意義は、戦争が人類の道義的統一のために、換言すれば從前より一層広き範圍に於ける平和実現のために、何人も拒み難き貢献をなし来れることである。

ホーリー・スクリプトゥーズは、人類原始の状態を推測して、万人が万人に対する戦 Bellum omnium contra omnes とした。さり乍

ら個々の人間が尽く敵対関係に在つたといふことは、少くとも『人間』の生活に於て考へられるべくもない。当初より『人間』は、血縁によつて結ばれたる家族的生活を営み、その家族内部に於ては相互扶助を原則とした。本質に於て全く家族と同じく、唯だ其の拡大に外ならざる氏族生活に於ても、氏族の成員は徹底せる一致協力の生活を営んだ。ただ氏族と氏族との間には、不斷に族闘が行はれて居たから、言葉を強めて言へば、總ての氏族が互に敵対関係に在つたと言ひ得るであらう。而も頻繁なる族闘の後に、或は弱小氏族が強大氏族に併合せられ、或は対等なる立脚地の上に若干氏族の聯合が行はれた。契約又は後に法律となれる捷が、戦争によつて生れたる、新しく大なる共同生活体の平和の保障として、締結若しくは確立された。是くの如き氏族の結合が、取りも直さず国家の母胎である。

記録を有する時代に於て、人類の多数は既に國家を組織して居た。人類文化の発達は、幾多勢力の複雑なる協同一致を必須の条件とする。而も是くの如き協力は、不斷の族闘を事とする氏族生活に於ては、到底不可能のことであり国家に於て初めて可能となる。蓋し氏族対立の時代に於ては、戦ふに堪へる一切の男子は、終生軍人でなければならなかつた。然るに国家成立以後に於ては、軍人は一個の階級又は職業となり、然らずば国民の一時的義務となつた。従つて国民は戦争以外の仕事に、秩序的且永続的に従ひ得るやうになつた。国家の成立に伴へる此の『戦争の組織化』は、實に平和確立の礎、従つて文化発達の礎となつた。加ふるに戦争の規模、次第に大となりしに拘らず、軍人の数は却つて国民の一部分を以て事足るに至つた。換言すれば、歴史の進むに従つて、僅少なる武力が大なる平和を齎すこととなつた。例へばトロヤ戦争に於ては、ギリシア国民の殆ど全部が、十年の長年月に亘つて戦闘に従つたがその得たるところは言ふに足らぬものであつた。然るにアレキサンドルは、僅に一万三千の軍を以て、三年間の戦争の後、東西両洋に亘るヘレネの世界を建設すべき礎を、見事に築き上げた。ローマ帝国の大を以てして、その『平和 Pax』を維持するために、四十万の常備軍を以て足れりとした。

ローマ人の最も崇拜せるヤヌスは、両面の神である。その一面は平和を象徴し、他の一面は戦争を象徴する。人類の歴史は、実にヤヌスの頭である。戦争と平和とは、離るべからざるものとして今日に及んだ。而して世界的に於ける一切の戦争は、驚くべき組織と統一とを以て、實に『平天下』の目的に貢献して來た。いま其の経路を仔細に追れば、世界史の二個の文化単位——亜細亜と欧羅巴とが、一面それぞれの内部に於ける幾多の戦争によつて、それぞれ亜細亜的並に欧羅巴的なるものが鮮明に發揮せられ、他面両者の対立争闘によつて、新しき文化が生れしことを知り得る。吾等は節を逐うて先づ東西対抗の歴史を明かにするであらう。

一 亜細亜と希臘

世界史に於ける東西勢力最初の衝突は、ペルシアとギリシアのそれである。もとより其の以前、既にフェニキアとギリシアとの間に角逐が行はれた。フェニキアは、人種より言へば恐らくセム民族に屬し、国を西亜細亜の一角、地中海のほとりに建て、戦いも強く利にも聰く、レバノン山の杉を伐りて巨船を造り、美しく之を飾りて地中海を乗廻し、沿海各地に植民地を建設して、西紀前第十世紀ころより國運頓に隆盛に起いた。而して此のフェニキアの西漸が勢ひ新興ギリシアの東漸と衝突し、遂に両者の角逐を見た。

さり乍らフェニキアは決して純粋なる亜細亜的國家に非ず、また其の文化は亜細亜的特色を具へたるものでなかつた。而して他方ギリシアも、尚未だ其の文化の本質を鮮明に發揮するには至らなかつた。故に此の衝突は、明白なる亜細亜と欧羅巴との争闘と見らるべきもない。さり乍ら此の角逐も、フェニキアが自國文明並にエジプト・バビロニアの古文明をギリシアに伝へ、その影響と刺戟とによつて、強国ギリシアを出現せしめたることに於て、疑ひもなく世界史的意義を有して居る。殊にエジプト文字に基いてフェニキア人が創出せる二十二個の表音文字——人類の一切

の創造のうち、最も便利にして有益なるアルファベットが、先づギリシアに伝へられ、次で全歐諸国に採用せられる如き、その影響の最も顕著なるものである。

さてギリシアはフェニキアとの角逐の間に、而して實に此の角逐のために目覚ましき發達を遂げることを得た。かくて西紀前第七・第六世紀に於て、後に歐羅巴文明の不朽の礎となれる濃刺豊富なるギリシア精神の種々相が、或は既に見事なる文化の花と咲揚ひ、或は少くともやがて開くべき蕾を結ぶに至つた。然るに之と時を同じくして、東方イランの地に建国せるペルシアが、悉くインド以西の古亜細亜文明諸國を統一して、一個莊嚴なる帝國となつた。

日本人は、今日のペルシアのことさへも、多く知らうとしない。古代ペルシアのことなどは、尙更念頭に置いていない。さり乍ら古のペルシア人は、實に吾等の祖先に酷似せる民であつた。彼等は、光明の神ミトラを拝したる統一・快闊・勇敢の民であつた。吾等はジョセフ・エドキンが唱ふる如く、日本のアマテラス大御神が、果してペルシアの光明神ミトラスなるか否かを知らない。唯だ吾等は、正直にして武を尚び、潔白にして礼儀を重んじ、美麗を好み婦人を愛重し、聰明なれど情には暗く、その最も重んじたる節義は、君主への忠義なりし諸点に於て、古代ペルシア人が吾等日本人と、否な、寧ろ吾等の祖先と、相似たることの甚だしきに驚くだけである。トロドトゥスの言によれば、ペルシア人の教育とは『弓を射ること、馬に騎ること、正直に物言ふこと』であつた。その心榮え正しく、弓矢の道にいそしむことが、實に直ちに中世關東武士の教育でなかつたか。八幡太郎義家・源九郎義経・畠山重忠は、正しく是くの如き教育を受けたる益良雄でなかつたか。

彼等ペルシア人は、その不俱戴天の敵たるギリシア人すら、尚且獎賞を惜しまざりし英明なる君主の下に、雄渾なる國家を組織し、その亞細亞的なる、従つてギリシア的とは截然として異なる一切の力を挙げて、暮地に戦をギリシアに挑んだ。西紀前五〇〇年より四九九年に亘る此のペルシア戦争こそ、實に最初の東西戦——亞細亞と歐羅巴と

の最初の衝突と見るべきである。

ペルシアとギリシアとは、それぞれ亞細亞的並に歐羅巴的なる性質を、此時既に明かに發揮して居た。フリーマン曰く『歐羅巴の政治史にして、その先例をギリシア史に求め得ざるものなく、またギリシア史にして、其の実例を歐羅巴史に求め得ざるものない』と。吾等は思ふ、ペルシア史と亞細亞史との関係、また實に同様であると。サイラス・カムビセス・ダリウス・ザーケセス諸帝のペルシア史は、紛れもなく亞細亞史そのものの縮図である。信仰を重んじ、伝統を重んじ、統一を重んじ、而して保守を重んずる精神、之と相対して理性を重んじ、独創を重んじ、自由を慕ひ而して進歩を尚ぶ精神が、既に歷然としてそれぞれペルシア及びギリシアの当時の歴史に現れて居る。かくて此等両国の対陣のうちに、吾等は明白なる東西の対抗を認めざるを得ない。

此の最初の東西戦に於て、ペルシアは常に攻勢に出た。わけても西紀前四八〇年、ザーケセスの大軍、海陸並び進んでギリシアに侵入せんとするや、ギリシア諸国の靈験は目も当てられぬ有様であり、デルフィ神殿の巫子が、アテネ市民の祈願に対して与へたる神託は、實に下の如き頼りなきものであつた——『世界の果まで逃げよ！ 唯だ木の城のみを頼りとせよ』と。かくてテルモビレの嶮険くも破れ、中央ギリシアはペルシア軍の蹂躪するところとなり、民族の運命、間一髪の危きに瀕したる時、テミストクレスの果斷智謀、能くサラミス湾頭の海戦にペルシア軍を擊退したので、ギリシアは辛うじて東方帝国の領土たることを免れた。

ペルシア戦争は、ギリシアの国民的覺醒を促した。五十年に亘る鍛錬と苦戦とは、全ギリシアの燐然たる国民的文明を大成する所以となつた。自由と調和と完全とを精神とし、その思想、その文学、その藝術に於て、比類なく此の精神を實現したるギリシア文明——後來のローマ文明及びヘブライ文明と共に、歐羅巴文明の鼎を支へる永遠の足となれるギリシア文明は、實にペルシアと相争へる興亡死活の時に成満せられたるものである。

然るにギリシア本部は、その莊麗なる文化の頂点に達すると共に、あわただしく衰頽の途を下つた。その民主政治は衆愚政治となり、第二流の小人等が共同生活を左右する勢力となるに従ひ、第一等の人物は次第に公共生活から退いて了つた。而して其の主知主義も、また空しく論理の遊戯となり果て、知識を商品とする曲学阿世の学者が、専ら世に時めくやうになつた。彼等は最早自己の力を以て秩序と平和とを保つに堪へず、終に百年の宿敵たるペルシアの力を藉りて、辛うじて外国的統一を維持する状態となつた。

恰も此時に当り、剛健なる北方マケドニアの覇アレキサンドルが、ギリシア精神の綜合者アリストテレスに師事して、其魂をギリシア主義に鍛へ、一舉廢類のギリシアを征服し、而も満腔のギリシア精神を以て万里東征の途に上つた。アレキサンドルの生涯は短くある。その治世は十有三年に過ぎなかつた。が、其の功業は偉大である。その世界史に及ぼせる影響は、深刻にして長久である。彼の遠征軍は、常勝の歩武を進めて長駆インダス河の流域に達した。而も其の征戦の門出に於て、徹底してギリシア的なりしアレキサンドルの魂は、此の東征の間に、其の征服せる東方諸国精神の泉に汲み、征途半ばにして、夙くも東西を融合渾一せるものとなつていた。曾ては分立割拠の間に各自の自由を護持し来れるギリシアの政治主義、而して此の主義の上に立てる都市国家の思想は、最早其の跡形をも残さず、一切の人類・一切の国土を包容する世界国家の理想が、アレキサンドルの魂に孕まれた。

彼は美しきペルシアの貴女を王妃とした。身にはメティアの衣裳を着けた。ペルシア朝廷の儀礼を採用した。東方諸国の宗教を保護した。部下の将士に東方美人との結婚を奨めた。長跪匍匐の礼をマケドニア人・ギリシア人にも求めた。亜細亞人を歓待して之を高官に任じ、被征服者たるの恩を抱かしめまいとした。彼の早世は、其の功業の有終の美を收めさせなかつたけれど、而も所謂ヘレネ時代を生み、ヘレネ世界を創造したものは、實に彼の世界的精神に外ならなかつた。そはヘレネの名を以て呼ぶるに拘らず、その本質に於て世界的であつた。實に彼の出現に

よつて、欧亜の交通、従つてその文化の融合が促進せられ、かくして東方の智慧が欧羅巴に伝へられたと同時に、また偉大なるギリシア的影響を亜細亜諸国に与へた。わけても其の美術は、印度より中亜、中亜より支那を経て、わが奈良時代藝術にまで、遙に其の感化の跡を残して居る。

アレキサンドルによつて出現を促されたる世界文明、一層精確に言へばギリシア文明を根柢とする世界文明は、それぞれアレキサンドルの後継者を以て任じたるセロイコス及びブトレミ両家が、シリア及びエジプトに建てたる国家の首府——最早ギリシア的なる小民主国に非ず、東洋的な大君主國の首府として、人口は恐らく百万を越えたるべきアンティオキア及びアレキサンドリアの両都に於て最も見事なる花を咲かせて居る。わけても繚乱たるアレキサンドリアの文化を見よ。當時知られたる東西文化一切の資料を蒐集整理したる陳列所並に文庫は、實に世界に於ける博物館並に図書館の始祖であり且永く其の模範であつた。而して當時の一切の知識が、此都に蒐集せられ且整頓された。幾何学の祖ユークリッド、三角術の始祖ピッパルコス、さては物理学に於けるアルキメデスの法則を以て名高きアルキメデス、一切智と呼ばれし博識の学者エラトステネス、皆是れアレキサンドリアの学徒であつた。

恰も此頃印度には阿育王の出世あり、西方諸国に仏法弘布のため、教師をエジプトのブトレミ一世、シリアのアントニオコス一世、キレネのマーガス、エビルスのアレキサンドル諸帝王に派するあり、茲に深奥なる印度思想が直接西洋に伝へられた。アレキサンドリアに生れたるネオ・プラトン派の哲学が、大乗佛教の思想信仰に影響せられしきリシア哲学であることは、恐らく拒み難き事実である。

三 カルタゴと羅馬

アレキサンドルの東征に次ぐ東西の衝突は、カルタゴとローマとの戦である。カルタゴは『新しき都』を意味し、

西紀前八五〇年ごろ、北アフリカの一角、テュニス湾の奥なる形勝の地に、フェニキア人によつて建てられたる一植民地が、次第に発達して強大なる国家となれるものである。そは西紀前第六世紀に於て、北アフリカの奥地に領土を有する富み栄えたる大都となり、地中海に散在せるギリシア人の植民地と角逐して、益々發展の勢を示して居た。恰も其頃フェニキアの本土は、名高きバビロンの大王ネブカドネザルの蹂躪する所となり、市民の富は皆な王侯の如しと羨まれたるチル市も、また大王のために破壊された。かくてシシリイ島及びスペインに建設せられしフェニキアの諸植民地は、皆なカルタゴを仰いで宗主となし、爾來地中海西半の霸權は、自らカルタゴの手に歸した。

カルタゴ人は、地中海の制覇を確実にし、その商業上の利益を独占するため、シシリイ・コルシカ・サルディニア等の諸大島を征服すべく、屢々外征を起した。この必要のために、カルタゴの海軍は強大にして精銳なるものとなつた。まことに当時のカルタゴ人は、聰明にして企業的精神に富み、兼て戦にも強かつた。彼等は一方武力によつて国威の伸張を図ると共に、他方新地を発見して領土を拡めんと努めた。かくして其の国運は、西紀前四百年代に於て隆盛の極に達した。カルタゴが植民地建設の目的を以て、名高き二大遠征を試みたのも、西紀前四七〇年ごろのことである。即ち彼等は、植民地及び貿易場建設の目的を以て、一はハンノの指揮の下にアフリカ西岸に向ひ、他はヒミルコの指揮の下にヨーロッパ西岸に向ひ、大規模なる探検艦隊を派遣した。ハンノは遠征の目的を遂げてカルタゴに帰航したる後、その航海の始末を簡潔に銅板及び大理石に刻み、之をクロノス神殿に奉納したが、そのギリシア語訳は幸に今日に伝はつて居る。之によればハンノは、植民の目的を有する男女三万人を巨船六十隻に分乗せしめ、アフリカの西岸に沿ひて南下し、今のシエラレオンの南方シカーポロサウンド岬まで到達し、沿岸六個所に植民地を設けて帰航して居る。而してヒミルコも、イベリア半島の西岸を探検して、今日のスペインの西北端フイニステル岬に達し且海潮に流されてアゾーレス群島に到達したやうに思はれる。此等の事実は、カルタゴ当年の意氣、如何に軒昂なり

しかを物語る。

かくてカルタゴは、夙く西紀前五五〇年頃より、先づ地中海に於けるギリシア勢力と衝突した。わけてもシシリーア島の争奪戦は、約百年の長きに亘り、其間互に勝敗あつたが、最後の勝利はカルタゴに帰した。而して地中海の西半は、殆ど完全にカルタゴの池となつた。ローマもまた当初はカルタゴの敵でなかつた。西紀前三四九年には、ローマとカルタゴとの間に、下の如き条約が結ばれた——『一、ローマは大西洋に出でてはならぬ。二、サルディニア及びアフリカに於けるカルタゴ領と貿易してはならぬ。三、コルシカ島に居留地を置いてはならぬ。四、叙上の条件で、カルタゴ及びシシリーア島との通商だけを許す』と。

さり乍らローマは、決して長くカルタゴの下風に立つものでなかつた。西紀前第五世紀に於ては、僅に『大なる帝国の小さき始まり』に過ぎざりしローマは、前第五・第四世紀に於ける隣国との角逐に勝利を得て、前第三世紀初頭には、既にイタリーハニ全部を其の版図とし、強大なる陸軍を以て四方に雄視するに至つた。かくて地中海の只中に互に文化を異にし、互に利害を異にし、従つて決して対立せざる大陸軍国と大海軍国とが対立し、遂に両者必死の争覇戦を招いた。ポエニ戦争は、世界史的に避け難かりし戦争である。

この争覇戦は、第一回は西紀前二六四一二四年、第二回は二一八一二〇一年、第三回は一四九一一四六年、前後を通じて殆ど百二十年の長きに亘つた。当初はカルタゴの強大なる海軍が大にローマを苦しめたが、後には勝敗地を替えてカルタゴ軍利を失ひ、カルタゴ人は悉くシシリーア島外に放逐せられ、第一回の戦争に於て、地中海の覇権は夙くもローマに奪はれた。第二回の戦争は、カルタゴの勢力挽回戦にして、英雄ハンニバル、齡僅に二十四歳にして將軍の印綬を帶び、軍を行ふこと神の如く、百戦百勝の武威を以てローマを震駭させたが、功を嫉む小人のために本国に召還せられ、ローマの將軍シキピオとザマの決戦に敗れて、茲にカルタゴの運命窮まり、国外に於ける一切の領土

を放棄し、僅に二隻を残して一切の軍艦をローマに奪はれ、宣戰媾和悉くローマの令を仰ぐこととなつた。第三回ボエニ戦争は、此の瀕死のカルタゴに最後の止めを刺せるものである。

ローマは多年に亘るカルタゴとの死活の戦の間に、その善戦健闘の魂を養つた。而して一たび其敵を倒したる後は百戦錬磨の力を集め、シーザー、アウグストゥス等の英雄に指揮せられ、壯麗なるローマ帝国を建設して、西紀第一・第二世紀に隆盛の極に達した。此戦に於けるローマの勝利によつて、ギリシア・ローマ文明の融合が実現せられ、爾來政治的には欧羅巴のローマ化、文化的には欧羅巴のギリシア化といふことが、動かすべからざる勢ひととなつた。

四 匈奴と欧羅巴

さて叙上の東西対抗は、仮令異種族であるとは言へ、実は白人と相近き、又は白人と同根なる、セム民族及びイラン民族と白人との間に行はれたるものである。然るに其後第五世紀に至り、白人とは全く種族を異にする一民族が、疾風の如く起つて欧羅巴を襲撃した。その民族とは他なし匈奴である。

匈奴は、もと支那の北、蒙古地方に占拠し、蒙古人の血を多量に混じたるトルコ族である。彼等は漢人によつて北狄と卑しめられて居たが、而も其の無比の慄怖を以て、夙くより漢人の脅威となつて居た。秦の始皇帝は其の南下を防ぐために、万里の長城を築いた。漢の高祖の豪強を以てして、その北征は遂に敗衄に終らざるを得なかつた。然るに後漢の初世に至り、匈奴は南北に分れ、南匈奴は後漢に歸服した。而して後漢は之に乗じて匈奴を攻め立てたので匈奴は遂に西方に避走し、且この西走に伴ひて、極めて大規模なる亜細亜諸民族移動が起つた。其等のうち、ルガ河畔に居を占めたる匈奴の一族が、後來の同族のために推前せられ、此時既に東西に分れて衰頽せるローマ帝国の前に、突如として其の雄姿を現し、欧羅巴に侵入して易々と今のハンガリーに、王国を建てた。

当時の歐羅巴が神の筈として戰慄し今日の歐羅巴が惡魔の権化として憎悪するアッティラこそ、此の匈奴の偉大なる君主である。匈奴は西歐人これを Hun と呼ぶ。そは悪虐者の代名詞として、今日に至るまで其の憎む所の強力者を罵るに此名を以てする。曾てナポレオンはドイツ人によつて Hun と呼ばれた。そのドイツ人が第一次世界戦に於て遂にイギリス人から Hun と罵られた。匈奴の西征は今を距る約千五百年の往古、吾国に於ては允恭天皇の御宇に當る。それにも拘らず Hun の一語、今日尚ほ歐羅巴人の心に憎惡怨恨の念を起さしむるに足るとすれば、その歐羅巴に与へたる印象が如何に深刻を極めしかを察し得るであらう。

さり乍らアッティラは、決して歐羅巴史家が罵る如き惡虐の化身ではなかつた。彼が王位に即いたのは、西紀四三年であつたが、即位後幾くもなくして、一牧者が土中より発掘せる希代の宝剣を得てより、宝剣の威靈、能く百戦百勝なるべきを確信し、世界統一の雄心壯図を抱きて、西紀四五三年、美姫イルディゴを得て盛んなる婚宴を張り、其夜闇中に疑問の顛死を遂げたりし生で、實に二十年の歲月を、此の理想に邁往して、曾て倦み又は疲ることを知らなかつた。彼の面目は、東ローマ皇帝の使節として、西紀四四八年、彼の朝廷に派遣せられし一行の一人プリスクスの筆によつて、躍如として描き出されて居る。それに拠れば、彼の風采は、丈低く、色黒く、胸広く、頭大に、頭髪は若くして霜を置き、獨手鼻にして両眼深く窪み、炯々たる光を放つて居た。左右に鋭き顧盼を与へつつ、堂々と歩む彼の姿に、帝の威儀自ら備はり、宛ち天下万民の君主たるを自覺しつつある人の如く見えた。彼はローマ使節を遇するに珍味佳肴を以てし、白銀・黄金の杯を用ゐたが、己れは木製の粗野なる杯盤を用ゐ、僅に一片の肉を取るのみにて、パンをさへも用ひなかつた。その服装の如きも、實に質素簡単を極め、刀剣の裝飾、沓の鉗、馬具などに至るまで、鄙びの諸将の如く金銀珠玉を用ゐることなく、堅く祖先の遺風を守つて居た。

彼は即位後八年にして中央歐羅巴を統一し、更に兵を東西に進めて、裏海の岸よりライン河畔に至る広大なる地域

を平定した。而して四五一年には、ライン河を渡りて今フランスに入り、長驅してオルレアンを冒し、転じてカタロンの野にギスゴス王セオドリック及びローマの勇将エイティウスの軍と戦ひ、セオドリック王を殺しあれど、味方の死傷また夥しかりしを以て、一先づ軍をハンガリーに回した。

翌四五二年春、彼は更にイタリー征討の途に上り、先づ北イタリー第一の要害アクイレートを抜き、アドリア湾頭に栄えたるコンコルディア・ヌティヌム・バタギウムの諸市を抹殺し去り、更にポー河を渾りてロムバルディ平野を経略し、ミラン其他の諸市を降し、次で南下して直ちにローマを衝かんとしたが、法王レオ一世の説得するところとなりて、其軍をハンガリーに回したので、ローマは幸うじて匈奴の蹂躪から免れることができた。

彼は自ら常に『我是神の笞なり、神に代つて末世の人間を膺懲す』と言つて居た。彼は己れに抵抗する敵に対しても、飽迄も之を粉碎せば止まなかつたけれど、己れに帰服せる者は、能く之を遇した。彼は一遍の武将なりしかの如く伝へられて居るけれども、実は戦場の闘士たるよりは三軍の帥たるに秀で、三軍の帥たるよりは更に帝王たるに秀でたる器量を有し、最も將士の心を收攬して居た。彼の欧羅巴侵略は、精神既に死して形骸のみ残されるローマ帝国の没落を早め、之に代るべきカトリック教会の擡頭、ゲルマン民族の興起を促し、西洋古代史の幕を閉ぢて、中世史への推移を急がしめた。

五 回教徒と欧羅巴

匈奴の西征に次ぐものは、第七・第八世紀に於けるアラビア人の欧羅巴侵略である。マホメットの出現によつて、忽然強大なる国家となれる、一層適切に言へば強大なる宗教的戦争団体となれるアラビア人は、剣による新信仰の伝道を開始し、轟ふところ敵なき勢を以て、常勝の歩みを東西に進めた。

彼等は西紀七〇九年に於て、既に北アフリカ一帯を征服して了つた。回教軍を率ゐたる勇将アクバルが、大西洋の波立つ岸に達し、馬を海中に乗入れて、「アラーよ、若し此海わが行手を遮らすば、予は更に西方未知の國に進み、神の唯一なるを教へ、異教の民に妙法の利劍を加へんものを』と叫びたることは、回教史上の名高き語草である。大西洋はアクバルの嘆じたる如く、回教軍の進路を阻んだ。さり乍ら地中海は、決して彼等の進撃を遮るものでなかつた。北アフリカを帰服せしめたる名将ムサは、西紀七一年、部下の一将タリクに五千の兵を与へ、海を渡りてスペインに攻入らせた。タリクが上陸したるスペインの一岩角は、此時よりシベル・アル・タリク即ち『タリクの丘』と呼ばれ、後に転訛してジブラルタルと呼ばれるに至つた。

タリクは、二百年来スペインに占拠せる西ゴス人を敵とし、カディス市に近きヘレスの野に於て、西ゴス王ロデリックと四日に亘る激戦の後、つひに之を擊破してスペイン征服の礎を置いた。此の捷報アフリカに達するや、ムサまた直ちに海峡を渡りてスペインに入り、タリクと力を協せ、西紀七二三年には殆ど之を蕩平しがつた。當時ムサの雄志は、實にピレネ山脈を越えてフランスに入り、更に南下してローマを征服し、ヴァティカン聖殿に教祖の縁旗を掲げ次で北上してゲルマン諸族を平らげ、ダニューブ河を下りて、バルカン半島に回教の勢威を布き、全歐を従へて然る後にダムスコに凱旋するに在つた。此の壯烈志は、ダマスコ朝廷が両将を召還した為に実現されなかつたが、其後アブドゥル・ラハマンのスペインに將たるに及んで、ムサの志を継いで回教を全歐羅巴に布かんと決心し、大軍を率ゐてピレネ山脈を越え、欧羅巴の中原に進出した。かくて西紀七三二年、常勝不敗の回教軍は、フランクの勇将シャルル・マルテルが率ゐたる決死の大軍と、トゥール・ポアティエの間に横はる平野に会戦し、激戦七日の後、アブドゥル・ラハマン乱軍中に戦死し、回教軍は目的を果たさずして退却した。此の一戦は、實に東西両民族の運命を決したる一大戦として、永久に記憶せらるべきものである。若し此戦が回教徒の勝利に帰したならば、恐らく全歐羅巴が

回教徒によつて征服せられ、世界史は全く今日と面目を異にして居たらう。幸か不幸か、回教徒の欧羅巴中原進出は此の敗戦によつて阻止されたが、ビレネ山西イペリア半島の地は、其後も長くアラビア人支配の下に置かれた。

さて回教徒が、西は大西洋の波打つ際より、東はインダス河の畔に至る広大なる地域を統一して、之を一個の回教國土たらしめたことは、實に世界史上の一奇蹟とも言ひ得る。而して其の創造せる回教文化は、アラビア人の信仰を基礎とし、殊にペルシア人の精神に哺まれたる東洋思想、並にギリシア思想を融合せるものにして、恰もアレキサンドル東征以後のヘレネ文化が然りし如く、燦然たる一個の世界文化であつた。此の文化は、亞細亞に於てはダマスコ及びバグダード、阿弗利加に於てはカイロ、歐羅巴に於てはスペインのコルドワ及び南イタリーのサレルノの諸市に於て、最も爛漫たる花を咲かせた。暗黒時代と呼ばれし当時の歐羅巴に於て、苟くも知識を求めんとするほどの者は笈を此等の都市に負ひ、回教學者に師事するを常とした。

まづ之を哲学の方面について観れば、彼等はギリシア哲学、わけてもアリストテレスの著書をアラビア語に翻訳しアギセンナ、アエローエス、マイモニデス等の哲学者を出した。次には数学及び自然科学が、回教世界に於て驚くべき発達を遂げた。彼等は印度数字を改善して所謂アラビア数字となし、之によつて計算上に新しき時期を劃した。また代数即ちアルジエブラの原語が、離れたるを結ぶと云ふアラビア語アル・ジエブルより来ることによつて知り得る如く、代数学もまた彼等の研究によつて発達した。彼等はまた鍊金術の研究より進みて、化学及び薬学の基礎を築いた。アルカリ、アルコール等の言葉は、いづれもアラビア語であり、アルカリと酸との区別は、實に彼等が初めて行へるところである。また其の占星術より進みて、天文学も盛んになつた。彼等は解剖学を研究して、医学の発達に多大なる貢献を与へた。その医学と薬学とを以てして、アラビア人の中から多くの名高き医者を出した。中世に於ては、アラビア医者とは直ちに名医の意味であつたほど、彼等は此の方面に於て西歐の尊信を博した。

彼等はまた盛んに通商貿易に従ひ、その隊商は、北はスカンディナギア半島、南はアフリカ東岸のザンジバル、東は遠く支那に来征し、到處に商利と知識とを求めた。かくしてイブン・マスティ、イブン・ハウカル、イブン・バトゥーダ等の地理学者を彼等の間から出した。また史学上に於て、最初に歴史に関する理論を研究し、歴史の社会学的研究を試みたるイブン・カルドゥンも、世界文化史に不朽の名を止むる回教の史学者である。

總じて叙上の回教的世界文化が、重大なる影響を欧羅巴に及ぼせることは言ふまでもない。そは美術・音楽・工芸を世界に伝播せる点に於て、西洋哲学史の古代より近代へのかけはしなれる点に於て、近代科学——實に之あるが故に世界の主人たるを得たる自然科学の芽を、欧羅巴人の精神に植付けたる点に於て、また東西の交通を促進し、その文化の融合を容易ならしめたる点に於て、人類の歴史に向つて偉大なる貢献をなせるものである。

加ふるに西欧封建制度と共に起れる尚武の精神、回教に対する反抗の念、彼等に奪はれたる基督教聖地回復の希望が、西紀一〇九六年より一二七〇年に至る百八〇年の十字軍となりて現れた。十字軍は、その直接の目的に於て全然失敗し、却つて回教諸国の敵愾心を激発するに終つた。もとより聖地奪回の希望も遂げられなかつた。さり乍ら欧羅巴人の之に加はつて東征せるもの、前後實に七百万を算し、約二百年に亘り、一切の階級を挙げて共同の戦にいそしみたることが、欧羅巴に及ぼせる影響は、広大にして深刻である。そは一切の内訌に拘らず、吾等は等しく白人であり、且等しく基督教徒であるといふ人種的並に宗教的観念を、最も強烈且普遍的に西欧人の魂に刻み込んだ。白人の異人種に対する差別的精神は、實に此の共同遠征の間に孕まれたるものと言ひ得る。

蒙古即ちモンゴルとは、勇敢無比の意味。之を以て己れの名称とし、慄怖豪強を以て誇つて居たとは言へ、成吉思汗出世以前の蒙古人は、所詮未開の一北狄であつた。然るに成吉思汗の一たび起つて号令するや、窮寒人の住むに堪へざるべき朔北の野に、組織あり統一ある国家の基礎を置き、この基礎の上に欧亜に跨る希有の大帝国を建設せることは、唯だ不可思議といふの外はない。

不可思議と言へば單り蒙古人の場合のみではない。アッティラに率ゐられたる匈奴、マホメットに率ゐられたるアラビア人、いづれ劣らぬ不可思議である。此等の民族は、忽然として出現せる英雄が、剣を執つて号令するまでは、為すなき蛮族の如く見えた。彼等の無為は、幾十年・幾百年の民族の全精神を、一個の英雄として出現させるための準備であつたのか。凡そ個人と言はず民族と言はず、亞細亞には『一過勝負性』ともいふべき特異なる性質がある。日頃は手にも終へぬ疎懶漢が、一旦緩急に際すれば、いづくより得来りしかと驚かるる智能を發揮する。『寝るも奉公』といふ諺ある如く、碌々として無為無能なるかに見えし者が、時ありて平素精励なる人よりも、却つて奉公の大義を完うせる例は、求めるに極めて易くある。民族の場合も同様に、蛮民一朝にして天下の支配者となれること、叙述三者がわけても顯著であるが、他にも其例が少くない。

さて此の不可思議なる民族及び其の英雄は、先づ内外蒙古を統一し、満洲を略取し、黄河以北の支那を征服したる後、西紀一二一九年、大舉西征の軍を起し、七年にして中央亞細亞の殆ど全部及び南露の一部を征服した。成吉思汗の後を継げる窝闊台汗即ち太宗は、父の遺業を承けて、西紀一二三五年第二回歐羅巴遠征軍を起し、五年にして中露・南露の殆ど全部を平定し、進んでポーランドに入り、東部ドイツを経略し、転じてハンガリーの全部、オーストリアの大半、及びバルカン諸邦を従へ、長驅してイタリーのエニスに進んだ。若し窩闊台汗が、酒に沈湎して其の生命を縮むことなく、其父の如く六十六歳までも生き得たならば、恐らく歐羅巴全部が、蒙古軍のために征服されたに

相違なかつた。惜むらくは一二四〇年、彼れ五十六歳を以て長逝した為に、遠征軍は一先づ東に帰らねばならなかつた。ギボンの『ローマ衰亡史』に下の如く書かれて居る——『蒙古來の恐怖は、歐羅巴の遠き果まで拡がつた。一二三八年にはエデンのゴーティア、ドイツのフリーザ地方の漁民が、北海海上に蒙古人出没すと恐れ、鰐取りのためにイギリス沖に出漁する者なく、之がために鰐の価が暴騰した』と。

蒙古人が海上に出没すといふ如きは、当時の欧羅巴人の驚くべき無智を示すものである。白人が太古より優秀民族なりしかに迷信し、又は白人が太古より理智的なりしかに迷信する亜細亜人は、ギボンの此の一節によつて其蒙を啓くがよろしい。殊に此の征西軍に於て、蒙古軍の通訳を勤めたりし者が、七個国の言語即ちイギリス・ロシア・ドイツ・キプロチャク・ハンガリー・アラビア・蒙古の言語に通じたる一イギリス人なりしことは、いろいろの意味に於て痛く吾等の注意を惹く。

かくて貴由汗即ち定宗が、外蒙平野の内に於て行へる即位式には、ローマ法王序を初めとし、フランス・イタリー・ロシアの諸国より、遙々使節が参列した。而して時のローマ法王インノセント四世が、使節柏朗嘉賓 *Piano Carpini* をして定宗に奉呈せしめたる書中、定宗に向つて基督教に改宗を勧めたるに対し、定宗が蒙古在住の景教宣教師に命じ、ラテン文を以て認めさせたる返書は、實に下の如きものであつた——

『上帝の加護によつて人類全体の大總統たる貴由汗より、ローマ法王に答へる。貴下の使節、書を奉じて我に來り、和を講ずることを求める。我れ使節の言を聴き、また貴書の趣意を知つた。若し貴下等が果して兵を罷めようと思ふならば、貴下を初め諸国の王公が、皆な自ら來りて和を請ふが宜しい。決して躊躇してはならぬ。貴下の書中、我に對して基督教に改宗せよと勧めて居るが、我は其の理由を知るに苦しむ。また貴下の書中、我が基督教徒を殺したこと驚いて居るが、それは決して驚くに當らぬ。彼等は、上帝の意に背き、成吉思汗の命令を距み、奸計を用ひて我

が使者を殺した。故に上帝震怒し、我に命じて之を膺懲せしめ、悉く諸国を臣附せしめ給うたのである。そは人力の能くする所に非ず、唯だ上帝の命を奉じたればこそ能くしたことである。然るに西方諸国は、口には上帝を信すると称へながら、常に他国を侮蔑して居る。是くの如きは決して上帝の眷顧を受ける所以ではない。我等は至心に上帝を拝する。故に其の加護によつて世界を統一し、東西の差別を撥無せんとするものである。我等もまた人間である。上帝の加護なくしては、何事とも成就することが出来ぬ』

此の一篇の書中に潜める蒙古人の莊嚴なる理想、誠実なる信仰、而して熾烈なる意氣を看取せよ。彼等は、口に信神を唱へながら、実は人類平等の大義を忘れ、十字軍以来の人種的差別観に拋り、みだりに他国を侮蔑する白人を膺懲し、東西を渾一せる世界帝国、曾てアレキサンドルによつて企てられし莊嚴なる世界帝国を、一挙にして建設せんとせるものである。吾等亞細亞人は欧羅巴史家の言を信じて、蒙古軍は殺戮掠奪を能事とする悪魔団なりしと考へてはならない。蒙古軍の魂は、實に古今の覚者たる湛然居士耶律楚材其人であつた。蒙古人は此の偉大なる宰相の指導を受けて居たのである。

さて蒙古人の世界帝国の理想は、種々なる理由の下に実現されなかつたけれど、ロシアの如きは其後三百年の久しきに亘り、蒙古人支配の下に立つた。フランス・スペイン・イタリーの諸国は、蒙古の再び欧羅巴に侵入せんことを恐れ、長く蒙古汗と親善なる關係を繋ぐに努めた。第十五世紀初頭、帖木兒の朝廷に、フランス王シャルル六世や、スペイン王ヘンリ三世の使節が入観しているのを見ても、蒙古の勢威、如何に欧羅巴を圧倒して居たかを知るに足るであらう。

予は序を以て帖木兒のことを一言して置きたい。成吉思汗の後継者を以て任じたる此の英雄兒が、終世の目的とせることころは第一に世界を統一して其の君主となること、第二に後世無限の尊敬の裡に生きたいといふことであつた。

彼は此の目的のために、五十年間不斷の努力を続けた。彼の生涯のうち、政治にも軍事にも心を労せざりし安樂の日々は、實に僅々二箇月に過ぎなかつた。亞細亞の英雄は、ひとり帖木兒のみならず、皆な偉大なる國家を建設して其の安寧を維持するために、其血の一滴を流し尽して厭はなかつた。其等の事實を見る時、予は亞細亞人が統治者・支配者としての、人種的本能を具足せることを信ぜざるを得ない。

蒙古人に次では、オスマン・トルコ人の西漸がある。彼等もまた、忽然として微弱より強大となれる亞細亞民族の一つである。その國を西亞細亞の一角に建てたるは、第十三世紀の末年であつたが、次第に四方を征服して、西紀一四五三年には、廢殘の東ローマ帝国を亡ぼし、都をコンスタンティノープルに奠め、欧亞に跨る帝國を組織して、久しく歐羅巴の脅威となつて居た。殊に一五二九年及び一六八三年のギーン攻囲は、中欧諸国を震慄せしめた。

かくの如くして第十三世紀より第十六世紀に至る数百年は、實に歐羅巴が亞細亞の前に屈伏せる時代であつた。歐羅巴中世史の真相は、亞細亞との關係を究めずして、決して明らかにすべくもない。蓋し中世の歐羅巴諸國、一として多かれ少なかれ亞細亞の影響を蒙らざりしはない。唯だ例外を求むれば一のイギリスがある。イギリスは其の地理的關係から、殆ど亞細亞と接觸することなかつた。

七 欧羅巴の隆興

蒙古軍の襲撃は、歐羅巴に取りて恐怖戰慄すべき暴風來であつた。幾多の小国に分裂割拠せる当時の歐羅巴は、その専横にして民心を失へる諸王侯と、重き甲冑を装ひて進退の敏速を欠き、且大軍の懸引に慣れざりし武士と、訓練不足らず勇氣乏しき農兵とを以てして、到底數十年の征戰に鍛錬せられたる蒙古軍の敵でなかつた。而も此の暴風は、

沈滯し行詰まれる中世歐羅巴に対し、深甚なる刺戟を与へた。そは匈奴が、ローマ帝国の没落を促して、歐羅巴古代史より中世史への推移を助けたりし如く、實に中世史より近世史への推移を促進した。

東西戦が常に然りし如く、蒙古来もまた東西の交通を頻繁ならしめ、従つて東西の文化を接触せしめた。既に述べたる如く、外蒙の野に行はれたる貴由汗の即位式には、歐羅巴諸国の使節が、万里遠来して参列した。爾來西欧人にして種々なる目的を抱いて東洋に旅するもの、次第に其数を加へた。殊に蒙古朝廷は、人種の如何を問ふことなく、苟くも才幹ある者は等しく之を重用して、自由に手腕を揮はしめたので、その才能学芸を以て元朝に仕へたる西欧人の数は、決して少なくなかつた。イタリ一人マルコ・ポーロの如き、取りも直さず其の一人である。彼は一二七五年忽必烈の朝廷に來り、彼に仕へて支那に留まること十七年の長きに及び、帰国して名高き東方紀行を著はした。実事
虚事うち混へたる此の見聞録、並に其他の旅行家の著書又は談話が、皆な東方亞細亞の殷富を高調せざるはない。例へば吾が日本である。日本はマルコ・ポーロによつて、下の如く伝へられた——

『日本國は満洲の海上千五百哩、國土巨大にして、國民の容姿は端麗、文明なる風俗を有して居る。宗教は偶像崇拜にして、統治の主權は天皇に在り、絶えて外国の干渉を受けない。国内に黃金を産すること無限であるが、君主は之を海外に輸出することを嚴禁して居る。故に商船の往来は殆どない。皇居の金色燐爛たること人目を眩し、その莊嚴は想像も及ばない。現に日本に赴いて目撃したる者の談話によれば、屋根は黃金の板を以て葺き、天井は貴金属を以て張り、室内備付の卓子は、厚さ數寸の純金製のものである。窓や戸も皆な裝飾を施し、金を鏤め、銀を張り、豪奢のさまは筆紙尽すべくもない。また島内に多量の紅色真珠を産し、その形状は円く大形にして、白色真珠と同価又は高価である。國民は、或は死者を埋葬し、或は之を火葬する。その埋葬式には、死人の口中に真珠を含ましめる風習である。之を以てしても、如何に真珠の多きかを知るに足る。加之他の宝石も亦夥しい。これ此國が富有なるこ

と世界に比類なき所以にして、大王忽必烈大に之に垂涎し、一舉にして之を征服し、其の国土を吾有たらしめんとしたるもの之が為である』

この驚くべき記事、乃至之と挿ぶところなき東方の異事奇聞が、当時の欧羅巴人の好奇心、或は冒險心、或は征利心を、とめどもなく刺戟した。而して蒙古帝国の分裂、オスマン・トルコの興隆に伴へる西亞細亞及び中央亞細亞の政治的混沌がさなきだに困難なりし陸路による東西交通を、一層困難ならしめた。同時に地球の円形なることが次第に確証され、海路東洋に達し得べきを信する者漸く多く、万里の波濤を越えて東洋に達し、見事一攫千金に先鞭を着けんとする冒險征利の精神が、年と共に強大を加へて來た。この精神の権化が、取りも直さずコロムバス其人である。

ホムボルドの説くところに拠れば、コロムバスの一念発起は、マルコ・ポーロの東方見聞録に刺戟されたものである。而も其の見聞録のうち、最も強くコロムバスの心を惹きたりしは、日本国に関する記事であつた。フロレンスの名高き地理学者トスカネリは、コロムバスの質問に対し、欧羅巴より西航すれば、必ず東亞に到着すべしと確答して居る。マルコ・ポーロの書は、世に出でしより百年の後、コロムバスに読まれて其の偉大なる魂を動かし、竟に日本を目指して船出させることとなつた。

世界近世史——欧羅巴栄え、亞細亞衰へし世界近世史は、コロムバス其人によつて第一頁を書かれた。而もコロムバスをして、此の白人世界制覇の途を指かしめたる動機が、空しく伝へられし吾が日本の黄金なりしことは、まこと因縁不可思議といふの外はない。而して白人世界制覇の最後の勝利者は、曾て蒙古征西軍を嚮導せる通訳者を出だせる國、而も其國自身は、其の地理的関係より、亞細亞の影響感化を蒙ること殆ど皆無なりし例外の國、即ちイギリス其者であるといふことも、また一層の不可思議と言はねばならぬ。

さて、近世に於ける欧羅巴世界制覇の経路は、茲に槩説すべき限りでない。唯だ吾等は、約三百年の間に、独り亞

細亞人と言はず、一切の非白人が、殆ど皆歐羅巴の下風に立つたといふ事實を語れば足る。げに古のサラミス役及びボアティエ役にも及ぶべき深甚なる意義を有する一九〇四・五年の日露戰争に至るまで、歐羅巴の非白人征服の歩みは、曾て阻止されたことがなかつた。而して歐羅巴の此の發展は、亞細亞の場合と異なり、忽然として出現せる神祕的英雄の号令によつて行はれたるに非ず、徐ろに充實し来れる國家の力が、歩々發達のきさはしを登り、功業に功業を重ねたる結果である。而して比處に彼等の霸權の非常なる強味がある。

然らば此の歐羅巴の力は何に基づき、如何にして充實し、且如何なる特徴を有するか。かくて吾等は、歐羅巴の特性は何ぞといふ、重大にして複雜なる問題に逢着したのである。

八 欧羅巴の世界制覇

ギリシア・ローマの古より、中世を経て現代に至るまで、歐羅巴精神の最も著しき特徴の一に、現實の社會生活——一層適切に言へば現實の國家に、人間の理想を實現すべき最上の組織を与へ、謂はば自働的に人類の進歩又は完成を招來せんとする努力である。されば歐羅巴の偉大なる思想家にして、未だ曾て思を國家の制度組織のために凝らさざりしは無い。プラトン、アリストテレスは言ふにも及ばず、神に醉へる哲人スピノザさへ、また其例に洩れなかつた。独り哲学と言はず、アウグスティヌス、トマス・アクィナスの如き宗教家、ダンテの如き詩人まで、同じく心を政治的思索に籠めて居る。そは東洋が、主力を精神的生活の充實登高に注ぎ、人々個々に真理を得しめすれば、求めずして理想の國家を現出すべしとする主潮と、鮮明なる対照をなして居る。

かくて歐羅巴は、その外面向的組織制度を重んずる精神に相応して、截然たる歴史的發展の段階を踏んで今日に至つた。歐羅巴の歴史は、明白に外面向的・組織的變化の歴史である。アテネ民主主義の勃興と没落、ローマ共和国より

ローマ帝国への推移、ローマ帝国崩壊以後の封建歐羅巴の出現、基督教の勝利、新社会の準備となれる文芸復興、宗教改革、フランス革命、而して最後には社会主義国家建設のための急激なる運動、一として火の柱の如く煥乎たらざるはない。然るに東洋に於ては、唯だ吾が日本を唯一の除外例とし、其他の諸国の歴史の表面に就て、是くの如く顕著なる変化の跡を辿るべくもない。固より王室の隆替、民族の興亡は、幾度となく繰返された。而も国家の組織制度の上に、之を歐羅巴の歴史に於て見るが如き鮮明なる変革が、意識的に行はれた例は殆ど無かつたと言ひ得る。此間に在りて独り日本は、天皇を大父と仰ぐ氏族制度の国家より、大化革新によつて有機的な君主国家となり、次で実質に於て貴族政治の国家となり、更に武門政治の封建国家となり、最後に明治維新によつて近代的立憲君主国家となりたる点に於て、既に述べたる歐羅巴的進化の跡を、歴然として示して居る。而も是くの如き変遷推移を一貫して、國家的生活の中心が、千秋万古皇室に在りし点に於て、實に最も際立つて亞細亞的である。

さて西洋古代史は、ギリシアとローマとの歴史である。而して其の文物は、ペルシアと角逐し、カルタゴと争霸しつゝ、而して之による鍛錬によつて成就された。西洋中世史は、ギリシア・ローマの力、次第に影薄きものとなりし時、卓落不羈なる北方の児ゲルマン民族の、激刺たる新興の意気に鼓舞せられ、崩壊したるローマ帝国の廃趾の上に新に組織せられたるローマ・カトリック教会、及び之に伴へる封建制度の歴史である。従来西洋史家が有意無意に閑却して居るけれど、此の西洋中世史に於て、亞細亞民族の征服が、極めて重大なる役割を勤めたことは、既に述べたる通りである。而して西洋近代史は、中世封建割拠の間に、相異なる民族及び国家が、ギリシア・ローマの古代文化を根柢とし、共通に基督教の信仰を奉じ、而も同時に自己固有の精神を鍛錬長養して、それぞれの国民性を確立したる諸国の歴史であり、且此等の諸国が、歐羅巴内に於て互に鎧を削りつつ、而も外に向つては競争的に征服の歩みを進め来れる歴史である。

此の近世歐羅巴の源は、言ふまでもなく文芸復興に伴へる人間の個性の解放から流れ出た。神を瀆し罪を誘ふものとして、久しく斥けられて來た古代ギリシア及びローマの学芸が、憧憬と感激とを以て研究され初めてから、歐羅巴はカトリック教会の束縛から解放され、啻に古代学芸が復興されたのみならず、その刺戟によつて新しき自覚を与へられ、その自覚によつて新しき天地が拓かれたこととなつた。近代國家の成立も、宗教改革の断行も、皆な其の精神の源を之に求めねばならぬ。

文芸復興によつて生れたる自由の精神は、十字軍によつて振作せられたる戦闘的精神と相結び、政治的には近世の初期に於て、先づ南欧イペリア半島国民をしてやがて白人世界制覇の端緒となれる航海探検の事業に旺向せしめた。次で英・仏・蘭の諸国、また其跡を追うて海上に向ひ、却つて先駆者を凌ぐに至つた。植民的活動の名を以て呼ぶる此等の運動は、当初は個人の冒険的精神、及び之を庇護せる專制君主の力によつて行はれ、時を経るに従つて次第に国民的運動の性質を帶び来り、その最も国民的となりたるものが、最大の成功を収めることとなつた。かくて近世植民史の名を以て呼ぶるものは、之を民族争鬭の上から見れば、取りも直さず白人の非白人征服史である。

かくの如く歐羅巴は、外に向つて侵略を試みると同時に、その侵略の結果として、国家生活の内部に重大なる変化を招き、殊に産業革命による経済生活の激変によつて、一国の内部に於て、並に諸国相互の間に、激しき新旧勢力の衝突行はれ、茲に全欧に亘る革命的思想の擡頭となり、而して此の衝突を手際よく解決せる國家が、近代歐羅巴の強国、従つて世界的強国たる礎を、波瀾重疊の間に築き上げた。

此の複雑なる近世歐羅巴史の底深く流れたる潮は、政治的には民主主義、経済的には資本主義、而して思想的には主知主義である。之に対する幾多の反抗的潮流ありしに拘らず、此の潜める潮が、第十九世紀後半に至りて、殊に澎湃たる勢を呈し、歐羅巴は満帆の風を受けて此潮に乗托した。かくして生れたのが現に吾等の目撃する現代歐羅巴で

ある。

この文化は、何はさて置き、実験科学を最後の基礎とせるものであり、その一切の長所と短所とは、併せて此處に在る。自然の一切は、大は天体より小は細菌に至るまで、在りとし在るもの、皆な人間の知性によつて究尽せられざるは無いとの自信から、彼等の専門的研究が始められた。而して真個驚嘆に堪へざる業績を挙げた。この業績は、直ちに人間の実際生活に應用せられ、その最大至深の結果が、産業革命として現れた。今日に於て、吾等の生活に最も便利なる殆ど總てのもの——地球の面積を時間的に縮小し去れる高速度の交通機関、暗夜を白昼の如くならしむる強力の照明設備、皆是れ自然力を人間のために駆使することによつて得られたるものにして、實に嚴肅欺かざる西歐の知的探求に負うて居る。かくして彼等は、その科学的精神を以て国力を充実し、其の政治的・經濟的勢力を、資本主義的帝国主義に組織し、之に拠りて全地球の上に、各自の世界政策を展開するに至つた。

歐洲大戦は、次第に馴致せられたる彼等の世界政策の衝突である。而して此の大戦によつて、彼等の文明の長所と共に、その弱点が遺憾なく暴露せられ、且彼等の世界征服は蹉跌せねばならぬこととなつた。それにしても彼等の功業は偉大であつたと言はねばならぬ。ここ三百年の間に、一切の有色人種は、次第に白人の前に雌伏し、昔日の自信と雄志とを失ひ尽したかの觀を呈するに至つた。人は自ら侮りて他の侮りを招ぐ。白人の増上慢は決して偶然ではない。

九 復興 亜細亞

さて吾等東洋対西洋の研究者に取りて、最も看過すべからざる一事は、歐洲大戦を転機として、亜細亞問題の意義が、全く従来と其の内容を異にするに至りしことである。世界戦前に於ては、謂はゆる亜細亞問題とは、歐羅巴列強

が、組上の亜細亜を如何に料理し、如何に之を分ち取るかの問題であつた。然るに世界戦後の亜細亜問題は、全く戦前と其の本質を異にし、歐羅巴の支配に対する亜細亜復興の努力を意味するに至つた。而して此の変化に伴ひて、歐羅巴人の所謂亜細亜不安が起つて來た。そは彼等に取りてこそ『不安』であるに相違ないが、亜細亜に取りては疑ひもなく復興の瑞兆である。

今や亜細亜不安は、西エジプトより東は支那に至るで、いろいろな姿を取りて現れて居る。西方回教諸国に在りては、委任統治乃至保護統治を斥けんとする努力となりて現れ、印度に於ては迅速なる自治乃至完全なる独立に対する運動として現はれ、安南に於てさへフランス統治を顛覆せんとする陰謀が企てらるる状態にある。

此等一切の運動は、その表面に現るところは、政治的乃至経済的である。而も其の奥深く流るるところのものは、實に徹底して精神的である。何となれば今日の亜細亜復興運動は、自覚めたる亜細亜の魂の要求に、其源を發して居るからである。之をトルコに於ては、一九〇八年、青年トルコ党が先づ革命を成就した。而も当時の革命指導者たりし年少士官エンゲルが、サロニカの町に於て、群衆に向つてなせる名高き演説に明白なる如く、当時の青年トルコ党は、紛れもなき西欧民主主義の詠歌者であつた。然るに世界戦争中に起りしトルコ国民主義は、トルコ精神の奥深く根ざせるツラン魂の覺醒に發して居る。故に其の求むるところは、西欧民主主義をトルコに輸入せんとするに非ず、純乎として純なるトルコ文化を、自己の手によつて建設し成全せんとするに在る。之が為に彼等は、一切外国语を使用すべからずと云ふが如き極端にまで馳せた。トルコに於ては、日本に於ても然るが如く、町町の看板や掲示に、英・独・仏語、乃至ギリシア語を用ひて居た。然るにトルコ政府は、嚴命一下之を取去らせ、トルコ語以外の一切の異邦語を使用することを禁じ、同盟国なるドイツの言語文字をも、一様に斥け去つた。事のは是非は暫く措く、彼等の運動が如何に本質的なるかは、之によつても知り得るであらう。

吾等は同様の事実を印度に於いても見る。世界戦前に於ける印度の独立運動は、その目的並に手段に於て、紛れもなく歐羅巴革命運動の模倣であつた。然るにガンディの出現によつて、印度の独立運動は徹底して印度的となつた。そは如何なる点に於ても最早西歐の模倣でない。その目指すところは、實にイギリスの支配を斥くるのみならず、印度精神より生れ出づる印度的政治によつて、新しき印度を建設するに在る。

また小亞細亜に於ける回教諸国の運動が、政治的なると同時に宗教的、従つて精神的なることは言ふまでもない。此等の民族が、歐羅巴の委任統治乃至保護統治を斥けるのは、その政治的支配、並に其の經濟的掠奪を斥けるためなることは言ふまでもない。而も彼等の根強き歐羅巴排斥には、一層深き理由がある。それは西歐諸国が此等の地方に於て、十分に經濟的掠奪を遂ぐるためには、勢ひ亞細亜民族の生活を、歐羅巴的に改める必要がある。而して此等の民族は、是くの如き生活の変化を根本に於て厭忌する。この二重の独立——精神的独立と政治的独立、これ自覺めたる亞細亜の今正に求めつゝあるところのものである。而して此の二重の独立に対する要求、之を実現せんとする努力が、即ち亞細亜不安の原因であり、従つて亞細亜復興の真意義である。

この亞細亜復興の努力が、同じく世界戦の所産の一なる國際聯盟と、冰炭相容れざる目的を有するものなることは極めて明白であると言はねばならぬ。蓋し國際聯盟は、その標榜が如何なる修辭を以て粉飾せらるるにせよ、要するに現在のままの國際状態を承り、持続したいためのものであり、決して新しき世界主義に拠つて立てる組織でない。而も世界の現状とは、實にアングロ・サキソンの世界制覇といふことでないか。それ故に國際聯盟は、所詮アングロ・サキソンをして長久に世界の最優越者たらしむるためのものである。亞細亜諸国の真摯なる独立運動者が、吾が日本を罵りて、黎明亞細亜の唯一の黒点と呼んだのは、日本が國際聯盟に加入せること、また其の原因の一となつて居た。

さり乍ら國際聯盟といふ如き外面的制度によつて、永く世界の現状を釘付けせんとする計画並に努力は、一切生類を支配する儼然たる理法を無視して、國家の新に生れ、又は大に發展し、又は終に死滅せんとする妨げんとするもの、隸屬國民より自由を回復するの權利、弱小民族より強大ならんとする權利、新興國民より老衰國民の後繼者たらんとする權利を奪はんとするものなるが故に、竟に無益にして且無効に終らねばならぬ。蓋し一切の組織又は制度は理法の具体的發現としてのみ、意義と価値とを有するものなるが故に、非法の組織又は制度が長久に存続する如きは到底不可能のことにつ属する。

かくて國際聯盟の樹立に拘らず、實に其樹立の精神に一顧盼だも与ふることなく、亞細亞諸国は既に述べたる如く復興途上に在る。而して一方歐羅巴諸國其者が、今や避け難き變革の脅威に遭ひ、國家内部に於て長き鬭争を続けねばならぬ状態に在る。何となれば現代歐羅巴の制度を、全体的且根本的に否定する思想が、世界戰と共に擡頭し、既にロシアに於て凱歌を挙げて居るからである。そは外面的制度の更新によつて、出來得る限りの『幸福』を現實生活の上に實現せんとするものなる点に於て、鮮明に歐羅巴的努力であり、その根柢を流るる精神は、フランス革命のそれと同一である。

然るに歴史の吾等に明示するところに依れば、從来歐羅巴に於て新しき社會理想が人心を支配する時、やがて來るもののは個人的生活並に社會的制度の偉大なる変革であつた。固より古き思想が之と戦つて一時は勝利を得たこともあつた。而も最後の勝利は常に新しきものによつて唱へられて來た。或は思想の變化に伴ひて、全く新しき組織制度が旧きものと代つた場合もある。又は思想的に變化を遂げつゝも、新しき生命を原動力として、旧き制度が存続したる場合もある。いすれにもせよ革新は遂に避け難かつた。近き例証を欲するならばメットルニヒの努力を見よ。歐羅巴には珍しき此の徹底せる保守主義者は、フランス革命の源となれる思想に対し、實に下の如く確信した——『かかる

思想は、本来此世に現るべきものでなかつた。さり乍ら不幸にも一旦現實に侵入して來た以上、諸国は協力して之を亡ぼさねばならぬ』と。而も其の努力は何うであつたか！ 故に吾等は思ふ、晚かれ早かれ歐羅巴諸国は革命の洗礼を受けねばならぬと。現にイタリー及びドイツが、既にロシアの先駆を追ひて、新しき秩序をそれぞれの国内に確立しつつある。

さて日本のうちには、社會主義的精神が歐羅巴を支配するに至らば、國際間の戰争が發無されるであらうと安心する人々がある。此の安心は最も危險である。想を百年の昔に馳せて、フランス革命の標語を念頭に喚び起せ。そは今日の社會主義の主張よりは、遙に潤ひある『自由と平等と友愛』でなかつたか。而して此の理想のために、幾多の高貴なる生命が、勇躍して犠牲となつたのだ。然るに此の革命的思想が、兎にも角にも勝利を得たに拘らず、白人の最後の世界制覇が、フランス革命以後の歐羅巴列強によつて、最も無遠慮に遂行されたではないか。主知主義の上に立ち、人類に共通なるべきものとして、あれほど高唱せられたる自由と平等と友愛とが、彼等の國際的生活の何處かに、その痕跡もあるか。さればこそ日本の社會主義者が好んで味方として引用するバートランド・ラッセルさへ、其著『自由に到る諸々の路』に於て、蜂窩の例を引いて、仮令列強が悉く社會主義國家となりし暁にも、國際間の紛争は決して絶えぬと述べて居る。殊に人種的感情が介在する場合、國際關係は一層複雜を加へる故に、ラッセルが明かに國名を挙げて断言して居る如く、日・米・濠が悉く社會主義國家となる日ありとしても、三者の間に横はる問題は、之によつて些かも解決されるものではない。

かく考へ来る時、吾等は亞細亞対歐羅巴の将来を、仄かに揣摩することが出来る。亞細亞の自覺が強大になればなるほど、歐羅巴との衝突が、それだけ避け難きものとなる。歐羅巴が、その奪へる亞細亞を、正当なる所有者に返却せざる限り、東西の戦は實に運命的である！

さり乍ら来るべき東西戦を以て、聯合亞細亞と聯合歐羅巴との対戦と速断してはならぬ。左様なことは近き将来に於て決して在り得ることでない。亞細亞対歐羅巴の戦、世界史の新しき日が之によつて明け初め、総ての人々の眠りを覺すべき戦は、古に於て然りし如く、将来に於てもまた、亞細亞を代表する強国と、歐羅巴を代表する強国とがそれぞれ東西の戦士として選ばれ、固より其他の諸国の左袒するものありとしても、實際の戦としては、其等両国の決戦として戦はねばならぬ。端的に言へば、来るべき東西戦は、東西に亘る最強国の衝突争闘である。予は亞細亞に告げる——『概念を実在と混同して、東西戦とは、全亞と全歐との各聯盟が成立し、然る後に戦はるるものなるかに空想するな。他国の向背如何に拘らず、汝等のうちの一国が、先づ選ばれて亞細亞の戦士、従つて新しき世界の為の戦士となねばならぬのだ!』と。

一〇 欧羅巴・亞細亞・日本

叙し去り叙し来れる如く、亞細亞と歐羅巴とは、世界に於ける最大至高の対抗個体として今日に及んだ。亞細亞は、之を全体に就て言へば、實に人類の魂の道場であり、歐羅巴は、人類の知識を練る学堂であつた。かくて亞細亞の歴史は、根本に於て精神的であり、その革新又は推移は内面的に行はれたるが故に、既に述べたる如く表面に現れたる政治的乃至経済的变化は、歐羅巴のそれに比べて自から影薄からざるを得ず、往々にして人の意識にも上らなかつた。加ふるに其の変化が、徐ろに内面より行はれし上に、昔乍らの形式及び名称が、實質全く変じたる後までも、不思議なる執着を以て固執せられ、其為に一切の変化が一層不鮮明の度を加へた。

是くの如くにして亞細亞は、祖先の精神、祖先の信仰、祖先の遺風を昔乍らに護持し、また之を後昆に伝へることを、最も神聖なる義務と考へる。而して其の極端なる者に至りては、人間及び其の社会組織は、必ず発達か退転かの

一を免れぬといふこと、又は時勢の推移は何ものも変化せしめずば止まぬといふことを、強ひて考へまいとして居る。かくして万世不易といふことが、亞細亜の最も有力なる生活理想となつた。固より歐羅巴にも保守主義者が居る。さり乍ら彼等は、少くとも社会進化の法則を承認する。彼等と進歩主義者との論諍は、唯だ正しき速度と、正しき方向とに關してである。亞細亜の保守的精神は即ち然らず、時間の流に超出して、万古不動を固執する。そは宛も舟中の人が、固く瞑目して両岸を見ざるが故に、水流れず舟進まずと思惟するに似通ふ。

この亞細亜の保守主義は、言ふまでもなく利害得失相伴ふ。その善を擧ぐれば、此の精神あるが故に、亞細亜は過去に於ける真個に価値あるものを護持し、中斷せざる文化の系統を相承するを得た。亞細亜の精神的鍛錬は、今尚ほ往古と異なることなく、その根本的眞理は、今日まで伝統不斷である。例へば之を吾等日本人自身の意識について見よ。吾等は万葉集の歌を読み、熊狹言を見て、現に吾等の文学的・芸術的要求を満足させられて居る。千年以前の歌謡、數百年以前の舞踏が、そつくり其後の相すがたを以て、昨日読み出でられたる歌の如く、また今日舞ひ初められたる舞の如く、味ひ楽しまれるといふことは、唯だ亞細亜意識のみが能くするところであり、歐羅巴に於て決して其例を見ざるところである。

而も之と同時に、かかる保守的精神は、無用に歸したる過去の塵埃を、人類の行手に堆積し、その發展の自由を阻む。曾ては価値ありても今や無意味となりしもの、本来の精神を失ひ尽せる無用の形式が、尚ほ神聖なるものとして頑守せられ、之が為に国民的生命の犠牲たる流行を遮り、其水をして死水たらしめる。若し巧に之を排瀉し開放するに非ずば、社会は必ず病に罹らざるを得ない。かくの如き保守主義が、亞細亜衰微の一因となりしことは、拒むべきもなき事実である。

さり乍ら亞細亜の保守主義の眞個の意義は、決して旧き一切に対する愛着に在るのではない。万世不易とは、一切

が不変なるべしと固執することではない。それは信仰・道徳・制度・風習——総じて文化現象に於て、一時的なるものと永遠なるものとを分別し、その永遠的なものを飽迄も護持することでなければならぬ。換言すれば、一切現象の奥に横はる「万代不易」なるものを認識し、堅確に之を把持することでなければならぬ。更に換言すれば、現実其者のうちに常に万代不易なるものを實現し行くことでなければならぬ。天行は健なり、故に君主自體して止まずとは、取りも直さず永遠の理法を吾等の生活の上に實現すべく、不斷に努力すべきことを道徳するものである。形式と外觀とに囚はれることは、寧ろ亞細亞保守主義の至深の精神に悖るものとせねばならぬ。

此点に於て、近世歐羅巴の亞細亞に与へたる教訓は、尊き教訓である。歐羅巴は、人間の現實の生活が神聖なるものなること、その正しき充實發展が即ち理法の實現なること、之を無視するは軽て理法其者を無視するに外ならぬことを、鐵鞭を揮つて仮借なく打擲しつつ、而も実は自ら意識することなしに、わが亞細亞に教へて居る。そは既に述べたる如く、亞細亞本来の精神が、既に体得せる智慧であつたのに、今や却つて歐羅巴によつて否応なく再び之を体得させられつゝあるのだ。唯だ日本のみは、古より『易は不易にして變易』なる眞理を色読し、現實の生活に理法を實現すべき努力を怠らざりし故に、幸に今日あるを得た。此点に就て亞細亞諸国は、日本歴史について真個に学ぶところなればならぬ。

いま東洋と西洋とは、それぞれの路を行き尽した。然り、相離れては両ながら存在し難き点まで進み尽した。世界史は両者が相結ばねばならぬことを明示して居る。さり乍ら此の結合は恐らく平和の間に行はれることがあるまい。天国は常に劍影裡に在る。東西両強国の生命を賭しての戦が、恐らく從来も然りし如く、新世界出現のための避け難き運命である。この論理は、果然米国の日本に対する挑戦として現れた。亞細亞に於ける最強国は日本であり、歐羅巴を代表する最強国は米国である。この両国は、天意か偶然か、一は太陽を以て、他は衆星を以て、それぞれ国家の

象徴として居るが故に、その対立は宛も白昼と暗夜の対立を意味するが如く見える。この両国は、ギリシアとペルシア、ローマとカルタゴが戦はねばならなかつた如く、相戦はねばならぬ運命に在る。日本よ！ 一年の後か、十年の後か、又は三十年の後か、そは唯だ天のみ知る。いつ何時、天は汝を喚んで戦を命ずるかも知れぬ。寸時の油断なく用意せよ！

建国二千六百年、この優秀なる民族を以てして、日本は唯だ異邦より一切の文明を攝取して、自己の心魂を長養し来れるのみで、未だ曾て世界史に積極的に貢献するところなかつた。この永き準備は、實に今日のためではなかつたか。来るべき日米戦に於ける日本の勝利によつて、暗黒の世は去り、天つ日輝く世界が明けそめねばならぬ。